

独立行政法人国立美術館

平成13年度実績報告書

平成14年6月

平成13年度国立美術館実績報告書

東京国立近代美術館本館・工芸館-----	1
1．収集・保管等	
2．公衆への観覧	
3．調査研究	
4．教育普及	
5．その他の入館者サービス	
6．職員の研修の実施（その他の主務省令で定める業務運営に関する事項）	
- 2 東京国立近代美術館フィルムセンター-----	18
1．収集・保管等	
2．公衆への観覧	
3．調査研究	
4．教育普及	
5．その他の入館者サービス	
6．職員の研修の実施（その他の主務省令で定める業務運営に関する事項）	
京都国立近代美術館-----	29
1．収集・保管等	
2．公衆への観覧	
3．調査研究	
4．教育普及	
5．その他の入館者サービス	
6．職員の研修の実施（その他の主務省令で定める業務運営に関する事項）	
国立西洋美術館-----	55
1．収集・保管等	
2．公衆への観覧	
3．調査研究	
4．教育普及	
5．その他の入館者サービス	
6．職員の研修の実施（その他の主務省令で定める業務運営に関する事項）	
国立国際美術館-----	90
1．収集・保管等	
2．公衆への観覧	
3．調査研究	
4．教育普及	
5．その他の入館者サービス	
6．職員の研修の実施（その他の主務省令で定める業務運営に関する事項）	

東京国立近代美術館本館・工芸館

概要

(1) 設置年月日

本館 昭和27年6月6日

工芸館 昭和52年4月18日

(2) 施設の規模等

19,050㎡

展示面積 5,167㎡

(本館 地上4階,地下1階 17,192㎡ 展示面積4,599㎡)

(工芸館 地上2階 1,858㎡ 展示面積568㎡)

(3) 目的

当館は昭和27年に日本で最初の国立美術館として京橋の地に開館した。当時は先行するミュージアム施設としては国立博物館のみであり、従って当館は国立博物館に対して、広い意味で同時代の日本美術を常時展観できる近代美術館として性格づけられた。国立美術館四館のなかでの先行館であるため、設立目的の特性化に関する限定の度合いは最も少なかった。

開館以来の京橋の施設では、企画展示とコレクションの展示は両立しがたかったことから、双方の展示が可能となる新館を竹橋に得て、昭和44年に移転した。以後、近代美術館は、本館、工芸館ともに、企画展と並行して、近代日本の美術、工芸の歴史がたどれるような常設展示を行ってきたが、社会もまた美術館もその時々々の価値観を反映する企画展重視の傾向に流されてきた感がある。いまなお、展示事業は企画展で評価される事情は変わらず、美術館がコレクションの展示で観客をひきつけることは難しいのが現状であるが、近代日本の歴史的現実のなかで生み出された美術創造のエネルギー、枯渇することなく汲み出される美術創造の活力の持続を、一つの近代の歴史として社会に提示することこそ、東京国立近代美術館が社会に対して果たすべき役割であり使命と考え、コレクションの展示によって近代日本の美術と工芸を歴史的に伝え、そのことを通して近代日本の美術についての歴史認識が社会的に共有されるものとしていくことが中期的な課題と考えている。

もとより企画展も不可欠である。歴史化の試みが絶えず現在性の点から検証され、見直されていくためにも、また同時代を相対化してみるためにも、時には時代区分や日本という枠組みを越えて行っていきたいと考えている。

工芸館は工芸部門の専用展示・収蔵施設として発足した。当初、文化庁が日本伝統工芸展から買い上げた作品をコレクションの核とし、その公開を主な目的としたため、展示の偏りは否定できなかった。しかし特にこの10数年、この状況を改善するためコレクションの偏りの是正に努め、加えて平成7年のデザイン部門の発足を機に、コレクションも伝統的なものから造形的なものまで、多様な様相を見せる日本の近現代工芸に加え、欧米の近現代工芸、モダンデザイン(グラフィックデザイン、工業デザイン)へと広げてきた。それに連動して、常設展示のみならず、企画展も同様に、現実の工芸・デザイン界の多様性を反映したものへと変革することに努めてきた。こうした収集・展示活動を通じて、従来の御道具的工芸観を越えて、近代工芸・デザイン史を作り上げることが、今日果たすべき工芸館の役割だと考えている。

(4) 定員(本館、工芸館合計)

館長	副館長	事務系	研究系	合計
1	1	19(7)	17	38(7)名

(注1)()は法人本部からの併任(内数)

本館

館長	副館長	事務系	研究系	合計
1	1	19(7)	11	32(7)名

工芸館

館長	副館長	事務系	研究系	合計
			6	6名

(5) 予算額(フィルムセンターを含む)

運営費交付金 1,865,357千円

自己収入 84,444千円

計 1,949,801千円

1 収集・保管等

(年度計画)

(1) 中期計画に基づき、美術作品等を購入する。

(2) 寄贈・寄託品の積極的な活用を図る。

(3) 24時間空調等による作品の保存管理及び館内各所の環境モニターを実施する。

(4) 緊急に修復を必要とする収蔵品のうち、緊急性の高いものから各分野ごとに計画的に修復を行う。

(5) 国内外の美術館等に対し、修復保存に関する協力と普及の推進を図る。

(1) 美術作品等の購入

[本館]

近代日本の美術がたどれるように、収蔵品を体系的に充実させるという基本的な収集方針に基づき、平成13年度においては、美術作品購入等選考委員会及び評価員会(美術・写真部門)の審議を踏まえ、楠木清方《明治風俗十二ヶ月》等83点を、計200,390,600円で購入した。寄贈作品についても同様の手続きにより、当館の収蔵品にふさわしい作品として認められた作品20点について、寄贈受入の手続きを行った。内訳は、別表に示すとおり、日本画4点(購入2点、寄贈2点)、油彩4点(購入3点、寄贈1点)、版画8点(購入8点)、水彩・素描8点(購入6点、寄贈2点)、彫刻7点(購入4点、寄贈3点)、写真71点(購入60点、寄贈11点)、資料1点(寄贈1点)である。

[工芸館]

戦後の現代工芸系を中心にした体系的な近代工芸作品とモダンデザインの作品を収集するという基本的な収集方針に基づき、工芸作品及びデザイン作品について美術作品購入等選考委員会及び評価員会(工芸部門)の審議を踏まえ、井上雅之《タイトルなし》等30点を計28,918,500円で購入した。寄贈作品についても同様の手続きにより、当館の収蔵品にふさわしい作品として認められた作品13点について寄贈受入の手続きを行った。計43点の内訳は、別表に示すとおり、陶磁8点(購入8点)、ガラス2点(購入2点)、漆工5点(購入1点、寄贈4点)、木竹工4点(購入2点、寄贈2点)、染織7点(購入4点、寄贈3点)、金工5点(購入2点、寄贈3点)、デザイン11点(購入11点)、資料1点(寄贈1点)である。

(2) 寄贈・寄託品の積極的な活用

寄託については、1年毎の契約としている。本年度は、82件、193点の寄託契約の更新を行い、新たに4件、9点(洋画8点、写真1点)の寄託作品の受入れを行った。

これらの作品については「未完の世紀 - 20世紀美術がのこすもの」展で1点ならびに本年度末に始まった常設展示で4点、計5点を展示し、寄贈品は出品作品の約3割を展示した。

(3) 作品の保存管理

会場内では、作品を安全に展示するために館内の温度・湿度を常に適正な数値で管理した。また、空気汚染、照明等にも留意し、防災対策、保安対策に努めた。

保存庫は、温度・湿度についての数値の管理し、作品への影響を最低限とするよう空調管理を行った。

(4) 収蔵品修復

[本館]

平成13年度は、常設展示や貸出に備えて早急に修復措置を要する作品の中から、日本画4点、洋画2点、水彩・素描ほか15点、版画4点、彫刻3点の修理を行った。

[工芸館]

陳列等に比較的繁多に活用され早急に保存修復の措置が必要であった戦後の伝統工芸の主要作品から選択し、漆工作品14点の修理を行った。

2 公衆への観覧

(年度計画)

(1) 中期計画に基づき、展覧会や企画上映等を実施する。

(2) 全国の公私立美術館等と連携して地方巡回展を実施する。

(3) 展覧会については、その開催目的、想定する対象層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境、広報活動、過去の入場者数の状況等を踏まえて入場者数について目標を設定し、その達成に努める。

(4) それぞれの館の収蔵品について、その保存状況を勘案しつつ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に実施する。

(5) 入館者に対するアンケート調査を実施し、そのニーズや満足度を分析し、展覧会等に反映させる。

(1) 展覧会の実施

「現代ポーランド・ポスター」展

期間：平成13年4月3日(火)～5月6日(日)(30日間)

会場：フィルムセンター7階展示室

出品点数：75点

入館者数：763人(1日平均25人)(目標入場者数：780人)

戦後、ポーランドのポスターは国際的にも高い評価を確立し、注目を集めてきた。特に1960年代は“ポーランド派ポスター”と称されたように、その黄金時代であり、また70年代から80年代にかけては、怪奇と幻想とも言うべき独特のスタイルで、世界にその存在が知られた。今回は、当館の所蔵品のなかから、現代のポーランドのポスター約70点を展示し、その独特の世界を示そうとした。ヴァルデマル・シフィエジ、アンジェイ・ポンゴフスキ、ヤン・レニツァなど。

「写真再発見2」

期間：平成13年5月15日(火)～8月5日(日)(72日間)

会場：フィルムセンター7階展示室

出品点数：136点

入館者数：3,118人(1日平均43人)(目標入場者数：2,640人)

写真というメディアのもつ魅力と可能性を、身近なところから掘り起こす試みとして、「写真再発見」と名づけてコレクションの活用を図った小企画展。

展覧会は所蔵作品から国内外の写真家の作品によって構成され、「1. ヒト」(11作家20点)、「2. モノ」(14作家24点)、「3. 場所とできごと」(9作家27点)の三章と、

石元泰博<シカゴ、シカゴ>(25点)、須田一政<風姿花伝>(32点)の二つのシリーズの小特集、全124点を展示した。小特集は会期中間で展示替えを行った。(前期:5月15日-6月24日石元泰博<シカゴ、シカゴ>、後期:6月26日-8月5日須田一政<風姿花伝>)会場で配布するパンフレットには章ごとの解説を掲載し、また会場内には各章の作品のうち数点を選んで、鑑賞のヒントとなるような解説プレートを掲示した。

「1930年代日本の印刷デザイン - 大衆社会における伝達」
 期間:平成13年8月14日(火)~11月4日(日)(72日間)
 会場:フィルムセンター7階展示室
 出品点数:108点
 入館者数3,169人(1日平均44人)(目標入場者数:2,310人)

1930年代はモダンな都市生活が広まる一方で、社会運動が激化し、さらに戦争の足音が近づきつつある時代であり、そうした時代を反映して、メッセージを伝えようとする手法に様々な工夫がなされた時代であった。この展覧会では、当時作成されたポスター、チラシ、パンフレット、雑誌などを通して時代を「踊りだす文字」、「社会生活の標語化」、「グラフィズムの新感覚」、「商品化される市民生活」という4つの視点から探った。

<新聞雑誌関係記事>

装飾性から意思の伝達へ/NIKKEIDES1GN9(2001年9月)
 1930年代日本の印刷デザイン/日本印刷新聞(2001年9月12日)
 昭和初期の宣伝美術てんやわんや/芸術新潮(2001年10月号)
 時代に翻弄される「印刷」/印刷雑誌第84巻10号(2001年10月15日)

「現代の布」
 期間:平成13年9月22日(土)~11月18日(日)(50日間)
 会場:工芸館
 出品点数:67点
 入館者数7,534人(1日平均151人)(目標入場者数:6,600人)

布を作る過程そのものを表現として捉え、その上にいかなる形の創造がなされているか。本展は糸・織る・布というものを表現の技法・素材として捉える14名の作家による約70点の作品を展示し、布による新しい表現の可能性を探る試みとして企画した。

新聞・雑誌関係記事

“Threading a textiles culture” / The Daily Yomiuri, 2001年9月20日
 “とらえ直される布の現代 染と織、気鋭14作家が挑む” / 赤旗, 2001年11月4日
 Ayako Karino, Much more than mere cloth / The Asahi Shimbun Weekly, 2001年10月25日
 Japan Times

交換展

「京都の工芸 1945 - 2000」
 主催:東京国立近代美術館、京都国立近代美術館
 会場:工芸館
 出品点数:291点
 会期:平成13年12月1日(土)~平成14年2月11日(月)(54日間)
 前期:平成13年12月1日(土)~平成14年1月6日(日)
 後期:平成14年1月10日(木)~2月11日(月)
 入館者数:9,012人(一日平均167人)(目標入場者数:8,350人)

平成10年に近代京都の工芸の黎明期から揺籃期を展覧した「京都の工芸[1910-1940]」展を行ったが、本展はこれに続き、美術工芸が大きく展開、発展した第2次世界大戦終結後から2000年までの約50年を前回同様、陶芸、染織、漆芸の3分野に着目し、工芸の歴史や新しい動向を検証した展覧会である。平成13年度京都国立近代美術館の企画展として開催し、この後工芸館に巡回したものである（詳しくは京都国立近代美術館の自己点検評価報告書参照）。

新聞・雑誌関係記事

Takeshi Kuroiwa , A dynamic side of Kyoto crafts / The Daily Yomiuri 2001年1月20日

加藤義久（共同通信社）『接近する工芸と美術 「京都の工芸」展など』 / 徳島新聞 2001年1月25日他

鎮目朗『陶芸、染織、漆芸、木工の180人「京都の工芸」』 / 陶業時報 2002年1月5日

<OUT ON THE TOWN> Crafts of Kyoto: 1945-2000 / METROPOLIS 2002年1月11日

「未完の世紀 20世紀美術がのこすもの」展

期間：平成14年1月16日（水）～3月10日（日）（47日間）

会場：本館

共催：読売新聞社

協賛：日立ハイテクノロジーズ

助成：アサヒビール芸術文化財団 東洋文化財団

出品点数：391点

入場者数：74,058人（1日平均1,576人）（目標入場者数：51,900人）

鑑賞環境の整備とサービス機能の向上をはかる増改築工事のため二年半のあいだ休館した本館が、そのリニューアル・オープンを記念して、21世紀にむけて当館の基本的な指針を示すことを期した展覧会。

激動の世紀と言われる20世紀、美術もまた比類ない変貌を遂げたが、この展覧会に期したものは、20世紀文明のなかにある私たちが、20世紀の美術をどのように受けとめようとするのか、前向きに振り返る機会となること、20世紀の美術を単に過去のものとして、その変遷を跡づけるのではなく、美術を20世紀文明のなかでとらえ直すことから、私たちが引き継ぐものは何かを考える機会を企画したものである。その意味を込めてテーマも「未完の世紀」と謳った。

新装なった美術館の全館を使用して、海外作家の作品を含め、絵画・彫刻・版画・写真・工芸・資料など391点（うち外国作家の作品は93点）を、8章16節に区別して展示した。20世紀文明への視点をきわだたせた章立ては、大きな推移をたどれるように年代で区切り、各章の間を単線的につなぐことを控え、ひとつの時代の文化的な多面性を示すことに意を注いだ。美術館の見解として、展覧会をより一般的な年代区分からなる8つの時代区分で構成し、ひとつの歴史的なガイドラインを提示しつつも、観客の一人一人が20世紀の歴史と20世紀の美術について、それぞれの視点から読みとれるように、提示することを心がけた。

出品作391点のうち館蔵品は184点、独立行政法人国立美術館内の他の三館から30点、他は国内の国公私立美術館51館と個人所蔵家からの出品による。

会期中に展覧会に因んだ4回の連続講演会と「イヴニング・ギャラリー」と称したギャラリー・ツアーを夜間開館日の毎金曜日に8回開催、それぞれ延べ328人、383人の参加があった。

また、この展覧会に関連して、フィルムセンターでは所蔵映画フィルムによる「フィルムで見る20世紀の日本」と題した企画上映が開催された。

「未完の世紀」展 展評

- ア．北澤憲昭：＜美術＞東京国立近代美術館の改装企画「未完の世紀」展 ジャンル超え総覧へ意欲
朝日新聞 2002年1月21日（朝刊）32面
- イ．松本透：日本近代美術の100年 未完の世紀 20世紀美術がのこすもの 変化と矛盾と"時代の子"たち
読売新聞 2002年1月22日（朝刊）32面
- ウ．竹田博志：時代の混とん 端的に「未完の世紀」展
日本経済新聞 2002年1月23日（朝刊）36面
- エ．(青)：東京国立近代美術館本館「未完の世紀 - 20世紀美術がのこすもの」リニューアル・オープン展
東京新聞 2002年2月7日（朝刊）28面
- オ．浅野徹：＜美術＞東京国立近代美術館リニューアル展 激動の世紀たどる
日本経済新聞 2002年2月14日（夕刊）
- カ．三田晴夫：＜現代アート考＞美術の20世紀 戦争画含む初の通史展
毎日新聞 2002年2月19日（夕刊）6面
- キ．嶋崎吉信：近美リニューアル・オープン記念展「未完の世紀 - 20世紀美術がのこすもの」展を見て
あいだ No. 74 2001年2月20日発行 p. 29
- ク．Linda Inoki. Visual Art Tokyo: A new look at the art of war.
FINANCIAL TIMES. March 6, 2002.
- ケ．榎木野衣：REVIEWS 過剰の世紀 - 国民国家美術がのこしたものの
BT 美術手帖 no.818, 2002年4月号 p.198-199.
- コ．Irmtraud Schaarschmidt-Richter:Unvollendetes Säkulum,
FRANKFURTER ALLGEMEINE ZEITUNG, April 7,2002

「カンディンスキー展」

期間：平成14年3月26日（火）～5月26日（日）（54日間（うち平成13年度6日間））

会場：本館

共催：NHK，NHKプロモーション

協力：アエロフロート・ロシア航空，フィンランド航空，日本航空

出品点数：約70点

入場者数：6,598人（1日平均1,099人）（目標入場者数：6,000人）

（平成13年度中）

なお、本展覧会に係る自己点検評価は平成14年度に行う予定である。

本館常設展

期間：平成14年3月26日（火）～5月26日（日）（54日間（うち平成13年度6日間））

会場：本館

出品点数：321点

入場者数：594人(1日平均99人)(目標入場者数：650人)

(平成13年度中)

なお、本展覧会に係る自己点検評価は平成14年度に行う予定である。

工芸館常設展

入場者数13,466人(目標入館者数 27,000人)

ア.「近代工芸の百年」 3回陳列替え

会場：東京国立近代美術館工芸館

会期：平成13年4月10日(火)～5月13日(日) (47日間)

出品点数：120点

入場者数：3,495人(1日平均117人)(目標入場者数：9,666人)

所蔵作品によって近代工芸百年の歴史を示そうとするもの。明治から現在まで、それぞれの時代に活躍した著名な工芸家を取り上げ、陶磁、染織、漆工、金工、ガラス、木竹工など様々な分野の作品を制作年代順に列べることで、我が国の近代工芸の全体的な流れを見渡そうとした。「明治中期から後期(欧米向け輸出工芸)」、「大正時代から昭和戦前期(生活や古典への回帰)」、「昭和戦前期(構成派と民芸)」、「昭和戦後期(伝統工芸の誕生)」、「1960年代から1990年代(個性表現とオブジェ)」、「1960年代から1990年代(クラフトデザインと人形)」という構成で展示した。

新聞・雑誌関係記事

福島建治「偏西風 近代工芸の百年」/朝日新聞2001年5月11日

イ.「近代の工芸 1991-2000年の新収蔵作品から」

会場：東京国立近代美術館工芸館

会期：平成13年5月22日(火)～7月8日(日) (40日間)

出品点数：459点

入館者数：3,219人(一日平均83人)(目標入場者数：3,324人)

工芸館ではここ10年くらい、近代の流れや現代の動向を示す工芸及びデザインの優れた作品の収蔵に力を入れてきた。本展では、その1991年から2000年の間に収蔵された作品によって、当館の収集の軌跡を示し、併せてそうした近・現代における工芸及びデザインの多様な展開を提示した。新収蔵の作家約200人による作品約230点を選択し、会期を前期と後期に分けて展示した。

ウ.「所蔵作品による近代日本の美術と工芸 暮らしをいろどる」

会場：工芸館

会期：平成13年7月20日(金)～9月9日(日) (45日間)

出品点数：121点

入場者数：6,647人(一日平均148人)(目標入場者数：6,210人)

普段一緒に並べられることの少ない、工芸作品と美術作品を一緒にならべることで、衣食住など日本人の暮らしのもつ豊かさを示すことを試みた。

<新聞・雑誌関係記事>

今週の1点 聞香/毎日新聞夕刊(2001年8月15日)

情報館 美術館・博物館 暮らしをいろどる/読売新聞朝刊(2001年8月29日)

エ.「近代工芸とデザインの東西」

会場：工芸館

会期：平成14年2月23日(土)～4月14日(日)(32日間)
 出品点数：143点
 入場者数：5,399人(一日平均169人)(目標入場者数：7,800人)

近代以降、生活様式を西洋化させてきた日本では、工芸とデザインの分野においても「西洋」は多くの作家に何らかの陰影を落としてきた。この展覧会では、とくに西洋の装飾美術、デザイン、工芸と関わりが深く、かつ近代の工芸とデザインの歴史のなかでも、特色のある新しい傾向や運動へと発展した作品を選び、関連する西洋の装飾美術やデザイン作品とあわせて展示した。全体は、1.クリストファー・ドレッサーと明治の輸出工芸、2.アール・ヌーヴォー様式の広がり、3.アール・デコと工芸の「構成派」、4.伝統の見直し、5.ガラスを表現の素材に、6.クラフトとインダストリアル・デザインの6つのテーマから構成された。

(2) 収蔵品の貸与

計111件、2,607点の作品の貸し出しを行った。

(3) アンケート調査の実施

つぎのとおり、「未完の世紀 20世紀美術がのこすもの」、「近代工芸とデザインの東西」の展覧会及びギャラリートークにおいて、アンケート調査を実施した。

[展覧会]

「未完の世紀 20世紀美術がのこすもの」

実施期間：平成14年2月28日(木)～平成14年3月2日(土)(3日間)

結果：展覧会について約8割の肯定的意見があった。

「近代工芸とデザインの東西」

実施期間：平成14年2月28日(木)～平成14年3月2日(土)(3日間)

結果：展覧会について約8割の肯定的意見があった。

[ギャラリートーク]

「未完の世紀 20世紀美術がのこすもの」

実施期間：平成14年3月8日(金)(1日間)

結果：ギャラリートークについて約8割の肯定的意見があった。

「近代工芸とデザインの東西」

実施期間：平成14年3月9日(土)(1日間)

結果：ギャラリートークについて約5割の肯定的意見があった。

3 調査研究

(年度計画)

- (1) 中期計画に基づき、調査研究を計画的に実施する。
- (2) 客員研究員を招聘し、調査研究活動を推進する。
- (3) 各館の調査研究の成果については、研究紀要、図録への論文発表等によって公表する。

(1) 調査研究の実施及び成果の発表

20世紀美術に関する総合的調査研究

研究者 本館・工芸館の学芸職員全員。

展覧会「未完の世紀 - 20世紀美術がのこすもの」のカタログに、テキスト、時代区分の章解説、コラムを分担執筆。

市川政憲「20世紀文明と文化のはざまに」同展カタログのテキスト

松本透「戦後美術の同時代性について」同展カタログのテキスト

鈴木勝雄 『現代の眼』532号で同展の特集を編集。
 ロシアにあるカンディンスキーの作品に関する調査研究
 研究者 中林和雄、鈴木勝雄
 中林和雄「カンディンスキー、時代の子」カンディンスキー展カタログのテキスト
 鈴木勝雄「カンディンスキーとロシア - 1913年の戦略」同展カタログのテキスト
 小倉遊亀に関する調査研究
 研究者 尾崎正明、古田亮
 調査継続中。平成14年度の展覧会で成果発表。
 明治大正期におけるロマンティシズムの水脈の検証
 研究者 市川政憲、蔵屋美香
 継続中。平成14年度の展覧会で成果発表。
 海外における近代日本美術の研究成果・態勢の調査並びに内外の共同研究の推進（科学研究費補助金）
 研究代表者 松本透
 報告書作成中。
 現代的造形表現としての布の可能性に関する調査研究
 研究者 今井陽子
 「現代の布 - 染と織の造形思考」展カタログのテキストを執筆。
 『現代の眼』530号で特集を編集。
 「今日の染織造形」、大阪芸術大学通信教育教科書『繊維基礎実習』
 明治時代の工芸概念の胚胎と変遷に関する研究のための資料調査
 研究者 金子賢治、北村仁美
 金子賢治「海外に渡った明治の染織」『ドレスタディー』40号
 北村仁美「クリストファー・ドレッサーへの視点」『現代の眼』527号
 戦後の工芸運動確立期に関する研究
 研究者 金子賢治、諸山正則、今井陽子、木田拓也
 金子賢治「現代陶芸の理論 - 西洋世界と日本」『現代の眼』529号
 諸山正則「漆工品の補修と大場松魚《金銀平文鶴文箱》」『現代の眼』531号
 「河井寛次郎の木彫」千葉市美術館展覧会カタログ
 今井陽子「友禅における染の現代 - 森口華弘の作品をめぐって」『現代の眼』532号
 木田拓也「昭和の桃山復興（三）備前・金重陶陽」『陶説』586号
 1930年代日本のポスターに関する調査
 研究者 樋田豊次郎
 「大衆社会におけるデザイン」「1930年代日本の印刷デザイン」展カタログのテキスト。
 明治大正期における図案集の研究 - 世紀末デザインの移植とその意味 - （科学研究補助金）
 研究代表者 樋田豊次郎
 報告書作成中。
 展覧会場用映像ソフトについての調査研究（凸版印刷と共同研究）
 研究代表者 尾崎正明

4 教育普及

(年度計画)

- (1) 国内外の美術館等との交換図書等による資料の積極的収集を図ると共に情報コーナーの設置等レファレンス機能の充実を図る。
- (2) 館が収蔵している作品のデータ・画像入力を行い、広く公衆のニーズに応えるため、データベース化を推進する。
- (3) 国内外の美術館等との連携を強化し、情報コーナー、アトライブラリー、資料閲覧室等、情報資料関係の施設の整備・充実を図る。
- (4) 児童生徒を対象とした教育普及事業を実施する。
- (5) 講演会等を実施する。
- (6) 美術館関係者を対象とした、研修事業を実施する。
- (7) 他の機関が実施する研修への協力を実施する。
- (8) 各館それぞれに研究成果を踏まえて出版事業等を行う。
- (9) それぞれの館のホームページを積極的に活用して広く公衆への普及及び広報を行う。また、4館共同の広報体制を整備するため法人のホームページを作成し、中期目標、中期計画、年度計画等を公表する。
- (10) ボランティア等の在り方や企業との連携等について検討を行う。
- (11) 新たな美術館施設の円滑な運営について

(1) 資料収集及びレファレンス機能の充実

本館及び工芸館のアトライブラリーについては平成13年度中に合わせて13,497冊の収蔵を図り、平成13年度末現在の総所蔵冊数は69,629冊となった。

平成13年度中に行った資料の交換件数は国内機関との間で265件、国外機関との間で206件であった。

本館の3階会場内に情報コーナーを設置し、レファレンス機能の充実を図った。

本館所蔵冊数

本年度収蔵図書	12,199冊
内、図書	1,517冊
カタログ	10,682冊
所蔵総冊数	65,876冊
図書	22,056冊
カタログ	43,820冊
雑誌書誌数	1,686誌

工芸館所蔵冊数

本年度収蔵図書	1,298冊
内、図書	833冊
カタログ	465冊
所蔵総冊数	3,753冊
図書	3,247冊
カタログ	506冊
雑誌書誌数	294誌

(2) 作品データ等のデータベース化の推進

ア．当館が所蔵している美術作品(8,854点)についてデータ・画像入力を行い、データベース化を進めた。

本年度末現在、文字データについては、全収蔵作品、画像データのうち、約7割が入力済みとなった。

イ．当館が所蔵している工芸作品(2,967点)についてデータ・画像入力を行い、デー

データベース化を進めた。

本年度末現在、文字データについては、全収蔵作品、画像データのうち、約3割が入力済みとなった。

(3) 資料閲覧室等の整備

本館、工芸館とも平成14年度からの閉架式閲覧サービス開始をめざして、閲覧室の開室準備と資料の整理を進めた。

本館については、平成14年1月16日からアトライブラリを開室した。

工芸館についても、建物北側への閲覧室の増設を行い、平成14年度当初の開室を目指して準備中である。

(4) 児童生徒に対する教育普及事業の実施

小中学生向け鑑賞教室(常設展「近代日本の美術と工芸」期間中に10回開催)

工芸館において夏休み期間中の水曜日、午前と午後の2回、館員とともに工芸と美術作品を見て回る子供向けのギャラリー・トークを開催。参加者は次のとおりであった。

7月25日	午前	小学生：8名	中学生：13名	一般：8名
7月25日	午後	小学生：7名	中学生：32名	一般：12名
8月1日	午前	小学生：15名	中学生：22名	一般：8名
8月1日	午後	小学生：3名	中学生：18名	一般：7名
8月8日	午前	小学生：17名	中学生：17名	一般：22名
8月8日	午後	小学生：4名	中学生：3名	一般：6名
8月15日	午前	小学生：22名	中学生：23名	一般：26名
8月15日	午後	小学生：23名	中学生：13名	一般：23名
8月22日	午前	小学生：2名	中学生：1名	一般：4名
8月22日	午後	小学生：9名	中学生：0名	一般：6名

総入館者数 374名

(5) 講演会等の実施

ギャラリー・トーク

作品の理解を援助するとともに、美術館そのものを身近に感じてもらうことをねらいとして、以下のように学芸員が直接、観覧者に説明をするギャラリー・トークを実施した。

なお、本館の「未完の世紀 - 20世紀美術がのこすもの」展、工芸館の「現代の布」展については、特別に外部から専門家や作家を招いた。

[本館] 開館中の月の金曜日

第1回 1月18日(金) 午後6時から(約45分)

担当：美術課長 松本 透

テーマ：「1960 - 70年代の美術」

参加人数：31名

第2回 1月25日(金) 午後6時から(約45分)

担当：美術課主任研究官 古田 亮

テーマ：「昭和戦前期の日本画」

参加人数：26名

第3回 2月1日(金) 午後6時から(約45分)

担当：企画課研究員 鈴木勝雄

テーマ：「1950年代のリアリズム」

参加人数：28名

第4回 2月8日(金) 午後6時から(約50分)

担当：慶応義塾大学助教授 近藤幸夫

テーマ：「《産声》に見るブランクーシ作品の特徴」

参加人数：51名

第5回 2月15日(金) 午後6時から(約50分)

- 担当：土田真紀
 テーマ：「柳宗悦：白樺と民芸をつなぐもの」
 参加人数：43名
- 第6回 2月22日（金） 午後6時から（約50分）
 担当：美術課研究員 増田 玲
 テーマ：「森山大道《にっぽん劇場》とその周辺」
 参加人数：29名
- 第7回 3月1日（金） 午後6時から（約50分）
 担当：水沢 勉
 テーマ：「東京1934年。藤牧義夫《赤陽》と《絵巻隅田川》」
 参加人数：55名
- 第8回 3月8日（金） 午後6時から（約50分）
 担当：副館長 市川政憲
 テーマ：「もう一つの美術史」
 参加人数：112名
- 本館計375名

[工芸館] 開館中の月の第二・第四土曜日

- 第1回 4月14日（土）
 担当：工芸課主任研究官 樋田豊次郎
 テーマ：「近代工芸百年の歩み」
 参加人数：12名
- 第2回 平成14年6月9日（土）
 担当：工芸課主任研究官 諸山正則
 テーマ：「現代工芸の動向と当館の収集方針」
 参加人数：15名
- 第3回 8月11日（土）
 担当：工芸課研究員 木田拓也
 テーマ：「生活様式と工芸作家の意識」
 参加人数：25名
- 第4回 9月8日（土）
 担当：工芸課研究員 北村仁美
 テーマ：「工芸作品の素材と技法」
 参加人数：23名
- 第5回 9月22日（土）
 担当：織物作家 上原美智子
 テーマ：「細糸にかける思い」
 参加人数：40名
- 第6回 10月13日（土）
 担当：テキスタイルデザイナー 須藤玲子
 テーマ：「創造性とデザインの機能」
 参加人数：52名
- 第7回 10月27日（土）
 担当：工芸課研究員 今井陽子
 テーマ：「布をみる」
 参加人数：17名
- 第8回 12月8日（土）
 担当：工芸課主任研究官 諸山正則
 テーマ：「京都の工芸 戦後の動向」
 参加人数：25名

第9回 1月12日(土)

担当：京都国立近代美術館主任研究官 松原龍一

テーマ：「京都の工芸 時代と人」

参加人数：30名

第10回 3月9日(土)

担当：工芸課研究員 北村仁美

テーマ：「近代工芸とデザインの東西 明治から現代まで」

参加人数：2名

計241名

講演会

本館では「未完の世紀 - 20世紀美術がのこすもの」展について、来館者の理解をより深めてもらうために講演会を開催した。担当学芸員がその意図、内容を解説するとともに、外部の専門家を招いて異なる視点からも展覧会について論じてもらった。

第1回 1月26日(土) 午後2時から(約90分)

担当：副館長 市川政憲

テーマ：「未完の世紀 - 20世紀美術がのこすもの 戦前編」

参加人数：81名

第2回 2月9日(土) 午後2時から(約90分)

担当：美術課長 松本 透

テーマ：「未完の世紀 - 20世紀美術がのこすもの 戦後編」

参加人数：104名

第3回 2月16日(土) 午後2時から(約90分)

担当：神奈川県立近代美術館副館長兼学芸課長 山梨俊夫

テーマ：「モダニズム絵画を見る」

参加人数：71名

第4回 2月23日(土) 午後2時から(約90分)

担当：林 道郎

テーマ：「『物質』と『飾り』のあいだで：日本の戦後美術を縁どる言葉たち」

参加人数：72名

計328名

パフォーマンス

「未完の世紀 20世紀美術がのこすもの」展の出品作家・松澤宥は、60年代半ば以後、一貫して言葉(文字と音声)による「観念芸術」を提唱・実践しているが、今回は、あと80年で、大気の組成が生物の生存に適さないものになるという「80年問題」に着想したテキストの提示と朗読によるパフォーマンスを行った。

本館 平成14年2月2日(土)

作家：松澤 宥

テーマ：「80年問題22番、東京国立近代美術館にて」

参加人数：197名(展覧会場内において)

(6) 他機関の研修への協力

次のとおり、大学生の学芸員資格取得のための博物館実習等に協力した。

名古屋市立宝神中学校東京分散学習への協力

工芸館において4名を受け入れ。

大学生の学芸員資格のための博物館実習への協力

工芸館において4名を受け入れ。

千葉県市原市立海上小学校の美術鑑賞教育への協力

工芸館において30名を受け入れ。
早稲田大学国際部プログラム「日本美術調査研究」への協力
工芸館において42名を受け入れ。

(7) 発行事業の実施

「平成12年度年報」 発行準備中

「東京国立近代美術館概要」 発行済

展覧会、企画上映に伴う図録の発行
企画展等

ア. 「1930年代 日本の印刷デザイン 大衆社会における伝達」

29×22.2cm/82P

本文：大衆社会におけるデザイン（樋田豊次郎）

1930年代の日本の印刷技術（本多真紀子）

戦前日本社会運動の足あと 1930年代ポスターの背景（梅田俊英）

編集：樋田豊次郎、諸山正則

イ. 「現代の布 染と織の造形思考」

28×22.7cm/96P

本文：「布」というかたち（今井陽子）

編集：金子賢治、今井陽子、北村仁美

ウ. 「京都の工芸[1945-2000]」

30×20cm/272P

本文：京都の工芸[1945-2000]（松原龍一）

編集：松原龍一、土岐加寿子、南野朋子

エ. 「未完の世紀」展図録

29.8×22.5cm/48P+280P

本文：20世紀文明と文化のはざまに（市川政憲）

戦後美術の同時代性について（松本 透）

編集：東京国立近代美術館（市川政憲，松本 透，尾崎正明，鈴木勝雄，保坂健二郎）

オ. 常設展等

「常設展 近代工芸の百年」

28×21cm/12P

本文：所蔵品でたどる近代工芸の百年（樋田豊次郎）

出品目録

「常設展 [近代の工芸] 1991-2000年の新収蔵作品から」

29.6×21cm/24P

本文：1991-2000年の新収蔵作品について（諸山正則）

図版

出品目録

制作： 印象社

「所蔵作品による近代日本の美術と工芸 暮らしをいさぐる」

28×21cm/12P

展示解説

出品目録

「現代の眼」 5回発行済（年度計画 6回発行）

第527号 4-5月号

特集：建築への／からのまなざし

第528号 6-7月号

特集：写真史研究の現在

第529号 8 - 9月号

特集：現代陶芸の現在地

第530号 10 - 11月号

特集：現代の布 - 染と織の造形思考 「現代の布」展によせて

第531号 12 - 1月号

特集：本館リニューアル

第532号 1 - 2月号

特集：未完の世紀 - 20世紀美術がのこすもの

「未完の世紀 - 20世紀美術がのこすもの」展によせて

(8) ホームページの活用

ホームページでは美術館の概要、企画展を含む活動一般、所蔵作品に関するデータなどの情報の公開に努めるほか、職員募集などの事務的な活動にも積極的に活用して広く公衆への普及及び広報を行った。

また、ホームページを新しいレイアウトにするための検討を行い、できるものから順次更新作業を行った。法人化に伴い、法人のホームページを作成し、中期目標、中期計画、年度計画等を公表するとともに当館のホームページとリンクし、積極的に利用の促進を図った。

ホームページアクセス件数 189,924件 (フィルムセンターを含む。)

(9) ボランティア・企業との連携等の検討

他の美術館の実践事例等を参考にボランティア制度の、導入に向けた検討を行った。

展覧会を開催するにあたり、新聞社、企業、メセナ財団より協力及び支援を得て、企画運営、広報普及、利用者サービス等の充実を図った。

ア、「未完の世紀 20世紀美術がのこすもの」展

- ・読売新聞社：カタログ製作、広報（チラシ・ポスター・紙面掲載）等について支援協力を得た。
- ・財団法人 アサヒビール芸術文化財団：運営費（広報用経費）を助成して頂いた。
- ・財団法人 東洋信託文化財団：運営費（広報用経費）を助成して頂いた。
- ・凸版印刷株式会社：共同研究契約に基づき、教育普及等に関する調査及び研究を行った。これにより、観覧者等に最新の映像ソフトを用いての美術史及び作品解説を行い、芸術文化の振興に寄与した。

工芸館においては、積極的な普及広報を図るため、次の2誌に所蔵品を取り上げた連載を展開した。これにより、広く公衆に対し、近現代工芸及び東京国立近代美術館の活動の周知が図られたと考えている。

ア「美への誘い～東京国立近代美術館工芸館所蔵作品から」『月刊チャイム銀座』（発行：株式会社和光）

イ「相承の系譜 東京国立近代美術館工芸館所蔵品より」『茶道誌淡交』（発行：淡交社、月刊）

(10) 美術館施設の整備

平成13年8月に本館の改修を終え、平成14年1月16日「未完の世紀 - 20世紀美術がのこすもの」展で本館を再開館した。

5 その他の入館者サービス

(年度計画)

(1) 高齢者・身体障害者等に配慮した設備等の充実を図る。建物のバリアフリー化を進め、高齢者・身体障害者等にやさしい美術館を目指す。

(2) 案内情報の充実、車椅子の提供等、入館者サービスの充実を図る。

- (3) 展示説明の見直しなど、鑑賞環境の充実に努める。又、音声ガイドの検討及び作品リストの無料配布等を行う。
- (4) 小中学生の常設展入場料の無料化や観覧時間拡充の検討を行う。
- (5) フリーゾーンの活用、レストラン及びミュージアムショップの充実など附属施設の充実を図る。

(1) 高齢者・身体障害者等に配慮した設備等の充実等

本館では車椅子で利用できるエレベーター2基の増設、車椅子用リフトの設置等により高齢者・身体障害者等に対するバリアフリーに配慮している。

[当館の実施状況] は平成13年度の新規実施事項

[本館]

- 外部との出入りに車椅子使用者が通行できるスロープを設置。
- 外部との出入り口を自動ドア化。
- 車椅子対応エレベーターの設置。
- 車椅子で利用できる多目的トイレの3カ所の設置(増設2カ所)
- 手すり付き小便器を設置。

[工芸館]

- ・外部との出入りに車椅子使用者が通行できるスロープを設置。
- ・車椅子で利用できる多目的トイレの1カ所の設置。
- ・手すり付き小便器を設置。

(2) 案内情報の充実、車椅子の提供等、入館者サービスの充実

[当館の実施状況] は平成13年度の新規実施事項

[本館]

案内情報のためのカウンターを設けるとともに、展示作品のキャプション等文字表示を大きくするなど適切な改善を行った。

- 貸し出し用車椅子5台を用意。
- 貸し出し用ベビーカー2台を用意。

[工芸館]

- 貸し出し用車いす3台を用意。
- 貸し出し用ベビーカー1台を用意。

(3) 鑑賞環境の充実

[当館の実施状況] は平成13年度の新規実施事項

[本館・工芸館]

展覧会内容に応じ、「会場ガイド」等を無償配布した。

(4) 小中学生の常設展入場料の無料化や観覧時間拡充の検討

小中学生の常設展入場料の無料化を次のとおり実施した。なお、共催展であるカンディンスキー展についても小中学生の入場を無料とした。

- 本館 平成14年3月26日からの「カンディンスキー」展期間中の常設展から実施
- 工芸館 平成14年2月21日からの「近代工芸とデザインの東西」展から実施

また、本館は、平成14年1月16日のリニューアルオープン展「未完の世紀展」から従来の金曜日に加え、木曜日午後8:00までの開館を実施した。

会期中、一日の入館者数に対して夜間開館時間帯の入館者数の占める割合は、木曜日(8日間)が平均8%(最大12%)、金曜日(8日間)が平均13%(最大18%)であった。

(5) フリーゾーンの活用、レストラン及びミュージアムショップの充実など附属施設の充実

[当館の実施状況] は平成13年度の新規実施事項

[本館]

本館においては今回の改修にあわせレストラン(60席)を開設するとともに、ミュージアムショップを開設した。レストランは土・日・火・水曜日は午後6:30まで、木・

金曜日は午後9：30まで営業し、ミュージアムショップは本館開館時間にあわせ、木曜日、金曜日は夜8時まで営業し、入館者へのサービスに努めた。

1階エントランスホール、4階、3階及び2階に休憩室を設け休憩用椅子を多数配置した。なお1階エントランスホールは展覧会入場者だけでなく全ての来館者が憩える場所として提供した。

3階ロビーに展示作品等の情報を提供する情報端末機の設置、カタログ等を置く情報コーナーを開設した。

[工芸館]

- ・工芸館においては、館全体が狭あいのため、ミュージアムショップ等のスペース確保が難しいが、館内スペースを活かして、グッズの販売を行い、来館者へのサービスに努めた。

6 職員の研修の実施（その他の主務省令で定める業務運営に関する事項）

（年度計画）

職員の意識向上を図るため、次の職員研修を実施する。

1) 新規採用者・転任者職員研修、2) 接遇研修

外部の研修に職員を積極的に派遣し、その資質の向上を図る。

本館リニューアル・オープンにあたって、若手事務職員・研究員を対象に、展覧会事業の概要、接遇（特に苦情対応）に関する必要な知識及び技術等を習得させ、美術館職員としての資質等の向上を図ることを目的とした研修を実施した。

開催日：平成13年12月19日（水）

受講者：職員15名

講義：勤務時間・服務規律、警備・防災管理体制等（庶務課長）

展覧会事業について「リニューアル・オープン記念展」（副館長）

特別講義・実習（B.M.C.代表 塚本 晃子）

テーマ：ブラッシュ・アップ「苦情対応と説明能力向上等」

新任係長を東京大学係長研修に派遣した外、施設担当職員を文部科学省施設担当職員研修に派遣した。

- 2 東京国立近代美術館フィルムセンター

概要

(1) 設置年月日

フィルムセンター 昭和44年4月1日

(2) 施設の規模等

11,256㎡

展示面積 336㎡

(フィルムセンター 地上7階,地下3階 6,912㎡)

(相模原分館 地上2階,地下2階 4,344㎡)

(3) 目的

フィルムセンターは、同種の施設が皆無であることもあり、映画に関する総合的な歴史博物館として映画フィルムや映画の関連資料を可能なかぎり網羅的に収集、保管、公開し、わが国の映画文化全般にわたって中核的な研究・普及機関としての役割を担っていると考える。おおむね次のような歴史的経緯を経て今日に至っている。すなわち、フィルムセンターは、昭和27年の近代美術館開館当初にフィルム・ライブラリーとして発足した。その文化的、芸術的、歴史的価値に鑑みて、映画についても美術館の対象領域と位置付けられたものである。発足した当時は、美術展に関連した美術映画を週1、2回程度上映するとともに主に劇映画フィルムの収集を行っていた。昭和37年にフランスとの交換映画祭を開催したことを契機に、以後諸外国との交換映画祭が活発に開催されるようになり、上映活動も1日1回程度に拡充された。また、同時に諸外国で開催される映画祭での日本映画上映のためにフィルム収集が活発に行われるようになった。

その後、昭和42年から3年間、戦後GHQに接收された可燃性の日本映画の返還が行われ、これの不燃化作業が実施されることで、所蔵映画フィルムの充実が図られた。昭和44年の美術館の移転に伴い、昭和45年にはフィルム・ライブラリー業務の拡充と上映施設及び映画に関する展示室が整備されてフィルムセンターとして開館した。昭和61年に映画フィルム専用の保存施設が神奈川県相模原市に設置された。平成7年には旧施設の全面改築によって施設規模も拡充し、収集・保存・上映事業も充実して、今日に至っている。

(4) 定員

フィルムセンター

館長	副館長	事務系	研究系	合計
-	-	5	6	11

(5) 予算額(本館・工芸館含む。)

運営費交付金 1,865,357千円

自己収入 84,444千円

計 1,949,801千円

1 収集・保管

(年度計画)

- (1) 中期計画に基づき、美術作品等を購入する。
- (2) 寄贈・寄託品の積極的な活用を図る。
- (3) 24時間空調等による作品の保存管理及び館内各所の環境モニターを実施する。
- (4) 緊急に修復を必要とする収蔵品のうち、緊急性の高いものから各分野ごとに計画的に修復を行う。
- (5) 国内外の美術館等に対し、修復保存に関する協力と普及の推進を図る。

(1) 映画フィルム等の収集

当フィルムセンターにおける映画フィルムの収集状況は、平成13年度末現在、日本映画21,387本、外国映画6,833本である。これらの映画は、劇文化・記録 ニュース アニメーション テレビ といった分野別に収集されている。いずれの場合も全製作本数自体の正確な数が不明であるため、その収集率を示すことはできないが、日本劇映画のこれまでの製作本数を戦前13,000作品、戦後15,000作品とした場合のフィルムセンターの収集率は全体で13%程度と推定される。美術作品と異なり、映画フィルムは複製物であるという物理的な特質から、本来は残存している全ての映画フィルムを収集することが可能であるが、限られた予算の範囲で収集を行う必要から、散逸又は劣化が懸念されるものの購入や不燃化を優先的に行いながら、映画芸術的に優れた作品、映画史的に重要な作品及びフィルムセンターの事業を実施する上で必要な作品等を収集するという基本的方針に基づいて収集を行っている。

平成13年度は、日本映画の黄金期を担った各社の劇映画を中心とした購入を行うとともに、日本映画新社等の文化・記録映画の購入を行った。また、平成8年及び平成10年に調査・確認されたロシア所在の戦前日本映画の購入も前年に引き続き行った。

映画フィルムの寄贈に関しては、日本劇映画についてはこれまでと同様、文化庁優秀映画作品や日本芸術文化振興会で助成された作品の中で、寄贈に応じていただけたものを、文化・記録映画については、社団法人映像文化製作者連盟を通した呼びかけに応じていただいた、当該連盟加盟の製作会社から何点か原版の寄贈を受け入れた。

映画関連資料に関しては、フィルムセンター創立以来、映倫管理委員会、東宝東和株式会社、東映株式会社、御園京平氏、竹崎清彦氏などから大量に寄贈を受け、これまでに約42,000点のポスター、約30,000冊のシナリオ等を収集したが、平成13年度は撮影監督の横山実氏の御遺族から117冊の撮影台本の寄贈を受け入れた。

(2) 映画フィルムの保存管理

映画フィルムは化学的に脆弱なため、映画フィルム専用の保存庫を備えるフィルムセンター相模原分館において24時間体制で保存している。具体的にはモノクロ・フィルムは室温摂氏10 ± 2、湿度40% ± 5%に設定し、カラー・フィルム及びネガティブ・フィルムは室温摂氏5 ± 2、湿度40% ± 5%に設定して保存している。また、アセテート・ベースのフィルムに顕著な劣化現象である「ビネガー・シンドローム」に冒されたフィルムについては、独立の空調設備を備え、室温摂氏2 ± 2、湿度35% ± 5%に設定された専用室において保存をしている。

(3) 収蔵品の修復等

フィルムセンターにおいて「収蔵品の修復」とは、映画フィルムの「修復・復元」を意味する。これは、1本しか所蔵していないプリント、もしくは状態の不安定なプリント等からネガティブ、マスター等の保存用フィルムを作製し、そこから上映用プリントを複製するものであり、現像会社の技術者との緊密な協力の下に、フィルムの化学的な側面と映画作品の内容的な側面を精査しつつ行っている。本年度は、ロシアから収集した戦前期の日本映画のうち、8作品について保存用のネガフィルムを作製した。マスターは所蔵しているものの、上映用35mmプリントを作製していなかった文部省作品について、上映企画に合わせてネガおよびプリン

トを作製し、所蔵作品の有効活用をはかった。

また、諸外国への日本映画紹介のために9本の無声映画について新たに英語字幕付プリントを作製するとともに、平成12年度に購入した中国映画フィルムに日本語字幕を附し、今後の企画上映に備えた。

2 公衆への観覧

(年度計画)

- (1) 中期計画に基づき、展覧会や企画上映等を実施する。
- (2) 全国の公私立美術館等と連携して地方巡回展を実施する。
- (3) 展覧会については、その開催目的、想定する対象層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境、広報活動、過去の入場者数の状況等を踏まえて入場者数について目標を設定し、その達成に努める。
- (4) それぞれの館の収蔵品について、その保存状況を勘案しつつ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に実施する。
- (5) 入館者に対するアンケート調査を実施し、そのニーズや満足度を分析し、展覧会等に反映させる。

(1) 上映会や展覧会の実施

[上映会]

「中国映画史の流れ - 無声後期からトーキーへ」

期間：平成13年4月3日(火)～5月6日(日) 30日間

入館者数6,052人(1回平均101人)(目標入場者数：6,000人)

1920年代の半ばに産業として成立した中国映画は、監督孫瑜(スン・ユイ)らをはじめとする数々の映画人の貢献によって1930年代には上海を中心に花開き、第一期黄金時代と称されるに至った。聯華影片公司、明星影片公司といったプロダクションの精力的な活動により、映画を近代芸術として成立させた「上海映画」は、フィルムセンターの外国映画コレクションの中でも近年重要な位置を占めるようになっている。この企画は、『新女性』(1935年)などの作品を残して夭折した伝説のスター女優阮玲玉(ロアン・リンユイ)、『夜明け』(1933年)や『スポーツの女王』(1934年)で知られる女優黎莉莉(リー・リーリー)、「銀幕の皇帝」と呼ばれた二枚目の金焰(チン・イェン)など、キャストの面にも配慮しながら、無声時代後期から1940年代初頭に至る31本の秀作を連続上映したものである。

「日本映画の発見 : 1960年代」(1)

期間：平成13年5月15日(火)～8月5日(日) 144日間

入館者数28,254人(1回平均196人)(目標入場者数：27,000人)

「日本映画の発見 : 1960年代」(2)

期間：平成13年8月14日(火)～11月4日(日) 72日間

入館者数27,884人(1回平均194人)(目標入場者数：27,000人)

1996年から継続している長期企画「日本映画の発見」シリーズは、この特集で第1期「1960年代」へと歩を進めることになった。日本が高度経済成長を遂げた1960年代は、映画産業にとっては劇的な凋落を体験する時代であり、映画館数は7000館超から3000館台へと落ち込み、年間延べ入場者数も10億人超からその4分の1となる2億5000万人台へと激減することになった。「娯楽の王者」の地位を他に譲った映画は、しかし、なおも以前と大きくは変わらない製作本数を維持し、サラリーマン喜劇や特撮・怪獣映画、仁侠・ヤクザ映画といったシリーズ物の「プログラム・ピクチャー」を多

数製作することによって、世界映画史にも稀な娯楽映画ジャンルの系譜を生み出していった。また、『紀ノ川』（1966年、中村登監督）や『飢餓海峡』（1964年、内田吐夢監督）のように、かつて黄金時代を築いた巨匠たちが円熟味を見せ、あるいは総決算に踏み出す中で、スクリーンが若者の思想表明や芸術表現の場になったのもこの時期である。大島渚、今村昌平に代表される野心的なフィルム・アーティストの登場、羽仁進、黒木和雄らドキュメンタリーの分野からの新風、そして若松孝二らの新たな視点によって、1960年代はまた一つの絢爛たる映画の時代となっている。そうした10年間の秀作、話題作96本を、1964年までと1965年以降の公開作品（48本ずつ）という2期に分けて紹介した。

「イタリア映画大回顧」

期間：平成13年11月13日（火）～平成14年2月24日（日） 81日間
入館者数：33,977人（1回平均214人）（目標入場者数：32,000人）

無声時代から今日までアメリカ、フランスと並んでわが国にとって三大映画国ともいべきイタリアは、多様なジャンルからその豊かな映画史を構成してきた。スペクタクル史劇、艶笑喜劇、メロドラマ、歴史大作、政治映画からマカロニ・ウェスタンにまで及ぶ拡がりを持ち、ソフィア・ローレンやマルチェロ・マストロヤンニに代表される国際スターを生み出しながら時代ごとに華やかな魅力を振りまいてきた。同時に、敗戦後の荒廃したイタリア社会を見つめた「ネオレアリズモ」は、ロッセリーニ、デ・シーカ、フェリーニ、ヴィスコンティといった個性的な映画作家を輩出し、戦後の世界映画史を牽引する原動力にもなっている。この特集は、そうしたイタリア映画の連続上映企画として、わが国の歴史上、最長最大のもので、1910年代から80年代に至る55本の作品からなる本企画（共催：朝日新聞社、チネテカ・ナチオナーレ）は、うち53本がイタリアから提供を受けたものである。なお、企画の初期（11月17日）にはチネテカ・ナチオナーレ副館長セルジョ・トフェッティ氏の、締めくくり（2月24日）には同館長アドリアーノ・アブラ氏の講演会を実施し、本企画のコンセプトを明らかにしていただいた。また無声映画の上映にイタリアを代表する伴奏ピアニスト（アントニオ・コッポラ、ステファノー・マッカーニョの両氏）の創造的な演奏を付したことも、イタリア無声映画の豊穡さを際立たせ、高い評価を得た。

「フィルムで見る20世紀の日本」

期間：平成14年3月5日（火）～3月24日（日） 18日間
入場者数：3,719人（1回平均103人）（目標入場者数：3,500人）

当館本館のリニューアル記念展「未完の世紀 - 20世紀美術がのこすもの」の関連企画として開催された本企画は、コレクションの重要な部分をなす日本の記録映像に照準を当てながら、激しい変化を体験した日本の政治、社会、文化を18の切り口を軸に俯瞰する試みである。映画史の文脈をいったん離れ、映画カメラが各時代に捉えてきた大小さまざまな出来事、人物、風物などを主題別に並びかえて18の番組に組み全体で99本の短篇（文化・記録映画、ニュース映画）を上映した。プログラムの構成にあたっては、関東大震災（『関東大震災火災実況』など）や太平洋戦争での占領地（『大東亜ニュース』など）といった、いわば「大文字で書かれた歴史」の記憶をなすテーマばかりでなく、産業や運輸、さらには暮らしや衛生生活、教育といった人々の日常的な営みに由来するテーマにも注意を払い、少数民族や女性の地位といった視点にも配慮した。

[展覧会]

「イタリア映画ポスター展」

期間：平成13年11月17日（土）～平成14年2月24日（日）（77日間）
会場：7階展示室

出品点数：140点
 入場者数：4,320人(1日平均46人)(目標入場者数：3,850人)

上映企画「イタリア映画大回顧」の開催にあわせ、7階展示室では所蔵品によるイタリア映画ポスター展を開催した。

「資料でみる日本映画史 - みそのコレクションより - 」
 期間：平成14年3月5日(火)～3月24日(日)(18日間)
 / 4月2日(月)～5月26日(日)
 会場：7階展示室
 出品点数：約1,000点
 入場者数：1,307人(1日平均73人)(平成13年度中目標入場者数：720人)

御園京平(本名・月村吉治)氏が生涯をかけて収集した膨大な映画資料は、とくにポスター、スチル写真、プログラム(チラシ、パンフレット)の三分野で他を圧倒する質と量を誇り、「みそのコレクション」の通称で広く知られている。

このうち、ポスター類は1995年の新館オープンを機にフィルムセンターに寄贈され、我が国の映画史をひもとく貴重な文化遺産となっているもので、当展示室でも映画生誕百年を記念した「ポスターでみる日本映画史」以来、さまざまな展示で活用している。本展は同氏の死後、遺族から当センターに寄贈されたスチール写真、プログラムのコレクションを加えた1,000点近い「みそのコレクション」により、我が国の日本映画史をたどろうとするものである(現在も開催中)。

(2) 優秀映画鑑賞推進事業の実施

平成13年7月4日(水)から平成14年2月24日(日)まで
 都道府県数：44都道府県/会場数：154会場/入場者数計：72,943人

「優秀映画鑑賞推進事業」は、文化庁とフィルムセンターが日本映画製作者連盟、全国興行環境衛生同業組合連合会などの協力のもと、全国各地の公立文化施設などとともに、優れた日本映画の良質な35mmプリントを提供する巡回上映事業のプログラムである。今年度の上映作品は4作品を1プログラムとし、20プログラムでの実施となっている。

(3) 映画文化に関する国際交流事業の実施

- ・「いちばん美しい夏」ジョン・ウイリアムズ 監督
 (第36回カルロヴィ・ヴァリ国際映画祭/2001.7.5～2001.7.14)
- ・「かあちゃん」市川崑 監督
 (モントリオール国際映画祭/2001.8.23～2001.9.3)
- ・「害虫」塩田明彦 監督
 (ベネチア映画祭/2001.8.29～2001.9.8)
- ・「あしたはきっと・・・」三原光尋 監督
 (カルーセル国際映画祭/2001.9.16～2001.9.23)
- ・「溺れる人」一尾直樹 監督
 (バンクーバー国際映画祭/2001.9.27～2001.10.12)
- ・「新雪国」後藤幸一 監督
 (ハワイ国際映画祭/2001.11.2～2001.11.11)
- ・「ホーム・スイートホーム」栗山富夫 監督
 (第20回ファジール映画祭/2002.2.1～2002.2.11)
- ・「神の子たち」四ノ宮浩 監督
 (サンタバーバラ国際映画祭/2002.2.27～2002.3.3)
- ・「百合祭」浜野佐知 監督

- (第9回トリノ女性国際映画祭 / 2002. 3. 4 ~ 2002. 3. 10)
 ・「満山红柿」小川伸介・彭 小連 監督
 (第24回 CINEMA DU REEL 映画祭 / 2002. 3. 8 ~ 2002. 3. 17)

本事業は、広く世界の人々に日本映画を紹介し、映画芸術の向上と発展に資するために、海外で開催される国際映画祭のコンペティション部門に選定された日本映画を出品する事業である。作品には外国語字幕を付され、最初に招待されたコンペティション部門において上映される。作品は、その後2年間、各地で開かれる国際映画祭にも出品されることとなっている。

平成13年度は、あわせて10作品を出品した。「いちばん美しい夏」は、上記映画祭のアジア映画を対象とするNETPAC賞において優秀作(スペシャルメンション)と認められた他、ハワイ国際映画祭最優秀作品賞、マンハイム - ハイデルベルグ国際映画祭国際批評家(FIPRESCI)審査特別賞を受賞した。また、「害虫」は、上記映画祭に出品された後、ナント三大陸国際映画祭(フランス)審査員特別賞を受賞した。「かあちゃん」の市川崑監督は、上記映画祭においてライフ・アチーブメント・アワード(功労賞)を受賞した。

(4) 収蔵品の貸与

別紙のとおり計14件、84点の映画フィルムの貸出しを行った。

(5) アンケート調査の実施

次のとおり「フィルムで見る20世紀の日本」の上映会開催中において、アンケート調査を実施した。

「フィルムで見る20世紀の日本」

実施期間：平成14年3月19日(火)～平成14年3月24日(日)(6日間)

アンケート項目：別紙のとおり

結果：展覧会について約9割の肯定的意見があった。(詳細は別紙のとおり)

3 調査研究

(年度計画)

- (1) 中期計画に基づき、調査研究を計画的に実施する。
 (2) 客員研究員を招聘し、調査研究活動を推進する。
 (3) 各館の調査研究の成果については、研究紀要、図録への論文発表等によって公表する。

(1) 客員研究員の招聘

3名を招聘し、次の活動を行った。

所蔵映画フィルムの総合的なデータ分析とカタログ及び目録作成

客員研究員氏名：栩木 章(現職：明治学院大学文学部芸術学科 非常勤講師)

研究内容：所蔵日本ニュース映画の目録作成のために、各プリント内容の調査研究、データの集積及び必要に応じて不足分データの補充と、データベースとして全体の統一を図るための調査研究。

所蔵映画関連資料に関するデータ構築と総合的な研究調査及び書誌作成

客員研究員氏名：安澤秀太(現職：フリー編集者、翻訳者)

研究内容：平成10年度にNHK放送文化研究所より寄贈された「反町茂雄コレクション」(映画監督・衣笠貞之助の生涯資料ならびに映画会社・大映の内部資料)の整理・特定・分類調査、ならびに登録・データベースの構築(継続)

所蔵映画フィルムの科学的側面からの保存・復元研究

客員研究員氏名：栩木 章

研究内容：内外の各種専門機関・現像所等の研究成果に基づき、所蔵映画フィルムに適

- 応じた保存・復元についての調査研究（継続）
 映画保存に関する国内外文献の比較調査研究
 客員研究員氏名：堀かおり（現職：学習院大学非常勤講師）
 研究内容：国際フィルム・アーカイヴ連盟（FIAF）の最新改訂規則及び内規を翻訳し、以前の規則等との比較研究。
 平成12年度開催の国際映画シンポジウム「フィルム・アーカイヴの仕事を再定義するシンポジウム」に関する内容についての比較調査（継続）
 外国映画に関する事業・企画の共同研究
 客員研究員氏名：堀かおり
 研究内容：共催上映「イタリア映画大回顧」の実施に伴う、チネテーカ・ナチオナーレ等イタリア側との事業にかかわる調査、及びFIAF加盟の同種機関との映画史的、アーカイヴ的な事例に関する調査等。

（2）調査研究の成果の発表等

中国映画史に関する調査研究

研究者 大場正敏

- ・「中国映画史の流れ」開催にあたって『NFC ニュースレター』第36号（2001年4-5月号）

記録映画に関する調査研究

研究者 入江良郎、岡田秀則

- ・三人の女性監督、それぞれの記録映画史（聞き手、構成）『NFC ニュースレター』第36号（2001年4-5月号）

研究者 岡田秀則

- ・いまだ見ぬ「20世紀」への長くて短い旅『NFC ニュースレター』第41号（2002年2-3月号）

映画保存等に関する調査研究

研究者 岡島尚志

- ・映画保存の二つの課題：ピネガー・シンドロームとデジタル復元について『NFC ニュースレター』第37号（2001年6-7月号）
- ・FIAF ラバト会議報告 フィルム・アーカイヴと“植民地映画”の関係を中心に『NFC ニュースレター』第38号（2001年8-9月号）

研究者 入江良郎

- ・ドイツの映画保存 ドイツ映画博物館/ドイツ映画研究所(DIF)『NFC ニュースレター』第40号（2001年12月-2002年1月号）
- ・ドイツの映画保存 デュッセルドルフ映画博物館『NFC ニュースレター』第41号（2002年2-3月号）

研究者 岡田秀則

- ・ベルギー王立シネマテークの現在『NFC ニュースレター』第37号（2001年6-7月号）
- ・砂丘と木立：オランダの映画保存の現在『NFC ニュースレター』第38号（2001年8-9月号）

研究者 常石史子

- ・第20回ポルデノーネ無声映画祭報告『NFC ニュースレター』第40号（2001年12-2002年1月号）

1960年代日本映画に関する調査研究

研究者 佐伯知紀

- ・日本映画史のなかの1965年：「その他」の登場と撮影所映画への一視点『NFC ニュースレター』第39号（2001年10-11月号）

研究者 岡田秀則

- ・日本映画の「不況スパイラル」：数字で見る1960年代日本映画『NFC ニュースレター』第39号（2001年10-11月号）

イタリア映画に関する調査研究

研究者 岡島尚志

- ・「イタリア映画大回顧」の意味するもの：フィルム・アーカイブの保存と上映という視点から『「イタリア映画大回顧」カタログ』
- ・吉村信次郎氏に聞く：戦後イタリア映画はいかにして輸入されたか『「イタリア映画大回顧」カタログ』

研究者 岡田秀則

- ・吉村信次郎氏に聞く 戦後イタリア映画はいかにして輸入されたか『「イタリア映画大回顧」カタログ』

研究者 入江良郎

- ・ポスターでたどるイタリア映画と日本『NFC ニュースレター』第40号(2001年12-2002年1月号)

映画技術に関する調査研究

研究者 常石史子

- ・シネマスコープの時代(上):草創期『NFC ニュースレター』第38号(2001年8-9月号)
- ・シネマスコープの時代(下):作り手の眼 キメラマン高村倉太郎氏インタビュー『NFC ニュースレター』第39号(2001年10-11月号)

海外の日本映画の所在調査(文部科学省科学研究費補助金)

研究代表者 大場正敏

- ・海外に残存する戦前の日本映画に関する調査研究報告書

4 教育普及

(年度計画)

- (1) 国内外の美術館等との交換図書等による資料の積極的収集を図ると共に情報コーナーの設置等ファレンス機能の充実を図る。
- (2) 館が収蔵している作品のデータ・画像入力を行い、広く公衆のニーズに応えるため、データベース化を推進する。
- (3) 国内外の美術館等との連携を強化し、情報コーナー、アトライブラリー、資料閲覧室等、情報資料関係の施設の整備・充実を図る。
- (4) 児童生徒を対象とした教育普及事業を実施する。
- (5) 講演会等を実施する。
- (6) 美術館関係者を対象とした、研修事業を実施する。
- (7) 他の機関が実施する研修への協力を実施する。
- (8) 各館それぞれに研究成果を踏まえて出版事業等を行う。
- (9) それぞれの館のホームページを積極的に活用して広く公衆への普及及び広報を行う。また、4館共同の広報体制を整備するため法人のホームページを作成し、中期目標、中期計画、年度計画等を公表する。
- (10) ボランティア等の在り方や企業との連携等について検討を行う。
- (11) 新たな美術館施設の円滑な運営について

(1) 資料収集及びレファレンス機能の充実

フィルムセンターが所蔵する映画関係図書・洋書約20,000冊について閉架式閲覧サービスを行った外、コピーサービスを実施した。また新刊図書等の収集と開架で閲覧できるスペースの整備を行った。

(2) 講演会の実施

「イタリア映画大回顧」上映に因む講演会2回

第1回 平成13年11月17日(土)午後1時から午後2時

講師：セルジョ・トフェッティ（チネテーカ・ナチオナーレ副館長）
 テーマ：「現実の内と外で - イタリア映画の百年」

参加人数：116名

第2回 平成14年2月24日（日）午後1時から午後2時

講師：アドリアーノ・アブラ（チネテーカ・ナチオナーレ館長）

テーマ：「イタリア映画における伝統と革新」

参加人数：130名

計246名

（3）専門家養成講座の開催

「映画製作専門家養成講座」を次のとおり実施した。

この講座は、映画、テレビ、ビデオ製作など、映像製作の諸分野で助手等の現場経験を有する人や映画・映像に関する専門学校などで実習経験を有する人を対象とするもので、日本映画の優れた伝統を継承し、次世代の映画製作現場を担うことのできる豊かな人材を育成することを目的としている。

平成14年2月13日（水）から2月16日（日）までの4日間

第1日目 講師：川又昂（撮影監督）、斎藤武市（映画監督）

テーマ：「小津安二郎監督との仕事」

受講者数：83名

第2日目 講師：川又昂（撮影監督）、長部日出雄（作家）、水川淳三（映画監督）

テーマ：「大島渚監督との仕事」

受講者数：78名

第3日目 講師：川又昂（撮影監督）、木村大作（撮影監督）、佐々木原保志（撮影監督）

テーマ：「野村芳太郎監督との仕事」

受講者数：78名

第4日目 講師：川又昂（撮影監督）、稲垣尚夫（美術）、紅谷愼一（録音）

テーマ：「今村昌平監督との仕事」

受講者数：76名

（4）発行事業の実施

展覧会、企画上映に伴う図録の発行

[上映関係]

ア．「イタリア映画大回顧」上映カタログ

23.0×19.2cm/216P

本文：「イタリア映画大回顧」の意味するもの（岡島尚志）、他

上映作品解説

イタリア映画日本公開年表

イタリア映画関係日本語文献目録

上映プログラム

編集：東京国立近代美術館フィルムセンター、朝日新聞社

発行：朝日新聞社

イ．「平成13年度優秀映画鑑賞推進事業」鑑賞の手引

A4判/6P

作品解説、会場一覧、プログラム作品リスト

編集・発行：東京国立近代美術館フィルムセンター

[展示関係]

ア．「『イタリア映画大回顧』ポスター展 - フィルムセンター・コレクションより - 」

出品リスト

29.7×21.0cm/4P

イ.「資料でみる日本映画史 - みそのコレクションより - 」出品リスト

22.4×10cm/10P

「NFCニューズレター」 6回発行済 (年度計画 6回発行)
 第36号 4 - 5月号 「特集：中国映画への新しい視点」他
 第37号 6 - 7月号 「特集：'60年代の日本映画(1)」他
 第38号 8 - 9月号 「特集：'60年代の日本映画(2)」他
 第39号 10 - 11月号 「特集：'60年代の日本映画(3)」他
 第40号 12 - 1月号 「特集：イタリア映画史探索(1)」他
 第41号 2 - 3月号 「特集：イタリア映画史探索(2)」他
 「NFCカレンダー」 5企画すべてで発行 (年度計画 企画毎発行)
 企画上映「中国映画史の流れ：無声後期からトーキーへ」
 企画上映「日本映画の発見 : 1960年代(1)」
 企画上映「日本映画の発見 : 1960年代(2)」
 共催上映「イタリア映画大回顧」
 企画上映「フィルムで見る20世紀の日本」

(5) ホームページの活用

ホームページではフィルムセンターの概要、企画上映を含む活動一般などの情報の公開に努めるほか、職員募集などの事務的な活動にも積極的に活用して広く公衆への普及及び広報を行った。

また、ホームページを新しいレイアウトにするための検討を行い、できるものから順次更新作業を行った。

ホームページアクセス件数 189,924件 (本館・工芸館を含む。)

5 その他の入館者サービス

(年度計画)

- (1) 高齢者・身体障害者等に配慮した設備等の充実を図る。建物のバリアフリー化を進め、高齢者・身体障害者等にやさしい美術館を目指す。
- (2) 案内情報の充実、車椅子の提供等、入館者サービスの充実を図る。
- (3) 展示説明の見直しなど、鑑賞環境の充実に努める。又、音声ガイドの検討及び作品リストの無料配布等を行う。
- (4) 小中学生の常設展入場料の無料化や観覧時間拡充の検討を行う。
- (5) フリーゾーンの活用、レストラン及びミュージアムショップの充実など附属施設の充実を図る。

(1) 高齢者・身体障害者等に配慮した設備等の充実等

フィルムセンターでは、車椅子で利用できるエレベーターの設置等により高齢者・身体障害者等に対するバリアフリーに配慮している。

[当館の実施状況]

- 外部との出入り口を自動ドア化。
- 車椅子対応エレベーターの設置。
- 車椅子で利用できる多目的トイレの設置。
- 手すり付き小便器を設置。

(2) 案内情報の充実、車椅子の提供等、入館者サービスの充実

- 1階受付カウンターで館内の案内情報の提供を行っている。
- 1階受付に車椅子を常備している。

1階、2階、4階及び7階の来館者が利用できるフロアにパンフレット台を設置し、上映プログラムや展覧会等のチラシを配布している。

(3) 鑑賞環境の充実

展覧会の内容に応じ、「出品リスト」を無償配布した。
平成13年4月8日から日曜日開館を実施した。

(4) フリーゾーンの活用，レストラン及びミュージアムショップの充実

レストランは火曜日から金曜日は午前10時30分から午後8時30分、土曜日及び日曜日は午前10時30分から午後6時まで営業し、入館者へのサービスに努めた。

6 職員の研修の実施（その他の主務省令で定める業務運営に関する事項）

(年度計画)

職員の意識向上を図るため、次の職員研修を実施する。

1) 新規採用者・転任者職員研修、2) 接遇研修

外部の研修に職員を積極的に派遣し、その資質の向上を図る。

本館リニューアル・オープンにあたって実施された研修に職員を参加させた。

開催日：平成13年12月19日（水）

受講者：職員15名

講義：勤務時間・服務規律、警備・防災管理体制等（庶務課長）

展覧会事業について「リニューアル・オープン記念展」（副館長）

特別講義・実習（B.M.C.代表 塚本 晃子）

テーマ：ブラッシュ・アップ「苦情対応と説明能力向上等」

京都国立近代美術館

概要

(1) 設置年月日

昭和38年3月1日

(2) 施設の規模

9,761 m²

展示面積 2,604 m²

(地上4階,地下1階)

(3) 目的

当館は昭和38年に国立近代美術館京都分館として発足した。京都市による国立美術館の誘致運動が実現したものであり、当初は京都市の要望もあって工芸に主力を置く美術館として性格付けられたが、昭和42年に独立して京都国立近代美術館となってからは広く美術一般にその所掌範囲を拡げて現在に至っている。なお、昭和61年には新館が竣工開館し、4階における常設展示がはじめて可能となって、3階の企画展示とあわせて、展示活動もより活発化し、これとともに常設展示に必要な作品の収集をより積極的に行うようになった。

当館に課せられた役割は、現代に繋がる美術の歴史を整理検討し、近代美術の将来の発展のために様々な活動を計画し実行することにある。その活動の分野は絵画、版画、彫刻、工芸、建築、デザイン等から写真に至るまで非常に広く、その活動範囲も日本全国の現代美術の振興に資することを目的とするものと幅広い。また、近代あるいは現代の美術を通じての海外との文化交流も任務の一端である。

以上の諸点を踏まえながら、当館は以下の方針のもとに事業を進めている。すなわち、分館当時、京都市の要望に応じて工芸に重点を置いて来た伝統を継承すること、日本の近代美術史の全体的な流れを展望しつつ主として関西で活躍した美術家を取り上げて、京都を中心とする近代美術の回顧、展望を試みることに努めること、さらに変貌を繰り返す現代美術の動向を国際的な視点から把捉し、その様相の紹介に努めることである。これらの方針は、例年6～7回の特別展・企画展の開催、常設展示の実施及び美術作品や美術資料、図書その他の資料の収集などに反映されている。

(4) 定員

館長	事務系	研究系	合計
1	10	7	18

(5) 予算額

運営費交付金	512,855千円
自己収入	83,889千円
計	596,744千円

1 収集・保管等

(年度計画)

- (1) 中期計画に基づき、美術作品等を購入する。
 (2) 寄贈・寄託品の積極的な活用を図る。
 (3) 24時間空調等による作品の保存管理及び館内各所の環境モニターを実施する。
 (4) 緊急に修復を必要とする収蔵品のうち、緊急性の高いものから各分野ごとに計画的に修復を行う。
 (5) 国内外の美術館に対し、修復保存に関する協力と普及の推進を図る。

(1) 美術作品等の購入

常設展示を体系的かつ美術史上のエポックを画する作品により印象的にするため、収蔵品の欠落部分を補い充実させるという基本方針に基づき、美術作品購入等選考委員会及び評価委員会の審議の下、平成13年5月21日(月)に第1回委員会を、平成14年3月11日(月)に第2回委員会をそれぞれ開催して、鈴木治《雪の中の馬》他34点を232,840,000円で購入した。また、寄贈作品についても同様の手続きにより、当館の所蔵作品にふさわしい作品と認められたものについて受贈した。作品は、「平成13年度収蔵作品調」のとおり、陶芸56点(購入5点,寄贈51点),金工1点(寄贈1点),漆工1点(購入1点)染織22点(購入1点,寄贈21点),ガラス12点(寄贈12点),書8点(購入4点,寄贈4点),日本画55点(購入9点,寄贈46点),油彩画17点(購入5点,寄贈12点),水彩画7点(寄贈7点),素描220点(寄贈220点),版画39点(寄贈39点),写真10点(購入10点),資料7件(寄贈7件)である。

平成13年度所蔵作品調

(平成14年3月31日現在)

種別	平成13年度収蔵作品数				前年度までの 収蔵作品数	合計
	(1) 購入	(2) 寄贈	(3) 分類換	計		
工芸						
陶芸	5	51	0	56	1,129	1,185
金工	0	1	0	1	70	71
漆工	1	0	0	1	54	55
木工	0	0	0	0	17	17
竹工	0	0	0	0	7	7
ガラス	0	12	0	12	82	94
染織	1	21	0	22	230	252
人形	0	0	0	0	1	1
ジュエリー	0	0	0	0	100	100
計	7	85	0	92	1,690	1,782
絵画・彫刻						
日本画	9	46	0	55	634	689
油彩	5	12	0	17	419	436
水彩	0	7	0	7	275	282
素描	0	220	0	220	615	835
版画	0	39	0	39	1,139	1,178
彫刻	0	0	1	1	89	90
計	14	324	1	339	3,171	3,510
書	4	4	0	8	72	80
写真	10	0	0	10	1,469	1,479
その他	0	0	0	0	83	83
資料	0	7	0	7	147	154
合計	35	420	1	456	6,632	7,088

(2) 寄贈・寄託品の積極的な活用

寄贈・寄託品は、当館の常設展示及び他館等への貸出しによって積極的に活用している。

常設展については年間10回の陳列替えを行って作品の公開に努めているが、平成13年度に公開した作品は延772点にのぼる。これを収蔵経緯別にみると購入作品が62%、寄贈作品が31%、寄託作品が7%となり、寄贈・寄託品の有効活用は数字の上からも明らかである。

また、作品貸出しについては、年間632点にのぼる。これを収蔵経緯別にみると購入作品48%、寄贈作品48%、寄託作品4%となり、常設展同様、寄贈・寄託作品は有効に活用されている。

以上のことから明らかなように、収蔵品が十分でない当館においては、寄贈・寄託を積極的に受けることでその欠を補っている。そのことは以下の表に数値として示すとおりである。

平成13年度寄託作品調

(平成14年3月31日現在)

種 別	平成13年度寄託作品数			前年度までの 寄託作品数	合 計
	(1) 増	(2) 減	計		
工 芸					
陶 芸	1	0	1	309	310
金 工	0	0	0	0	0
漆 工	0	0	0	3	3
木 工	0	0	0	0	0
竹 工	0	0	0	0	0
ガラス	0	0	0	0	0
染 織	1	0	1	1	2
人 形	0	0	0	0	0
ジュエリー	0	0	0	0	0
計	2	0	2	313	315
絵画・彫刻					
日本画	6	-1	5	139	144
油 彩	15	-2	13	17	30
水 彩	1	0	1	3	4
素 描	2	0	2	36	38
版 画	0	0	0	2	2
彫 刻	0	0	0	1	1
計	24	-3	21	198	219
書	0	0	0	0	0
写 真	0	0	0	192	192
そ の 他	0	0	0	2	2
資 料	0	0	0	9	9
合 計	26	-3	23	714	737

- 3

寄託作品のうち13年度中に2点を購入し、1点は寄贈作品として受入れた。

(3) 作品の保存管理

会場内では、作品を安全に展示するために年間を通じて館内10数箇所の温度・湿度、空気汚染、照明、防災対策、保安対策などの調査を継続的に実施し、必要に応じた改善の実施を行っている。

また、収蔵庫においては、収蔵作品に応じて各室毎に温度・湿度を変え、温度・湿度のデータの管理により、作品への影響を最低限とするよう空調設備の運転を行っている。

(4) 収蔵品修復

緊急に修復を必要とする収蔵品のうち、緊急性の高いものから各分野ごとに計画的に修復を行った。

次の作品について修理を実施。

日本画 11点

「八丈島」,「池の面」,「秋郊」(以上 千種掃雲 作)

「春の信濃路」,「南海の図」(以上 不染 鉄 作)

「舞妓林泉図(下図)」(土田麦僊 作)

「双鳩図」(小茂田青樹 作)

「夏座敷」(磯田又一郎 作)

「埴輪」(都路華香 作)

「竹取物語」(小林古径 作)

「緑陰」(小松 均 作)

コラージュ 2点

「日本の夏」,「小さい傘」(以上 ハンナ・ヘッヒ 作)

素描 1点

「怪奇的なカットA - Z」(谷中安規 作)

2 公衆への観覧

(年度計画)

(1) 中期計画に基づき各館において展覧会や企画上映等を実施する。

(2) 全国の公私立美術館等と連携して地方巡回展を実施する。

(3) 展覧会については、その開催目的、想定する対象層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境、広報活動、過去の入場者数の状況等を踏まえて入場者数について目標を設定し、その達成に努める。

(4) それぞれの館の収蔵品について、その保存状況を勘案しつつ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に実施する。

(5) 入館者に対するアンケート調査を実施し、そのニーズや満足度を分析し、展覧会等に反映させる。

(1) 展覧会の実施

展覧会

ア「ルネ・ラリック 1860-1945」

期間:平成13年2月10日(土)~4月15日(日)(56日間(うち平成13年度13日間))

会場:京都国立近代美術館3階企画展示場

出品点数:407点

入場者数:68,958人(1日平均1,231人)(目標入場者数:80,000人)

(うち平成13年度中は30,818人(1日平均2,371人)(目標入場者数:19,000人))

共催者:日本経済新聞社、NHKきんきメディアプラン

(展覧会に係る実績報告概要)

<新聞雑誌関係記事>

新聞記事

山中英之(京都新聞)『華麗な美の全ぼうに迫る』2001年2月17日

中野 稔(日本経済新聞)『ガラス工芸 二巨匠に酔う ガレ:自然、写実的に表現 /

ラリック:造形性高い宝飾品』平成13年2月24日

三井秀樹(筑波大学教授)『螺旋の美十選 ルネ・ラリック「花瓶<つむじ風>」 /

日本経済新聞 平成 13 年 2 月 26 日

渡辺達治『華麗で多彩 アールヌーボー ガラスの世界』/読売新聞 平成 13 年 3 月 21 日
雑誌記事

渡辺達治『ルネ・ラリックの華麗な世界東洋への憧憬』/ART GRAPH 平成 13 年 1 月号
『ルネ・ラリック 1860-1945 展』/美術手帖 平成 12 年 9 月号

海野 弘(美術評論家)『世紀末の夢の形 アール・ヌーヴォー』/美術画報 平成 12 年 9 月
イ「前田青邨展」

期間：平成 13 年 4 月 24 日(火)～6 月 3 日(日)(37 日間)

会場：京都国立近代美術館 3 階企画展示場

出品点数：97 点(前後期計)

入場者数：27,473 人(1 日平均 743 人)(目標入場者数：30,000 人)

共催者：日本経済新聞社

(展覧会に係る実績報告概要)

<新聞雑誌関係記事>

新聞記事

無記名(日本経済新聞)『青邨「天正貴婦人像」パチカンから里帰り』4 月 21 日

斉藤清明(毎日新聞)『前田青邨の回顧展 パチカンからも出品』4 月 25 日

無記名(日本経済新聞)『前田青邨展京都で始まる』4 月 24 日

竹田博志(日本経済新聞)『「愉快的な筆」研究心が裏打ち』5 月 4 日

太田垣實(京都新聞)『清朗な色彩と造形 奔放な構想力』5 月 5 日

中野 稔(日本経済新聞)『のびやかな筆、作風に幅 武者、動物・・・貫く明るさ

日本画の巨匠前田青邨展』5 月 17 日

早瀬廣美(産経新聞)『歴史画に夢を託す 前田青邨展』5 月 20 日

加藤類子(池坊短大教授)(日本経済新聞(夕))

前田青邨展 大和絵の伝統ふまえ』5 月 29 日

雑誌記事

小倉実子(当館研究員)『前田青邨展』/文化庁月報 391 号 4 月号

小倉実子(当館研究員)『青邨芸術の全貌を通観 前田青邨展』/新美術新聞 926 号

5 月 11 日、21 日合併号

ウ「ミニマル マキシマル - ミニマル・アートとその展開」

期間：平成 13 年 6 月 19 日(火)～8 月 12 日(日)(48 日間)

会場：京都国立近代美術館 3 階企画展示場

出品点数：68 点

入場者数：16,595 人(1 日平均 346 人)(目標入場者数：10,000 人)

(展覧会に係る実績報告概要)

<新聞雑誌関係記事>

新聞記事

中野 稔(日本経済新聞)『ミニマル・アート 表現の幅広げる』6 月 28 日

森本俊司(朝日新聞)『無表情な直方体の饒舌』6 月 30 日

尾崎信一郎(当館主任研究官)(読売新聞)『純粹に美術として存在』6月30日
 『「水平的彫刻」の可能性示唆』7月1日
 『空間そのものが作品に』7月3日
 『シンプルな手法 新鮮な感動』7月4日
 『圧倒的な存在感示す』7月5日

木村未来(読売新聞)『ミニマル・アート 抑制の美追求』7月13日

無記名(毎日新聞)『二つの「ミニマル・アート」展』7月13日

早瀬廣美(産経新聞)『「極限の美」の広がり』7月15日

(山)(京都新聞)『柔軟で多様な継承』7月21日

山本忠勝(神戸新聞)『挑戦的な妖怪的実験』7月28日

雑誌記事

尾崎信一郎(当館主任研究官)『ミニマル マキシマル - ミニマル・アートとその展開』
 /文化庁月報 393号(6月25日)

小西信之「ミニマルマキシマル 現前性の探求から多様な再解釈へ」/美術手帖 809号
 (平成12年1月)

エ「京都の工芸 - 1945～2000」

期間：平成13年8月28日(火)～10月21日(日)(48日間)

会場：京都国立近代美術館3階企画展示場、4階常設展示場の一部

出品点数：291点

入場者数：10,797人(1日平均225人)(目標入場者数：20,000人)

共催者：東京国立近代美術館

(展覧会に係る実績報告概要)

<新聞雑誌関係記事>

新聞記事

無記名(産経新聞)『伝統が生んだ斬新表現 28日開幕 京都国立近代美術館で特別展
 京工芸戦後の粋 300点』8月23日

無記名(朝日新聞)『「京都の工芸」300点戦後の歩みに焦点 きょうから国立近代美術館』
 8月28日

無記名(日本経済新聞)『「京都の工芸 1945-2000」進取の精神「前衛」生む』9月1日

木村未来(読売新聞(夕))『陶芸・染織・漆芸 形作る次代の伝統』9月5日

(太)(京都新聞)『柔らかな前衛精神の豊かな所産』9月8日

田原由紀雄(毎日新聞)『京都の工芸の歩み検証 戦後50年の作品300点でたどる』
 9月21日

早瀬廣美(産経新聞)『予感させる新たな伝統』9月23日

斎藤清明(毎日新聞)『第二次世界大戦後から現在までの作品を紹介』9月26日

(未)(読売新聞)『土と格闘 可能性追求』12月6日

雑誌記事

諸山正則『京都の工芸 1945-2000』/現代の眼 531号

松原龍一(当館主任研究官)/文化庁月報 395号

藤 慶之『戦後京都の陶芸界 - 思いつくままに』 / 炎芸術 68号
オ「オーストリア・デザインの現在 - 広がるデザインの世界」

期間：平成 13 年 9 月 11 日（火）～10 月 14 日（日）（30 日間）

会場：京都国立近代美術館 1 階展示ロビー

出品点数：32 点

入場者数：4,660 人（1 日平均 155 人）（目標入場者数：5,000 人）

（展覧会に係る実績報告概要）

< 新聞雑誌関係記事 >

新聞記事

深萱真穂（京都新聞）『2 つのデザイン展 背後の思索まで想起』平成 13 年 9 月 22 日

雑誌記事

河本信治（当館主任研究官）『オーストリア・デザインの現在』 / 文化庁月報 396 号 9 月号
カ「小松均展」

期間：平成 13 年 10 月 30 日（火）～12 月 16 日（日）（42 日間）

会場：京都国立近代美術館 3 階企画展示場、4 階常設展示場の一部

出品点数：58 点（前後期計）

共催者：読売新聞社

（期間変更）

当計画策定後終期を 12 月 9 日（日）（36 日間）に変更

入場者数：16,937 人（1 日平均 470 人）（目標入場者数：30,000 人）

（展覧会に係る実績報告概要）

< 新聞雑誌等関係記事 >

新聞記事

無記名（読売新聞）『「大自然の力伝わる」小松均回顧展』10 月 30 日

無記名（読売新聞）『小松均展記念し講演 近代美術館』11 月 11 日

木村未来（読売新聞）『強烈な赤描く意味問う「赤富士」』11 月 12 日

『表情に潜む不屈の意志「大原女少女」』11 月 13 日

『壮大な流れ新たなテーマ「栗の花咲く最上川(下・部分)」』11 月 14 日

早瀬廣美（産経新聞）『大きな自然と向き合って 小松均展』11 月 18 日

無記名（読売新聞）シリーズ「小松均展と私」

『白黒のメリハリ絶妙「吾が窓より 夏山」』11 月 17 日

『自然描く喜びひしひし「大原田園(春)」』11 月 21 日

『雪の表現ふんわり「杉の雪」』11 月 23 日

『画面から子の歓声「大原風景」』11 月 24 日

無記名（中外）『仙人画家がよみがえる 溢れる情熱、高い理想』：11 月 17 日

太田垣實（京都新聞）『自然の霊気と感応する大画面 小松均展』11 月 24 日

田原由紀雄（毎日新聞（夕））『山の霊気と一体の迫力』11 月 29 日

雑誌記事

小倉実子（当館研究員）『小松均展』 / 文化庁月報 397 号 10 月号

藤 慶之『大原の画仙人 小松均』/IMFA 42号 10月号
キ「シエナ美術展 - 絵画・彫刻・工芸の精華 - 」

期間：平成13年12月22日(土)～平成14年2月11日(月・祝)(38日間)

会場：京都国立近代美術館3階企画展示場

出品点数：101点

入場者数：27,749人(1日平均730人)(目標入場者数：40,000人)

(展覧会に係る実績報告概要)

<新聞雑誌関係記事>

新聞記事

山野英嗣(当館主任研究官)『銀行と美術』『トスカーナの女王』『再評価』

/朝日新聞 平成14年1月15日ほか3回連載

深萱真穂(京都新聞)『歴史都市の懐の深さ』平成14年1月19日

早瀬廣美(産経新聞)『シエナ美術展』平成14年1月20日

木村未来(読売新聞)『装飾的な色調 人間味あふれ』平成14年1月22日

加藤義雄(日本経済新聞)『シエナ美術展』平成14年1月28日

雑誌記事

山野英嗣(当館主任研究官)『シエナ美術展』/文化庁月報399号 平成13年12月

(追加実施)

「銅版画の巨匠 長谷川潔展」

期間：平成14年2月21日(木)～4月7日(日)(40日間(うち平成13年度34日間))

会場：京都国立近代美術館3階企画展示場

出品点数：197点

入場者数：8,807人(1日平均220人)(目標入場者数：9,000人)

(うち平成13年度中は6,737人(1日平均198人)(目標入場者数：8,000人))

(展覧会に係る実績報告概要)

<新聞雑誌関係記事>

新聞記事

深萱真穂(京都新聞)『無限へ開く黒の空間 長谷川潔展』平成14年3月9日ほか

雑誌記事

島田康寛(当館学芸課長)『銅版画の巨匠長谷川潔展』/文化庁月報平成14年2月号ほ

ク 常設展「近代の美術・工芸・写真」 10回陳列替え

入場者数：133,254人

(目標入場者数：12万人)

国立博物館・美術館巡回展

ア「かざりとかたち」

共催者：独立行政法人国立博物館(京都国立博物館)

- 1)期間：平成13年10月6日(土)～平成13年11月4日(日)(32日間)
会場：鹿児島県歴史資料センター黎明館
入場者数：5,725人
- 2)期間：平成13年11月13日(火)～平成13年12月12日(水)(27日間)
会場：沖縄県立博物館
入場者数：6,927人

(2) 収蔵品の貸与

632点 98件の収蔵品等を貸出。
(国内 621点 94件, 海外 11点 4件)

[平成13年度展覧会協力等]

「河井寛次郎の世界 - 熱情の陶匠」

会期：平成14年1月26日(土)～3月10日(日)(38日間)

会場：茨城県陶芸美術館

主催：茨城県陶芸美術館

後援：京都国立近代美術館、NHK水戸放送局

(3) アンケート調査の実施

「前田青邨展」, 「ミニマル マキシマル ミニマル・アートとその展開」, 「京都の工芸 - 1945～2000」, 「オーストリアの現代デザイン」, 「小松均展」, 「シエナ美術展 - 絵画・彫刻・工芸の精華 - 」, 「銅版画の巨匠 長谷川潔展」の各展覧会・講演会等においてアンケートを実施した。

[展覧会]

「前田青邨展」

実施期間：平成13年4月24日(火)～6月3日(日)(37日間)

アンケート項目：別紙のとおり

結果：展覧会について約9割の肯定的意見があった。(詳細は別紙のとおり)

「ミニマル マキシマル - ミニマル・アートとその展開」

実施期間：平成13年6月19日(火)～8月12日(日)(48日間)

アンケート項目：別紙のとおり

結果：展覧会について約9割の肯定的意見があった。(詳細は別紙のとおり)

「京都の工芸 - 1945～2000」

実施期間：平成13年8月28日(火)～10月21日(日)(48日間)

アンケート項目：別紙のとおり

結果：展覧会について約8割の肯定的意見があった。(詳細は別紙のとおり)

「オーストリア・デザインの現在 - 拡がるデザインの世界」

実施期間：平成13年9月11日(火)～10月14日(日)(30日間)

アンケート項目：別紙のとおり

結果：展覧会について約 8 割の肯定的意見があった。(詳細は別紙のとおり)

「小松均展」

実施期間：平成 13 年 10 月 30 日(火)～12 月 9 日(日)(36 日間)

アンケート項目：別紙のとおり

結果：展覧会について約 10 割の肯定的意見があった。(詳細は別紙のとおり)

「シエナ美術展 - 絵画・彫刻・工芸の精華 - 」

実施期間：平成 13 年 12 月 22 日(土)～平成 14 年 2 月 11 日(月・祝)(38 日間)

アンケート項目：別紙のとおり

結果：展覧会について約 9 割の肯定的意見があった。(詳細は別紙のとおり)

「銅版画の巨匠 長谷川潔展」

実施期間：平成 14 年 2 月 21 日(木)～4 月 7 日(日)(40 日間)

アンケート項目：別紙のとおり

結果：展覧会について約 9 割の肯定的意見があった。(詳細は別紙のとおり)

「常設展」のみの開催期間

実施期間：平成 13 年 6 月 5 日(火)～平成 14 年 2 月 20 日(日)(47 日間)

アンケート項目：別紙のとおり

結果：展覧会について約 8 割の肯定的意見があった。(詳細は別紙のとおり)

[講演会]

「ミニマル マキシマル - ミニマル・アートとその展開」

ア「ミニマル・アートその基本概念と影響力」

実施期間：平成 13 年 6 月 19 日(火)(1 日間)

アンケート項目：別紙のとおり

結果：講演会について約 10 割の肯定的意見があった。(詳細は別紙のとおり)

イ「ドイツでの作家活動について」

実施期間：平成 13 年 6 月 23 日(土)(1 日間)

アンケート項目：別紙のとおり

結果：講演会について約 8 割の肯定的意見があった。(詳細は別紙のとおり)

ウ「ミニマル・アートとは何か」

実施期間：平成 13 年 7 月 14 日(土)(1 日間)

アンケート項目：別紙のとおり

結果：講演会について約 10 割の肯定的意見があった。(詳細は別紙のとおり)

「京都の工芸 - 1945～2000」

ア「戦後工芸の京風美意識」

実施期間：平成 13 年 9 月 8 日(土)(1 日間)

アンケート項目：別紙のとおり

結果：講演会について 10 割の肯定的意見があった。(詳細は別紙のとおり)

イ「京都の工芸 - 1945～2000」

実施期間：平成 13 年 9 月 15 日(土)(1 日間)

アンケート項目：別紙のとおり

結果：講演会について約6割の肯定的意見があった。（詳細は別紙のとおり）

「小松均展」

ア「小松均の人と芸術」

実施期間：平成13年11月10日（土）（1日間）

アンケート項目：別紙のとおり

結果：講演会について約7割の肯定的意見があった。（詳細は別紙のとおり）

「シエナ美術展 - 絵画・彫刻・工芸の精華 - 」

ア「シエナ美術とその魅力」

実施期間：平成14年1月12日（土）（1日間）

アンケート項目：別紙のとおり

結果：講演会について約8割の肯定的意見があった。（詳細は別紙のとおり）

「銅版画の巨匠 長谷川潔展」

ア「長谷川潔の人と芸術」

実施期間：平成14年3月9日（土）（1日間）

アンケート項目：別紙のとおり

結果：講演会について約9割の肯定的意見があった。（詳細は別紙のとおり）

[音楽会]

「シエナ美術展 - 絵画・彫刻・工芸の精華 - 」

ア「エレクトーン・タイムカプセルコンサート 時空を超えて～音楽で旅するイタリア」

実施期間：平成13年12月24日（月）（1日間）

アンケート項目：別紙のとおり

結果：講演会について約10割の肯定的意見があった。（詳細は別紙のとおり）

[シンポジウム]

「オーストリア・デザインの現在 - 拡がるデザインの世界」

ア「オーストリア・デザイン - パパネックの遺産と現在」

実施期間：平成13年9月11日（火）（1日間）

アンケート項目：別紙のとおり

結果：講演会について約9割の肯定的意見があった。（詳細は別紙のとおり）

3 調査研究

（年度計画）

（1）中期計画に基づき、調査研究を計画的に実施する。

（2）客員研究員を招聘し、調査研究活動を推進する。

（3）各館の調査研究の成果については、研究紀要、図録への論文発表等によって公表する。

（1）調査研究の実施

近代京都の工芸に関する調査研究

研究担当者：松原龍一（主任研究官）

執筆書誌：「京都の工芸」展図録として成果発表

「京都の工芸 1954-2000」松原龍一

ドイツ工作連盟に関する調査研究

研究担当者：池田祐子（主任研究官）

計画どおり次年度も継続実施

[研究助成]

- ・財団法人サントリー文化財団平成 12 年度「人文科学、社会科学に関する研究助成」
「ヘルマン・ムテジウス日本滞在中書簡草稿の調査・研究 - 近代建築・デザインの源泉をめぐる一考察」 平成 12 年 8 月 - 平成 13 年 7 月
- ・文部科学省学芸員等在外派遣研修
「ドイツ近代デザイン研究 - ドイツ工作連盟を中心に - 」
平成 14 年 3 月 9 日 - 3 月 31 日

前田青邨に関する調査研究（愛媛県立美術館等との共同研究）

研究担当者：島田康寛（学芸課長），小倉実子（研究員）

執筆書誌：「前田青邨展」図録として成果発表

「前田青邨の人と芸術」島田康寛

「作品解説」「前田青邨印譜」「主要作品の落款印章」小倉実子

「新美術新聞」926 号 「展覧会解説」小倉実子

「文化庁月報」391 号 「イベント案内」小倉実子

小松均の総合的研究（宮城県立美術館等との共同研究）

研究担当者：島田康寛（学芸課長），小倉実子（研究員）

執筆書誌：「小松均展」図録として成果発表

「小松均の遠い道程 - 己の墨画を求めて - 」島田康寛

「年譜」「主要参考文献」小倉実子

「文化庁月報」397 号 「イベント案内」小倉実子

神坂雪佳の総合的研究（アメリカ・バーミンガム美術館との共同研究）

研究担当者：島田康寛（学芸課長），池田祐子（主任研究官）

計画どおり次年度も継続実施

[研究助成]

- ・財団法人サントリー文化財団平成 13 年度「人文科学、社会科学に関する研究助成」
「神坂雪佳の総合研究 - 琳派の後継者そして近代デザインの先駆者」
平成 13 年 8 月 - 平成 14 年 7 月

アメリカの現代陶芸に関する調査研究（愛知県陶磁資料館等との共同研究）

研究担当者：松原龍一（主任研究官）

計画どおり次年度も継続実施

海外所在の近代日本美術品についての所蔵美術館との調査研究

研究担当者 内山武夫（館長）

計画どおり次年度も継続実施

他の美術館等における調査研究に対する協力

1) 研究担当者 河本信治（主任研究官）

執筆書誌：「横浜トリエンナーレ 2001 展」図録として成果発表

「横浜プロジェクト：そして、ポジションについて」河本信治

2)研究担当者：山野英嗣（主任研究官）

執筆書誌：「かざりとかたち展」図録として成果発表

「近代絵画における『装飾』性再考」山野英嗣

（追加実施）

ミニマル・アートについての調査研究

研究担当者 尾・信一郎（主任研究官）

ポーラ美術振興財団平成12年度研究助成

「1960年代以降の日本とアメリカにおける非実体的な美術活動に関する研究」

執筆書誌：「ミニマル マキシマル」展図録として成果発表

「ミニマル・アートあるいは帰還不能点」尾崎信一郎

4 教育普及

（年度計画）

- （1）国内外の美術館等との交換図書等による資料の積極的収集を図ると共に情報コーナーの設置等ファレンス機能の充実を図る。
- （2）館が収蔵している作品のデータ・画像入力を行い、広く公衆のニーズに応えるため、データベース化を推進する。
- （3）国内外の美術館等との連携を強化し、情報コーナー、アトライブラリー、資料閲覧室等、情報資料関係の施設の整備・充実を図る。
- （4）各館は児童生徒を対象とした教育普及事業を実施する。
- （5）講演会等を実施する。
- （6）美術館関係者を対象とした、研修事業の実施する。
- （7）他の機関が実施する研修への協力を実施する。
- （8）各館それぞれに研究成果を踏まえて次の出版事業等を行う。
- （9）それぞれの館のホームページを積極的に活用して広く公衆への普及及び広報を行う。また、4館共同の広報体制を整備するため法人のホームページを作成し、中期目標、中期計画、年度計画等を公表する。
- （10）ボランティア等の在り方や企業との連携等について検討を行う。
- （11）新たな美術館施設の円滑な運営について

（1）資料収集及びレファレンス機能の充実

ア．外国との交換件数 7件

イ．4階フリースペースに展覧会・所蔵品図録等のコーナーを設置し、レファレンス機能の充実を図った。

（2）作品データ等のデータベース化の推進

13年度当初における所蔵品約6,600点のうちこれまでに約3,000点の文字データ及び約2,850点の画像データのデータベース化を実施した。ただし、著作権の存続している作品が多数を占めるため外部への公開については、適切に対処していく。

（3）資料閲覧室等の整備

近年開催の当館展覧会図録等の閲覧コーナーを4階に設置。また、1階においても他館の展覧会情報等を提供。

（4）児童生徒に対する教育普及事業の実施

京都市立小学校教諭グループと協力し小学1年生から6年生を対象とするワークショップを実施(平成14年2月9日(日)参加者47名)。

上記計画に掲げたワークショップ以外に、京都市教育委員会、京都市立中学校と連携し、中学生を受入れ、美術館業務を体験させることにより、美術への関心を深め、社会の主体としての自覚を育成することとして事業「生き方探求・チャレンジ体験」を実施。

(平成14年1月29日(火)～31日(木)、安祥寺中学校3名

平成14年2月26日(火)～28日(木)、神川中学校 4名)

(5) 講演会等の実施

講演会

ア) 平成13年4月25日(水)午後2時～3時30分

「前田青邨展」講演会

演 題：青邨先生を偲ぶ

講 師：日本画家 平山郁夫氏

会 場：京都市国際交流会館イベントホール

参加者：116名

共 催：日本経済新聞社

イ) 平成13年5月12日(土)午後2時～3時30分

「前田青邨展」講演会

演 題：青邨画の軌跡

講 師：名古屋市美術館学芸係長 吉田俊英氏

会 場：京都国立近代美術館講堂

参加者：85名

共 催：日本経済新聞社

ウ) 平成13年6月19日(火)午後2時～3時30分

「ミニマル マキシマル ミニマル・アートとその展開」講演会

演 題：ミニマル・アート その基本概念と影響力

講 師：プレーメン、ウェーザーブルク現代美術館キュレーター
ペーター・フリーゼ氏

会 場：京都国立近代美術館講堂

参加者：85名

エ) 平成13年6月23日(土)午後2時～3時30分

「ミニマル マキシマル ミニマル・アートとその展開」講演会

演 題：ドイツでの作家活動について

講 師：彫刻家、プレーメン芸術大学教授、本展出品作家 竹岡雄二氏

会 場：京都国立近代美術館講堂

参加者：76名

オ) 平成13年7月14日(土)午後2時～3時30分

「ミニマル マキシマル ミニマル・アートとその展開」講演会

演 題：ミニマル・アートとは何か
講 師：当館主任研究官 尾崎信一郎
会 場：京都国立近代美術館講堂
参加者：103名

カ)平成13年9月8日(土)午後2時～3時30分

「京都の工芸1945-2000」講演会
演 題：戦後工芸の京風美意識
講 師：美術ジャーナリスト 藤慶之氏
会 場：京都国立近代美術館講堂
参加者：23名

キ)平成13年9月15日(土)午後2時～3時30分

「京都の工芸1945-2000」講演会
演 題：京都の工芸1945-2000
講 師：当館主任研究官 松原龍一
会 場：京都国立近代美術館講堂
参加者：23名

ク)平成13年11月10日(土)午後2時～3時30分

「生誕100年記念 小松均展」講演会
演 題：小松均の人と芸術
講 師：倉敷芸術科学大学芸術学部教授 平野重光氏
会 場：京都国立近代美術館講堂
参加者：62名

ケ)平成14年 1月12日(土)午後2時～3時30分

「シエナ美術展」講演会
演 題：シエナ美術とその魅力
講 師：東京大学大学院人文社会系研究科教授 小佐野重利氏
会 場：京都国立近代美術館講堂
参加者：127名

コ)平成14年 3月 9日(土)午後2時～3時30分

「銅版画の巨匠 長谷川潔展」講演会
演 題：「長谷川潔の人と芸術」
講 師：当館学芸課長 島田康寛
会 場：京都国立近代美術館講堂
参加者：53名

音楽会

ア)平成13年9月10日(月)午後6時～8時

「オーストリア・デザインの現在 - 広がるデザインの世界」音楽会
演 題：austrian lab

D J : パトリック・パルシンガー氏
エルテム・ツナカン氏

会 場：京都国立近代美術館エントランスホール

参加者：131名

イ) 平成13年12月24日(月)午後2時～3時30分

「シエナ美術展」音楽会

演 題：エレクトーン・タイムカプセルコンサート

「時空を超えて～音楽で旅するイタリア」

演奏者：高崎芸術短期大学助教授 松本玲子氏

会 場：京都国立近代美術館エントランスホール

参加者：100名

シンポジウム

ア) 平成13年9月11日(火)午後2時～3時30分

「オーストリア・デザインの現在 - 広がるデザインの世界」

演 題：オーストリア・デザイン - パパネックの遺産と現在 -

パネリスト：建築家 クリスティアン・クネヒトル氏

建築家 ライナー・ツェトル氏

建築家 竹山 聖氏

会 場：京都国立近代美術館講堂

参加者：62名

講演会等参加者(当館主催実施分)

講 演 会 753名

音 楽 会 231名

シンポジウム 62名

総数 1,046名

(平成12年度 766名)

国立博物館・美術館巡回展 講演会

ア 平成13年10月13日(土)

「かざりとかたち」展

演 題：「日本美術の『装飾』性再考」

講 師：山野英嗣(当館主任研究官)

会 場：鹿児島県歴史資料センター黎明館講堂

参加者：105名

(6) 他機関の研修への協力

美術館関係者を対象とした研修事業の実施

上級キュレーター研修を実施し、公立美術館関係者2名を受入れた。

- ア．氏名 廣田いずみ
 所属 小松市立宮本三郎美術館
 職名 学芸員
 期間 平成13年11月1日～平成13年12月28日
- イ．氏名 小川知子
 所属 大阪市立近代美術館建設準備室
 職名 学芸員
 期間 平成14年1月4日～平成14年2月28日

他の機関が実施する研修への協力

大学生を対象に学芸員資格取得のための「博物館実習」に係る学生を受入れ実習を行った。

【第 期】平成13年8月20日(月)～8月24日(金)5日間

関西学院大学(3名)

成安造形大学(2名)

追手門学院大学

京都造形芸術大学

立命館大学(2名)

近畿大学

金沢美術工芸大学

京都光華女子大学(2名)

京都教育大学

宝塚造形芸術大学 計 15名

【第 期】平成13年8月27日(月)～8月31日(金)5日間

池坊短期大学(3名)

宝塚造形芸術大学 計 4名

【二期間】平成13年8月20日(月)～8月31日(金)

(ただし、土、日曜日休み)

滋賀県立大学

大阪芸術大学

武蔵大学

甲南女子大学 計 4名

合計 15大学 23名

(7)「年報」等の発行事業等

「平成12年度年報」

平成14年3月発行

「京都国立近代美術館概要」

平成13年6月発行

展覧会に伴う図録の発行

企画展等

ア.「ルネ・ラリック 1860-1945」(平成13年2月10日～4月15日)

30.5×23.5 cm 377 頁

収録論文等

「ルネ・ラリックの宝飾芸術 - 創造世界を支える技法」イヴォンヌ・ブリュナメール

「多様性の統一 - ルネ・ラリックのガラス作品」

デヴィッド・リヴァ・マックファーデン(翻訳:池田祐子(当館主任研究官))

「愛すべきよきもの - ラリック

- 日本にもたらされたルネ・ラリック活動期の作品について」池田まゆみ

「欧亜のエクスペディション - ラリックと旧朝香宮邸に関する考察」牟田行英

「ルネ・ラリック年表 1860-1945」「図版」「章解説」「出品作品リスト」

「主要参考文献」「用語解説」

監修:イヴォンヌ・ブリュナメール、マリー＝ロール・ペラン

編集:富田章、牟田行英、池田祐子、泉川真紀

翻訳監修:池田まゆみ

発行:アプトインターナショナル

平成13年2月発行

イ.「前田青邨展」(平成13年4月24日～6月3日)

29.8×22.5 cm 212 頁

表紙2パターンあり(内容は同じ)

図版 原色106点

参考図版 モノクロ15点

収録論文等

「前田青邨先生の二つの思い出」平山郁夫

「前田青邨 - その時代を超えた晴朗な画風」内山武夫(当館館長)

「前田青邨の人と芸術」島田康寛(当館学芸課長)

「青邨の渡欧 - その目的と成果 - 」上園四郎

「梶田半古塾のこと - 前田青邨の修業時代」梶岡秀一

「作品解説」上園四郎、木下悦子(以上笠岡市立竹喬美術館)、梶岡秀一(愛媛県美術館)、小倉実子(当館研究員)

「前田青邨印譜」「主要作品の落款印章」小倉実子(当館研究員)編

「年譜」「文献目録」木下悦子編

編集:京都国立近代美術館、愛媛県美術館、笠岡市立竹喬美術館、日本経済新聞社

デザイン:大向 務、今西 久(大向デザイン事務所)

翻訳:マーサ マクリントク

発行:日本経済新聞社

平成13年4月発行

ウ.「ミニマル マキシマル - ミニマル・アートとその展開」

(平成13年6月19日～8月12日)

29.6×21.0 cm 382 頁

図版 カラー75点 モノクロ14点

収録論文等

「ミニマル・アートの基本概念」グレゴール・シュテムリヒ

「われわれはどこから来たのか どこへ歩いていくのか 休暇はどこへ行くのか
フランス・トネッリのために」マルグリッド・ブレーム

「おお、これが私の愛するドナルド・ジャッドだ！ 芸術についての芸術、あるいは、
ミニマル・アートはどのような影響を及ぼしたか。」ペーター・フリーゼ

「ミニマリズムなんて忘れた...！」ステファン・シュミット＝ヴルフェン

「ミニマル・アートあるいは帰還不能点」尾崎信一郎（当館主任研究官）

「作家・作品解説」

「出品作品リスト」

日本語版編集：半田滋男 水沼啓和（千葉市美術館） 尾崎信一郎（当館主任研究官）
山口洋三（福岡市美術館）

デザイン：ハイモ・ツォーベルニク

発行：千葉市美術館、京都国立近代美術館、福岡市美術館

平成13年6月発行

エ.「京都の工芸 - 1945～2000」(平成13年8月28日～10月21日)

30.0×20.0 cm 272 頁

表紙1種

図版 原色291点

参考図版 モノクロ20点

収録論文等

「京都の工芸 - 1945～2000」松原龍一（当館主任研究官）

「作家解説」土岐加寿子、松原龍一

「年譜」松原龍一

デザイン：西岡勉

編集：京都国立近代美術館

発行：京都国立近代美術館

平成13年8月発行

オ.「オーストリアのデザインの現在～広がるデザインの世界」

(平成13年9月10日～10月14日)

オーストリア連邦総理府美術局制作の英文カタログ(20.0×15.0 cm 180頁)に和文訳
小冊子を日本国内巡回展用カタログとして使用。

(和文訳小冊子)

20.0×15.0 cm 24 頁

収録論文等

「現代デザインの目的と応用へのある包括的アプローチ」アイヒンガール&クネヒトル

「共産主義者がマイクロフォンを手に入れたらどうなるか？」フローリアン・ブムファー

スル

「不可視のデザイン」ルキウス・ブルクハルト

「デザインについての対話：デザインの消失と再出現」ゲルト・セツレ

編集：京都国立近代美術館 / 原美術館

翻訳：原美術館

デザイン：木村三晴

発行：京都国立近代美術館 / 原美術館 / 国際デザインセンター

平成13年9月発行

カ . 「小松均展」(平成13年10月30日～12月9日)

29.0×26.0 cm 176頁

図版 原色60点

参考図版 モノクロ48点

収録論文等

「修行の画家 - 小松均の芸術」内山武夫(当館館長)

「小松均の遠い道程 - 己の墨画を求めて - 」島田康寛(当館学芸課長)

「小松均《八瀬》をめぐって - 大原女・南洋憧憬・ユートピア - 」庄司淳一

「富山と小松均 - 書簡にみる小松均 - 」福井文夫

「小松均の最上川連作」岡部信幸

「小松均展によせて」甲田美憲

「年譜」「主要参考文献」小倉実子(当館研究員)編

編集：京都国立近代美術館、読売新聞大阪本社

発行：読売新聞大阪本社

平成13年10月発行

キ . 「シエナ美術展 - 絵画・彫刻・工芸の精華 - 」

(平成13年12月22日～平成14年2月11日)

30.5×23.0 cm 180頁

図版 カラー115点

収録論文等

「シエナ派絵画の魅力」高階秀爾

「中世の理想都市シエナとその美術 [14-16世紀前半]」小佐野重利

「トスカーナ大公国シエナとその美術 [16世紀後半-19世紀]」上村清雄

「モンテ デイ パスキ ディ シエナ銀行の美術コレクションの歴史」

モンテ デイ パスキ ディ シエナ銀行

「作家解説」

「関連年表」

「参考文献」

「関連地図」

「出品リスト」

日本語版編集：東京ステーションギャラリー、京都国立近代美術館、群馬県立近代美術館、

山口県立美術館

翻訳：鈴木マリア・アルフォンサ

デザイン：笠毛和人

発行：朝日新聞社

平成13年12月発行

ク.「かざりとかたち」

1)平成13年10月6日(土)～平成13年11月4日(日)(32日間)

会場：鹿児島県歴史資料センター黎明館

2)平成13年11月13日(火)～平成13年12月12日(水)(27日間)

会場：沖縄県立博物館

29.5×21.8 cm 192頁

収録論文等

「前近代のかざりとかたち」久保智康

「近代絵画における『装飾』性」再考」山野英嗣(当館主任研究官)

「図版」

「作品解説」

「出品目録」

「英文出品目録」

編集：京都国立博物館、京都国立近代美術館

発行：京都国立博物館、京都国立近代美術館、鹿児島県歴史資料センター黎明館、
沖縄県立博物館

平成13年10月発行

美術館ニュース「視る」 6回発行

ア.第394号(平成13年4-5月号)

「岳父前田青邨の思い出」

東京大学名誉教授 秋山光和氏

「喜寿の青春」

東京文化財研究所名誉研究員 關千代氏

イ.第395号(平成13年6-7月号)

「可視的な音楽」

京都国際現代音楽フォーラムディレクター 藤島寛氏

「立方体と暴力」

京都国立近代美術館主任研究官 尾崎信一郎

平成12年度新収蔵作品

ウ.第396号(平成13年8-9月号)

「戦後・染織工芸の示すもの」

京都府京都文化博物館学芸員 藤本恵子氏

「戦後の陶芸の幕開け、京都 - さまざまな分野の交差点」

滋賀県立陶芸の森学芸員 三浦弘子氏

- 「不可視のデザイン - オーストリア現代デザインの原点」
建築家 クリスティアン・クネヒトル氏
- エ 第397号(平成13年10 - 11月号)
「小松均の人生とその芸術の展開」
成城大学教授・秋田県立近代美術館長 田中日佐夫氏
「小松さんの思い出」
京都市芸術功労者・財団法人西陣織物館名誉顧問 山口伊太郎氏
- オ 第398号(平成13年12月 - 平成14年1月号)
「シエナ美術展に寄せて」
- モンテ デイ パスキ ディ シエナ銀行および
キージ・サラチーニ・コレクションの歴史と特徴 - 」
群馬県立近代美術館学芸課長 上村清雄氏
「シエナ美術の二面性 - その解放性と閉鎖性」
京都大学助教授 岡田温司氏
- カ 第399号(平成14年2月 - 平成14年3月号)
「長谷川潔の芸術 永遠の美を探る」
版画研究家 魚津章夫氏
「長谷川潔作品とリズム」
横浜美術館学芸部企画課長 猿渡紀代子氏
- 収蔵品目録 『京都国立近代美術館所蔵名品集 [日本画]』
26.3×18.8 cm 264 頁
本文：収録論文等
「京都国立近代美術館の日本画コレクションについて」内山武夫(当館館長)
図版
作家略歴(当館学芸課担当)
所蔵日本画総目録
編集：京都国立近代美術館
発行者：長澤浩三
発行所：光村推古書院株式会社
平成14年3月発行
- 展覧会カレンダー 3回(種)発行
ア.「京都国立近代美術館展覧会カレンダー2002」
平成14年2月発行
イ.「京都国立近代美術館展覧会のご案内2002」
平成14年1月発行
ウ.「京都国立近代美術館展覧会定期入れ用のご案内2002」
平成14年2月発行
- 「京都国立近代美術館案内リーフレット」
平成13年8月発行

(8) ホームページの活用

独立行政法人国立美術館のインターネットホームページを開設，中期目標、中期計画、年度計画、業務方法書等を公表した。

(<http://www.momat.go.jp/AINMoA/index.html> 参照)

当館のホームページ(平成8年度開設)においては、館の概要、展覧会情報、常設展示目録、年報、ミュージアムショップや喫茶室の情報などを広く館外へ発信した。

平成13年度のアクセス件数 約120,000件

(平成12年度 約88,000件)

(9) ボランティア・企業との連携等の検討

「京都市博物館ふれあいボランティア養成講座」を主催する京都市教育委員会等と連携し、ボランティア受入れについて、検討をはじめた。

5 その他の入館者サービス

(年度計画)

(1) 高齢者・身体障害者等に配慮した設備等の充実を図る。建物のバリアフリー化を進め、高齢者・身体障害者等にやさしい美術館を目指す。

(2) 案内情報の充実、車椅子の提供等、入館者サービスの充実を図る。

(3) 展示説明の見直しなど、鑑賞環境の充実に努める。又、音声ガイドの検討及び作品リストの無料配布等を行う。

(4) 小中学生の常設展示入場料の無料化や観覧時間拡充の検討を行う。

(5) フリーゾーンの活用、レストラン及びミュージアムショップの充実など附属施設の充実を図る。

(1) 高齢者・身体障害者等に配慮した設備等の充実等

[当館の実施状況] は平成13年度の新規実施事項

- ・外部との出入り口に車椅子使用者が通行できるスロープを設置。
- ・ゲートに施設職員と連絡できるインターホンを設置。
- ・外部との出入り口を自動ドア化。
- ・車椅子対応エレベーターの設置。
- ・視覚障害者誘導用のチャイムの設置。
盲導犬・介助犬が同行可能。
- ・車椅子使用者手洗い付きトイレを設置(1階)。
- ・手すり付き小便器を設置。
- ・展示会場内の車椅子によるスムーズな移動を支援するため4階常設展示会場床をゴムタイルに張替え。

(2) 案内情報の充実、車椅子の提供等、入館者サービスの充実

[当館の実施状況] は平成13年度の新規実施事項

館内案内リーフレットに車椅子利用者用トイレを表示

身障者のための施設利用案内ホームページ(平成13年10月1日開設「人にやさしい

まちづくりホームページ」京都府福祉まちづくり推進協議会)に当館利用のための

案内ページを掲載

- ・貸し出し用車いす（座席昇降機能付を含む4台）を用意。
貸し出し用ベビーカー（2台）を用意。
- ・おむつ換え用のベビーシート（1台）を用意。
- ・館内各所に日本語・英語両表記による案内表示を設置。
- ・1階エントランスホール、3階企画展会場、4階ロビー及び常設展示会場内に館内案内
- ・展示作品紹介等、館の情報を提供する端末機(6台)を設置。
視覚障害者の美術鑑賞支援として、展覧会出品作品の解説及び「手で触れる」鑑賞体験介
添え

(3) 鑑賞環境の充実

[当館の実施状況] は平成13年度の新規実施事項

- 「ルネ・ラリック展」において、音声ガイドを用意。
常設展示の作品リスト（日本語・英語版）の無料配布。
企画展示（長谷川潔展）の作品リスト（日本語・英語版）の無料配布。
- ・アンケートの状況を踏まえ、キャプション等文字表示を大きくするなど適切な改善を
今後行うこととした。

(4) 小中学生の常設展入場料の無料化や観覧時間拡充の検討

[当館の実施状況] は平成13年度の新規実施事項

- 平成14年2月21日（木）より、小中学生の常設展観覧料を無料とし、かつ同日から
開催された「銅版画の巨匠 長谷川潔展」（当館単独主催）についても同様に無料とした。
開館については午前9時30分から午後5時までであったが、4月19日から10月19日
までの毎週金曜日を午後8時まで時間を延長して開館した。

(5) フリーゾーンの活用，レストラン及びミュージアムショップの充実

を図る。

[当館の実施状況] は平成13年度の新規実施事項

- ・愛される開かれた美術館の環境・場所づくりを目指し、喫茶室、ミュージアムショップ
を含む1階エントランスホール、ロビー及び4階展望ロビーをフリーゾーンとし、広く
解放している。これにより喫茶室、ミュージアムショップへの利便性を高めた。
1階エントランスホール、4階ロビーには休憩用椅子を多数配置し、展覧会入場者だけ
でなく全ての来館者が憩える場所として提供。
1階エントランスホール、4階ロビーに館内案内・展示作品等の情報を提供する情報
端末機を設置。また、1階エントランスホールには他館の展覧会情報を提供するコーナ
ーを、4階ロビーには図録等を閲覧できる情報コーナーを設置。
1Fエントランスホールで展覧会にちなんだ音楽会を企画，開催。
- ・喫茶室において各展覧会にちなんだメニューを提供。
- ・ミュージアムショップにおいて、展覧会関連グッズ他美術館ならではの商品を用意，販売。

6 職員の研修の実施（その他主務省令で定める業務運営に関する事項）

（年度計画）

職員の意識向上を図るため、次の職員研修を実施する。

- 1) 新規採用者・転任者職員研修、2) 接遇研修
外部の研修に職員を積極的に派遣し、その資質の向上を図る。

（1）職員の研修の実施

[当館の実施状況]

全職員等を対象に接遇研修を実施した。

日時：平成14年2月18日（月）

場所：京都国立近代美術館1階講堂及び全館

対象：京都国立近代美術館常勤職員、非常勤職員、
常設展非常勤職員、企画展職員

人数：約70名

研修内容

- ・手話通訳者による講演：「聴こえないってどんなこと」
- ・専門家による接遇指導：「お客様の満足のために」
- ・地域管轄消防署協力による避難訓練の実施

業務委託業者も含む館関係者全員による避難・誘導、消火、防火訓練

[派遣・参加状況]

ア 人事院研修への派遣

- ・任用実務担当者研修参加

（1名）平成13年5月31日（木）

- ・近畿地区中堅係員研修参加

（1名）平成13年6月18日（月）～6月21日（木）

- ・給与実務担当者研修会参加

（1名）平成13年7月11日（水）～7月13日（金）

- ・人事院勧告に関する説明会参加

（1名）平成13年8月10日（金）

- ・近畿地区上級係員研修参加

（1名）平成14年1月22日（火）～1月25日（金）

- ・サービス・倫理及び職員団体制度説明会参加

（1名）平成14年1月23日（水）

（1名）平成14年1月25日（金）

- ・改正給与法説明会参加

（1名）平成14年1月29日（火）

イ 文部科学省学芸員等在外派遣研究員としての派遣

ドイツ連邦共和国

（1名）平成14年3月9日（土）～3月31日（日）

ウ 文部科学省研修への派遣

長期給付実務研修会

(1名) 平成13年10月30日(火)～10月31日(水)

国際企画担当職員研修

(1名) 平成13年10月2日(火)～10月5日(金)

近畿地区国立大学等 種採用職員研修(当番:京都大学)

(1名) 平成14年1月9日(水)～1月11日(金)

エ 財団法人日本博物館協会の近畿支部長館として、近畿地区の各館園約190館のとりまとめを行うとともに所属館園が参加の支部外地域での研修会を企画・実施(平成13年10月11日～12日、会場 企業系博物館:トヨタ博物館 公立博物館:愛知県陶磁資料館、豊田市美術館)

オ 特定非営利活動法人が実施する研究発表会への派遣

「ミュージアム業界顧客満足度調査 結果発表会」への派遣

(2名)平成14年3月6日(水)

主催:特定非営利活動法人ビュー・コミュニケーションズ

会場:リーガロイヤルNCB

カ 京都市内博物館施設連絡協議会が実施する研修会への派遣

「平成13年度他都市博物館施設への視察研修」

(2名)平成14年3月7日(木)

主催:京都市内博物館施設連絡協議会・京都市教育委員会

会場:大阪歴史博物館、なにわの海の時空館

国立西洋美術館

概要

(1) 設置年月日

昭和34年4月1日

(2) 施設の規模等

17,547㎡

展示面積 4,713㎡

(本館 昭34.2.28 竣工 地上3階、地下1階 4,534㎡ 展示面積1,548㎡)

(新館 昭54.5.31 竣工 地上2階、地下2階 4,867㎡ 展示面積1,647㎡)

(渡り廊下 昭54.5.31 竣工 地上2階 89㎡)

(企画展示館 平9.12.25 竣工 地上2階、地下4階 8,057㎡)

展示面積1,518㎡)

(3) 目的

国立西洋美術館は、昭和34年、東京・上野公園の一角にフランス政府から寄贈返還された松方コレクション(印象派の絵画及びロダンの彫刻を中心とするフランス美術コレクション)を基礎に、西洋美術作品を広く公衆の観覧に供するとともに、西洋美術を専門的に調査研究する機関として開館した。

以来、これまで広く西洋美術全般を対象とする唯一の国立美術館として、展覧事業のみならず、西洋美術に関する作品及び資料の収集・保存、調査研究、教育普及、出版物の刊行等を行ってきた。

当館の目的は、現在及び将来においてできる限り効果的に作品を展示し、また、幅広い人々に作品への理解と楽しみが深められるように、コレクションを管理かつ拡充し、西洋美術及び、保存、美術情報、美術館教育の調査研究に努めることである。

(4) 定員

館長	副館長	事務系	研究系	合計
1	1	17	12	31名

1. 収集・保管等

(年度計画)

- (1) 中期計画に基づき、美術作品等を購入する。
- (2) 寄贈・寄託品の積極的な活用を図る。
- (3) 24時間空調等による作品の保存管理及び館内各所の環境モニターを実施する。
- (4) 緊急に修復を必要とする収蔵品のうち、緊急性の高いものから各分野ごとに計画的に修復を行う。
- (5) 国内外の美術館等に対し、修復保存に関する協力と普及の推進を図る。

(1) 美術作品等の購入

中世末期から20世紀初頭に至る西洋美術の流れの概観が可能となるよう、基本的収集方針に基づき、美術作品購入選考委員会及び評価員による審議のもと、下記の美術作品27点を297,531,183円で購入。コレクションの強化を図った。

平成13年度購入美術作品

- グイド・レーニ《ルクレティア》(1636~38年頃、油彩)
- マリー＝ガブリエル・カペ《自画像(デッサンをする画家)》(1783年頃、油彩)
- フランク・ブランギン《時化の日》(1889年、油彩)
- パブロ・ピカソ《貧しき食事》(1913年、エッチング)
- ハインリヒ・アルデグレーファー《レア・シルウィア》(1532年頃、エングレーヴィング)
- ハンス・バルドゥング・グリーン《闘う雄馬》(1534年、木版)
- イスラエル・ファン・メッケネム《荊冠を受けるキリスト》(エングレーヴィング)
- アルブレヒト・デューラー《フォルトゥーナ(小)》(1495年頃、エングレーヴィング)
- アルブレヒト・デューラー《馬に乗る女性と傭兵》(1497年頃、エングレーヴィング)
- ウジェーヌ・カリエール《エドモン・ド・ゴンクール》(1896年、リトグラフ)
- ウジェーヌ・カリエール《ポール・ヴェルレーヌ》(1896年、リトグラフ)
- ウジェーヌ・カリエール《アンリ・ロシュフォール》(1896年、リトグラフ)
- ウジェーヌ・カリエール《ピュヴィ・ド・シャヴァンヌ》(1897年、リトグラフ)
- ルカス・クラナハ(父)《聖ヨハネス・クリュソストムスの悔悛》(1509年、エングレーヴィング)
- フェリクス・ブラックモン《ラ・フォンテーヌの寓話》(6点セット)(1886年出版、エッチング)
- 15世紀イタリア派《洗礼者聖ヨハネ》(15世紀、二エロ版画)
- ステファノ・デッラ・ベッラ《メディチ家の壺》(1656年、エッチング)
- ステファノ・デッラ・ベッラ《噴水のある道》(1656年、エッチング)
- セバステアノー・デ・ヴァレンティニス《エジプト逃避途上の休息》(エッチング)
- ルカス・ファン・レイデン《幼子イエスを抱く聖母マリアと二天使》(1523年、エングレーヴィング)
- シャルル・メリヨン《吸血鬼》(1853年、エッチング、ドライポイント)
- レンブラント・ハルメンス・ファン・レイン《柔らかい帽子と刺繍付きの外套をまとった自画像》(1631年、エッチング)

(2) 寄贈・寄託品の積極的な活用

寄贈作品については、旧松方コレクションなど、当館の収蔵品にふさわしい作品16点について寄贈受入を行った。今後も美術作品の寄贈・寄託の受入を推進し、展示の充実、研究資料として積極的な活用を図っていく。

寄贈者：社団法人 糖業協会

ウッドナル製《庭園婦女之図》(17世紀、タペストリー)(旧松方コレクション)

寄贈者：株式会社 日本興業銀行

フランドル製《アタランタとヒッポメネス》(17世紀、タペストリー)(旧松方コレクション)

フランス王立ゴブラン織工房製《ポロスとの戦い》(1670年頃、タペストリー)(旧松方コレクション)

ブリュッセル製《村祭》(17世紀末頃、タペストリー)(旧松方コレクション)

オビュッソン製《田園の恋人たち》(18世紀前半?、タペストリー)(旧松方コレクション)

リール製《狩人と娘たち》(1700年頃、タペストリー)(旧松方コレクション)

寄贈者：江口 滋子 氏

レオナルド・ビストロフィ《セガンティーニ記念碑》(1899~1906年、彫刻)(旧松方コレクション)

レオナルド・ビストロフィ《ドゥリオ家のための墓碑：思い出によって癒された悲しみ》(1898~1901年、彫刻)(旧松方コレクション)

レオナルド・ビストロフィ《アベグの墓碑》(1912~13年、彫刻)(旧松方コレクション)

レオナルド・ビストロフィ《死の花嫁たち》(1894~97年、彫刻)(旧松方コレクション)

レオナルド・ビストロフィ《アンヘロ・ヒオレロの墓碑》(1907~13年、彫刻)(旧松方コレクション)

レオナルド・ビストロフィ《恋人たち》(1883~84年、彫刻)(旧松方コレクション)

レオナルド・ビストロフィ《“生と死”のための習作》(彫刻)(旧松方コレクション)

レオナルド・ビストロフィ《“犠牲”》(彫刻)(旧松方コレクション)

寄贈者：ヘルムート・H・ルンブラーノ/ペトラ・ルンブラーノ夫妻

アドルフ・ムイユロン《自作エッチング「ヤン・シックス」を見るレンブラント(ニコラス・ピーネマンの油彩画による)》(1852年頃、素描)

寄贈者：古賀 知章 氏

ルカス・クラナハ(父)《マルクス・クルティウスの殉教》(1506年頃、木版画)

(3) 作品の保存管理

国立西洋美術館では、会場内、収蔵庫ともに24時間空調を実施している。

会場内では作品を良好な状態で展示するため、館内数十個所の温度・湿度、空気汚染、照明、防災対策、保安対策などの調査を継続的に実施、必要に応じた改善を行っている。

また、収蔵庫の温度・湿度のデータ管理により、作品への影響を最低限とするよう空調設備の運転を行っている。

今年度、本館展示室入口等に風除扉を新設し、より一層の展示室内の温湿度安定を図った。なお、この新設工事に伴う空気汚染調査も併せて実施した。

環境モニター調査結果

「国立西洋美術館における室内空気汚染調査・対策の事例」

(『国立西洋美術館研究紀要』no.6)

(4) 収蔵品の修復

緊急性の高いものを優先して美術作品の保存修復処置及び、修復処置に伴う作品に用いられた材料の科学分析を行った。また、収蔵品の計画的修復実施に向けて、修復計画作成、点検調査ファイル更新、保存修復設備等の整備を図った。

クリベリ作品額縁修復

版画作品修復処置 ピラネージ 14点、漆原作品 10点

版画作品保存処置 27点

新収蔵版画素描作品保存処置 11点

前庭彫刻保存処置 ロダン「地獄の門」「カレーの市民」「考える人」 3点

(5) 国内外に対する修復保存に関する寄与

他機関との情報交換の円滑化、当館に寄せられる修復・保存上の助言要請への対応、研修会等への研究員の派遣を積極的に行い、国内外への修復保存に関する寄与を図っている。

平成13年度、当館の主任研究官を欧米の美術館等研究機関に派遣し、最新の保存修復技術及び、保存修復技術者研修制度と養成科目等についての調査を行った。

全国美術館会議学芸員研修会「鑄造彫刻作品の収蔵・展示と鑄造管理の望ましい在り方について」(愛知県美術館)へ研究員2名を派遣し、管理技術の向上、防災対策についての研究交流・情報交換及び、推進・充実を図った。

平成13年7月に、長崎県教育委員会の「美術作品の保存修復を通して美術の真髄に触れ、文化財保護を学ぶ」というテーマによる指導力向上のための派遣研修に協力し、長崎県立高校の美術教諭1名に対して10日間の研修を行った。

平成13年3月に、イタリア学術会議電磁波研究所から外国人研究員2名を招聘して「光ファイバーを用いた反射スペクトルとImaging Spectroscopyによる非破壊調査法」講演会を開催し、関係者による研究交流・情報交換を図った。

2. 公衆への観覧

(年度計画)

- (1) 中期計画に基づき、展覧会や企画上映等を実施する。
- (2) 全国の公私立美術館等と連携して地方巡回展を実施する。
- (3) 展覧会については、その開催目的、想定する対象層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境、広報活動、過去の入場者数の状況等を踏まえて入場者数について目標を設定し、その達成に努める。
- (4) それぞれの館の収蔵品について、その保存状況を勘案しつつ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に実施する。
- (5) 入館者に対するアンケート調査を実施し、そのニーズや満足度を分析し、展覧会等に反映させる。

(1) 展覧会の実施

「日伊二国間交流展 イタリア・ルネサンス宮廷と都市文化展」

期間：平成13年3月20日(火)～7月8日(日)(86日間)

(3月20日からの総開催日数97日間)

会場：国立西洋美術館(企画展示館)

出品点数：178点

入場者数：375,643人(1日平均4,368人)(目標入場者数：360,000人)

(3月20日からの総入館者数422,721人)

共催者：日本経済新聞社

協賛・協力：EPSON、キリンビール、資生堂、大日本印刷、東レ、野村証券、山之内製薬、安田火災海上保険、アリタリア航空、JR東日本、日本通運

<新聞雑誌関係記事>

・「四年かけて集められた名品180点による<イタリア・ルネサンス 宮廷と都市の文化展>」/『望星』(2001年3月号)

・MUSEUM「イタリア・ルネサンス 宮廷と都市の文化展」/『ペーネペーネ』(2001年4月号)

・魅力の一点「ラファエロ ヴェールの女」中山忠彦(画家)/『日経新聞夕刊』(2001年3月27日 1面)

・「空前のスケールと水準」宝木範義(美術評論家)/『公明新聞』(2001年4月3日 5面)

・魅力の一点「マザッチョ 聖母子(くすぐりの聖母)」木崎さと子(作家)/『日経新聞夕刊』(2001年3月28日 1面)

・魅力の一点「ティツィアーノ 悔悛するマグダラのマリア」後藤康男(安田火災海上保険名誉会長)/『日経新聞夕刊』(2001年3月29日 1面)

・文化往来「ルネサンスの精神性など論じるシンポ」/『日経新聞』(2001年3月29日 44面)

・魅力の一点「ダ・ヴィンチ 月桂冠を戴く男の頭部」八代亜紀(歌手)/『日経新聞夕刊』(2001年3月31日 1面)

・”RENAISSANCE BEAUTY How Italy taught the world to see”/『THE JAPAN TIMES』(2001年4月11日)

・文化の話題「歴史の時間と空間をつきぬける力と魅力」森田義之(愛知県立芸術大学教

- 授、イタリア美術史) / 『赤旗新聞』(2001年4月22日 10面)
- ・芸術展望「見ごたえのある名品ふくむ展覧」柏木博(武蔵野美術大学教授) / 『聖教新聞』(2001年4月29日)
- ・ひとりじめ招待席「イタリア・ルネサンス 宮廷と都市の文化展」 / 『メイプル』(2001年4月号)
- ・「咲き誇るルネサンス」伊丹陽子(成城大学大学院) / 『美術画報』(NO.31 2001年5月20日)
- ・美の現在「イタリア・ルネサンス展」高階秀爾(美術史家・美術評論家) / 『朝日新聞』夕刊(2001年6月5日 13面)
- ・“GERALDINE SCHWARZ” / *la Repubblica* (2001年6月26日)

「日本におけるイタリア2001年」のオープニングを飾る本展は、イタリア政府の全面的協力のもと、イタリア全土60を越える美術館から優れた作品を集めたかつてない規模と内容の「ルネサンス文化」の展覧会となった。本展のテーマは「宮廷と都市の文化」。15世紀から16世紀にかけてのイタリアで花開いた多彩な芸術的革新は、フィレンツェを筆頭にヴェネツィアやミラノなどの諸都市で競い合うようにして展開され、芸術家や工芸職人はそれぞれの都市で宮廷や大規模建築を飾る作品を求めた権力者たちに擁護され、創作に腕をふるった。こうした都市の集合体としてのルネサンス文化を、歴史を縦軸に、都市を横軸に紹介した展覧会である。

「国立西洋美術館所蔵フランス素描名作展」

期間：平成13年3月27日(火)～6月24日(日)(73日間)

(3月27日からの総開催日数78日間)

会場：国立西洋美術館(新館第3展示室、常設展と併設)

出品点数：37点

国立西洋美術館所蔵の素描は、絵画や彫刻と同様に松方コレクションが基盤となっている。その中からドラクロワやセザンヌ、ピュヴィ・ド・シャヴァンヌ、ロダン、シニャック等の作品と、梅原龍三郎氏寄贈のドガ「背中を拭く女」や、77年度購入のロココ時代の女流画家ブリアール「自画像」、84年度購入作品のゴーガン「ラ・マルティニック島の情景」、95年度購入作品のモロー「聖なる象」、そして、20世紀の作家からはマティスやピカソなどの作品を展示した展覧会である。

「日米二国間交流展 アメリカが創った英雄たち - 肖像が語るアメリカ史 / アメリカン・ヒロイズム」

期間：平成13年8月7日(火)～10月14日(日)(60日間)

会場：国立西洋美術館(企画展示館)

出品点数：118点

(肖像が語るアメリカ史展 75点 / アメリカン・ヒロイズム展 43点)

入場者数：44,020人（1日平均734人）（目標入場者数：40,000人）

共催者：文化庁、読売新聞社、西洋美術振興財団

協賛・協力：財団法人東芝国際交流財団、日本航空、日米文化教育交流会議

C U L C O N

<新聞雑誌関係記事>

- ・ART「”英雄“を描いた絵画を通しアメリカの歴史と精神に迫る」/『第三文明』(2001年8月号)
- ・「あなたのヒーローは?!」/『ART GRAPH』(2001年9月号)
- ・ART「アメリカ史を彩る多彩なヒーローたち」/『Men'Ex』(2001年9月号)
- ・展覧会 HIGHT LIGHT「アメリカが創った英雄たち - 肖像が語るアメリカ史展 / アメリカン・ヒロイズム展」/『藝術公論』(2001年9月号)
- ・””A Brush with History”- paintings from the National Portrait Gallery “American Heroism”” / TIC Monthly (2001年9月1日)
- ・「編集手帳」/『読売新聞』(2001年9月16日 1面)
- ・MUSEUM ゆったり見たい、この展覧会「アメリカが創った英雄たち - 肖像が語るアメリカ史 / アメリカン・ヒロイズム」/『ベネベネ』(2001年10月号)

この展覧会は、1995年に行われた日米首脳会談での合意に基づき、両国間の文化交流のさらなる促進を目指して、ふたつの展覧会の同時開催というかたちで行われた。「肖像が語るアメリカ史」は、ワシントンにあるナショナル・ポートレート・ギャラリーの所蔵作品からなるもので、単に「有名な famous」アメリカ人の肖像から構成されているのではなく、「注目に値する notable」人々に焦点を当てて組織された。「アメリカン・ヒロイズム」は、全米各地の美術館、歴史博物館から作品を借用し、より概念的な英雄崇拜、英雄主義の問題を美術によって探求するものであった。アメリカ独立革命、西部の開拓、自由を求める逃亡奴隷など、アメリカの歴史が視覚的表象のなかで表現されていった系譜をたどり、また、英雄性をより広い概念として捉え、人知を越えた崇高なものとして描かれた風景、技術革新の成果としての摩天楼、20世紀消費社会における欲望の対象としての大衆的英雄（スポーツ選手や歌手）などをも扱った。

「子供から楽しめる美術展～水の誘い」

期間：平成13年9月14日（火）～11月4日（日）（55日間）

会場：国立西洋美術館（新館第3展示室他）

出品点数：33点

協力：大日本印刷

美術作品をより身近に、楽しく鑑賞するための「水」をテーマとした展覧会。水には、透明、混濁、反射、形や動き（波、雨、渦）などの様々な表情があり、作家はそうした多彩な表情に刺激され、それらを様々な形で表現してきた。この展覧会では油彩画、版画、ガラス器、衣服などに表された水の表現のヴァリエーションを紹介し、更に、展示に関連

した創作・体験プログラム、講演会、コンサートを行った。

「デジタル技術とミュージアム」

期間：平成13年11月3日(火)～12月2日(日)(18日間)

会場：国立西洋美術館(企画展示室ロビー、常設展と併設)

特別協力：凸版印刷

<新聞雑誌関係記事>

・「ミュージアムの近未来像」/『デジタルアーカイブ』(2002 No.19)

本来、ミュージアムは作品や標本などのオリジナルを収集・整理し、研究・保存し、展示する機関であり、その種類は美術作品を扱う美術館から各種博物館、動物園・水族館まで多様である。さらに地図や設計図、各種のスケッチなど画像資料という点では、図書館や各種の資料館、文書館も同様の資料を所蔵している。しかし近年では「電子図書館」「電子博物館」といった館種を越えた情報利用が盛んに論じられている。そこにはデジタル時代ならではの大きな可能性が含まれている。本企画では、当館における試みを含む国内外の20余のシステムやプロジェクトを集め、主として画像のデジタル化、蓄積、表示技術を中心として、その多様性の一端を各種ディスプレイやパネル、また関連機器、大型印刷物等で紹介した。また、それらが「複製」の歴史のなかでどういう位置を占め、ミュージアムの将来にどのような影響を及ぼしていくのかについてのシンポジウムやセミナーを行った。

「プラド美術館 - スペイン王室コレクションの美と栄光展」

期間：平成14年3月5日(火)～6月16日(日)(24日間)

(6月16日までの総開催日数91日間)

会場：国立西洋美術館(企画展示館)

出品点数：77点

入場者数：120,749人(1日平均5,032人)(目標入場者数：70,000人)

(3月5日から3月31日までの入館者数)

共催者：読売新聞社

協賛・協力：清水建設、トヨタ、KDDI、JR東海、JR西日本、東レ、JR東日本、日本航空、日本通運

<新聞雑誌関係記事>

・「展覧会ダイジェスト「プラド美術館展 - スペイン王室コレクションの美と栄光」/『美術の窓』(2002年2月号)

・「ついにプラドも日本へやってくる！」/『weekly ぴあ』(2002年1月28日)

・ART「プラド美術館展」/『望星』(2002年2月号)

・「プラド美術館展始まる」/『読売新聞夕刊』(2002年3月5日 18面)

・ひとりじめ招待席「スペイン王室が育てた画家たちの華麗なる足跡」/『集英社』(2002年4月号)

- ・ “ THE POWER AND THE GLORY OF THE PRADO ” / THE JAPAN TIMES (2002 年 3 月 13 日 9 面)
- ・ アートプリズム「ゴヤの謎」山口泰二 (美術評論家) / 『赤旗新聞』(2002 年 3 月 17 日 16 面)
- ・ ぷらりミュージアム「異才が放つ光と影の迫力」神谷幸江 (キュレーター) / 『朝日新聞』夕刊 (2002 年 3 月 28 日 6 面)
- ・ 美術「作品の来歴示す目新しい試み」宝木範義 (美術評論家) / 『公明新聞』(2002 年 4 月 9 日 5 面)
- ・ 美術館情報「プラド美術館展 《善き羊飼ひ》」 / 『読売新聞』夕刊 (2002 年 4 月 10 日 8 面)
- ・ 「ヴァン・ダイクともう一つの自画像」桜井武 (ブリティッシュ・カウンシル・アーツ 担当官) / 『読売新聞』夕刊 (2002 年 4 月 15 日 8 面)
- ・ 美術館情報「プラド美術館展 《フェリペ 2 世》」 / 『読売新聞』夕刊 (2002 年 4 月 17 日 12 面)

ハプスブルクとブルボンの二つのスペイン王朝の宮廷は、ヨーロッパ各地の優れた画家たちに活躍の場を与え、さらに作品収集活動に情熱を注いだ。宮廷は多様な美術の潮流が交わる国際的な場であり、その流れを促進する大きな力ともなっていた。5 点のペラスケス、6 点のゴヤをはじめとする 77 点からなる本展は、プラド美術館のコレクションを紹介しつつ、スペイン美術の流れを、王室コレクションとの関わりを通じて辿ってみたものである。

常設展「中世末期から 20 世紀初頭にかけての西洋絵画とフランス近代彫刻」

期間：平成 13 年 4 月 1 日 (日) ~ 14 年 3 月 31 日 (日) (285 日間)

会場：国立西洋美術館 (本館、新館)

出品点数：約 200 点

入場者数：259,917 人 (1 日平均 912 人) (目標入場者数：250,000 人)

フランスの建築家ル・コルビュジェが設計した本館では、18 世紀以前に活躍した芸術家の絵画・彫刻作品が展示され、キリスト教を主題とした多くの宗教画を見ることができる。新館では、19 世紀から 20 世紀の作品が展示されている。また、素描のコレクションには、18 世紀から 19 世紀のフランスの芸術家の作品が中心に所蔵され、版画コレクションには、15 世紀から 20 世紀初頭までの主要な西洋版画家の作品が所蔵されており、これら版画・素描のコレクションは、テーマをもうけて定期的に新館の 1 室で展示されている。さらに、美術館前庭の《地獄の門》、《考える人》、《カレーの市民》などのロダンの彫刻作品や、カルポー、マイヨールの作品が展示されている。

(2) 収蔵品の貸与

保存状況を勘案しつつ、国内外施設機関への積極的な貸出に努めた。

貸出点数：22 点 (絵画 8 点、彫刻 5 点、版画 8 点、書籍 1 点)

貸出先：東京国立近代美術館、名古屋市美術館、静岡県立美術館、愛知県美術館、奈良県立美術館、府中市美術館、岐阜県美術館、兵庫県立近代美術館、メトロポリタン美術館（アメリカ）、グラン・パレ（フランス）、ゴッホ美術館（オランダ）

（３）アンケート調査の実施

つぎのとおり、「イタリア・ルネサンス宮廷と都市文化」、「アメリカが創った英雄たち - 肖像が語るアメリカ史 / アメリカン・ヒロイズム」、「子供から楽しめる美術展～水の誘い」、「デジタル技術とミュージアム」、「プラド美術館 - スペイン王室コレクションの美と栄光」の展覧会・講演会・ギャラリートークにおいて、アンケート調査を実施した。

[展覧会]

「イタリア・ルネサンス宮廷と都市文化」

実施期間：平成13年5月12日（土）及び、平成13年6月1日（金）（計2日）

アンケート項目：別紙のとおり

結果：展覧会について9割を超える肯定的意見があった。（詳細は別紙のとおり）

「アメリカが創った英雄たち - 肖像が語るアメリカ史 / アメリカン・ヒロイズム」

実施期間：平成13年9月14日（金）・15日（土）・16日（日）及び、平成13年10月5日（金）・6日（土）・7日（日）・8日（月）（計7日）

アンケート項目：別紙のとおり

結果：展覧会について9割を超える肯定的意見があった。（詳細は別紙のとおり）

「子供から楽しめる美術展～水の誘い」

実施期間：平成13年9月29日（土）・30日（日）及び、平成13年10月27日（土）・28日（日）（計4日）

アンケート項目：別紙のとおり

結果：展覧会について9割を超える肯定的意見があった。（詳細は別紙のとおり）

「デジタル技術とミュージアム」

実施期間：平成13年11月22日（木）、平成13年11月25日（日）及び、平成13年11月28日（水）（計3日）

アンケート項目：別紙のとおり

結果：展覧会について9割を超える肯定的意見があった。（詳細は別紙のとおり）

「プラド美術館 - スペイン王室コレクションの美と栄光」

平成13年度末現在において開催中の展覧会であり、引き続き平成14年度も調査を実施する。

[講演会]

「アメリカが創った英雄たち - 肖像が語るアメリカ史 / アメリカン・ヒロイズム」

実施期間：平成13年8月25日（土）（1日）

テーマ：「統一の象徴としての英雄：南北戦争と歴史画」

講師：田中 正之（国立西洋美術館主任研究官）

アンケート項目：別紙のとおり

結果：講演会について9割を超える肯定的意見があった。（詳細は別紙のとおり）

「アメリカが創った英雄たち - 肖像が語るアメリカ史 / アメリカン・ヒロイズム」

実施期間：平成13年9月8日（土）（1日）

テーマ：「アメリカ史を動かした人たち」
講師：本間 長世（成城学園学園長）
アンケート項目：別紙のとおり
結果：講演会について9割を超える肯定的意見があった。（詳細は別紙のとおり）

「子供から楽しめる美術展～水の誘い」
実施期間：平成13年9月15日（土）（1日）
テーマ：「水の神話 - 東と西」
講師：吉田 敦彦（学習院大学教授）
アンケート項目：別紙のとおり
結果：講演会について8割を超える肯定的意見があった。（詳細は別紙のとおり）

「子供から楽しめる美術展～水の誘い」
実施期間：平成13年10月6日（土）（1日）
テーマ：「水の百面相」
講師：千足 伸行（成城大学教授）
アンケート項目：別紙のとおり
結果：講演会について9割を超える肯定的意見があった。（詳細は別紙のとおり）

[ギャラリートーク]

「アメリカが創った英雄たち - 肖像が語るアメリカ史 / アメリカン・ヒロイズム」
実施期間：平成13年8月24日（金）、9月7日（金）、10月5日（金）（計3日）
アンケート項目：別紙のとおり
結果：ギャラリートークについて参加者の大多数が肯定的意見であった。（詳細は別紙のとおり）

3. 調査研究

（年度計画）

- （1）中期計画に基づき、調査研究を計画的に実施する。
- （2）客員研究員を招聘し、調査研究活動を推進する。
- （3）各館の調査研究の成果については、研究紀要、図録への論文発表等によって公表する。

（1）調査研究の実施

旧松方コレクションを含む松方コレクション全体に関する調査研究を実施。

ア．旧松方コレクション、タペストリーの調査研究

（研究員氏名：河口 公夫、塚田 全彦、高梨光正）

イ．旧松方コレクション、ピストルフィ彫刻群調査研究

（研究員氏名：高橋 明也、河口 公夫、塚田 全彦、大屋 美那）

ウ．研究員氏名：幸福 輝

講演：「西洋美術館 - 松方コレクションをこえて」

（群馬県立近代美術館、2001年9月）

エ．研究員氏名：高橋 明也

- 研究発表：「レオナルド・ビストルフィ（1859-1933） - 再発見された旧松方コレクションの彫刻作品群について」
（美術史学会東支部 13 年度例会、国立西洋美術館、2002 年 3 月 30 日）
- 講演：「美術館へ行ってみよう」
（女子美術大学、2001 年 12 月 20 日）
- 執筆書誌：「再発見された旧松方コレクションのレオナルド・ビストルフィ作彫刻群について - 第一回調査報告」
（『国立西洋美術館研究紀要』no.5、2001 年）

オ．研究員氏名：大屋 美那

調査・企画：「『ロダンと日本展』(静岡県立美術館)展示作品の作家名、鑄造名、材質等に関する調査」

翻訳：クリスティナ・ビュレイ＝ウリブ「松方とロダン美術館：あるコレクションをめぐる災厄」
（『ロダンと日本』展図録、静岡県立美術館、愛知県美術館、2001 年）

中世末期から 20 世紀初頭の西洋美術に関する調査研究を実施。

ア．研究員氏名：幸福 輝

調査・企画：「レンブラント：神話、聖書、物語」(2003 年開催予定)

執筆書誌：「レンブラント、フェルメールとその時代」(展覧会報告)
（『国立西洋美術館年報』no.35、2002 年）
「展覧会と常設展」
（『ゼフュロス』第 10 号、国立西洋美術館、2001 年 10 月）
「美術史的主張と非美術史的展覧会」
（『西洋美術研究』no.6、2001 年 10 月）

イ．研究員氏名：高橋 明也

調査・企画：「ルーブル美術館展」(仮称)

広報・普及：「美術館この 1 点 - ドラクロワ《聖母の教育》」
（NHK 第一放送『ラジオ深夜便』出演、2001 年 4 月 16 日放送）

執筆書誌：『ゴッガン - 野生の幻影を追い求めた芸術家の魂』
（六耀社、2001 年）
「エドゥアール・マネの受用と創造」
（『マネ』展カタログ、府中市美術館 / 奈良県立美術館、「マネ展」実行委員会発行、2001 年）
「アントワーヌ・コワズヴォ作《ド・ヴィルヌーヴ・ダッシー夫人の肖像》」

(新収作品解説、『国立西洋美術館年報』no.35、2001年)
「ジャン＝オノレ・フラゴナール作《丘を下る羊の群れ》」
(新収作品解説、『国立西洋美術館年報』no.35、2001年)
「《花と果物、ワイン容れのある静物》アンリ・ファンタン＝ラトゥール、美と出会う、国立西洋美術館5」
(『東京新聞』、2002年1月13日号、日曜版)

ウ．研究員氏名：田辺 幹之助

調査・企画：「中世の工芸展」(仮称、2004年開催予定)

エ．研究員氏名：佐藤 直樹

執筆書誌：“Die Verwandlung von Dürers Rhinoceros und sein emblematischer Charakter”

(Aus Albrecht Dürers Welt, Festschrift für Prof. Dr. Fedja Anzelewski, Brepols, 2001)

「21世紀の美術館・展覧会へ向けて「記憶された身体 - アビ・ヴァール・ブルクのイメージの宝庫」展について」

(『変貌する美術館 - 現代美術館学 - 』、昭和堂、2001年)

「日本美術の皮膚論のために - わび が現れる場所」

(『皮膚の想像力 / The Faces of Skin』、国立西洋美術館、2001年)

『皮膚の想像力 / The Faces of Skin』

(佐藤直樹、Ch. ガイスマール＝ブランディ、I. 日地谷＝キシユネライト編集、国立西洋美術館、2001年)

「皇帝と美術 - カロリング朝と神聖ローマ帝国におけるローマ美術の復興」

(『ドイツ語圏研究』第19号、上智大学ドイツ語圏文化研究所、2001年)

「レンブラント - 帽子と外套をまとった自画像、美と出会う、国立西洋美術館3」

(『東京新聞』、2001年12月9日)

オ．研究員氏名：田中 正之

翻訳：ロバート・S・ネルソン、リチャード・シフ編

『美術史を語る言葉：22の理論と実践』

(共訳、ブリュッケ / 星雲社、2002年1月)

執筆書誌：“The Uncanny and Man Ray’s Manipulation of Female Eye”

(論文、Aesthetics, no.10, March 2002)

「イヴ＝アラン・ボア」「T・J・クラーク」

(エッセイ、『美術手帖』2001年6月号、エッセイ、美術手帖編集

部 + 谷川渥監修 『20世紀の美術と思想』、美術出版社、2002年3月に再録)

カ．研究員氏名：高梨 光正

調査・企画：「ヴァチカン美術館展」(仮称、2004年春開催予定)

キ．研究員氏名：渡邊 晋輔

調査・企画：「大英博物館所蔵版画素描展」(2005年開催予定)

ク．研究員氏名：大屋 美那

調査・企画：「ウインスロップ・コレクション展」(2002年9月開催予定)

西洋美術作品の保存修復に関する調査研究を実施。

ア．研究員氏名：河口 公夫

在外研修：「欧米の各美術館等研究機関の研修制度と教育科目およびその独自性と成果の調査」

(2001年9月1日～11月30日)

「最新の修復保存技術および理論研究の調査」

(2001年9月1日～11月30日)

イ．研究員氏名：塚田 全彦

執筆書誌：「国立西洋美術館における室内空気汚染調査・対策の事例」

(『国立西洋美術館研究紀要』no.6、2002年3月)

美術館情報資料に関する調査研究を実施。

ア．研究員氏名：波多野 宏之

企画・構成：「研究資料センターの開設、公開運用」

(2002年3月15日)

執筆書誌：「アート・ライブラリアン」

(論文、『変貌する美術館 - 現代美術館学 -』昭和堂、2001年7月)

「映像技術の発展とミュージアム」

(論文、『映像情報インダストリアル』第34巻第2号、2002年2月)

「デジタルアーカイブの光と影 - 画像の複製・保存・活用を中心に -」

(論文、『平成13年度(第87回)全国図書館大会記録・岐阜 2001年・岐阜・図書館の旅 - IT時代の図書館像を考える -』全国図書館大会実行委員会、2002年3月)

- 「公開プログラム『デジタル技術とミュージアム』を開催して」
(エッセイ、『博物館研究』Vol.37, No.2、2002年2月)
- 講 演：「デジタルアーカイブの光と影 - 画像の複製・保存・活用を中心に
-」
(平成13年度(第87回)全国図書館大会・岐阜 第11分科会 資料保存 基調講演、2001年10月25日)
「美術館ドキュメンテーションと人的資源」
(日本大学大学院特別講義、2002年1月23日)
「アート・ドキュメンテーション」
(2001年度中堅職員ステップアップ研修、日本図書館協会、2002年3月18日)

美術館教育に関する調査研究を実施。

ア．研究員氏名：寺島 洋子

- 企画・構成：「子供から楽しめる美術展～水の誘い」展
(国立西洋美術館、会期：2001年9月14日～11月4日)
「子供から楽しめる美術展」(2002年開催予定)
- 執筆書誌：「学校とミュージアムの連携による教育プログラム」
(エッセイ、『博物館研究』Vol.36, No.5、2001年5月)
『プラド美術館展 ジュニア・パスポート』
(国立西洋美術館、2002年3月)
- 研究発表：「国立西洋美術館の教育活動」
(Association for Professional Librarians 定例会、2001年12月15日)
「海外の博物館事情：アメリカの美術館教育」
(平成13年度ミュージアム・マネジメント研修、国立科学博物館、2002年2月21日)

展覧会に関する調査研究を実施。

ア．研究員氏名：高梨 光正

- 企画・構成：「イタリア・ルネサンス 宮廷と都市の文化」展
(国立西洋美術館、会期：2001年3月8日～7月8日)
- 講 演：「イタリア・ルネサンス 宮廷と都市の文化」展関連講演
「ルネサンスの“ル”」
(国立西洋美術館、2001年4月14日)
「イタリア・ルネサンス 宮廷と都市の文化」展関連講演
(国立西洋美術館、2001年4月13日、経団連に対し講演)
「イタリア・ルネサンス 宮廷と都市の文化」展関連講演
(国際文化会館、2001年4月27日、イタリア研究会例会、)
「イタリア・ルネサンス 宮廷と都市の文化」展関連講演

(国立西洋美術館、2001年5月19日、霞ヶ関婦人会に対し講演)
「イタリア・ルネサンス 宮廷と都市の文化」展関連講演
(国立西洋美術館、2001年5月25日、スライドトーク)

執筆書誌：Il Rinascimento in Italia: La civiltà delle corti
(「イタリア・ルネサンス 宮廷と都市の文化」展、イタリア語版
図録、共著、共訳、責任編集：マリア・スフラメーリ、高梨光正、
日本経済新聞社 2001年)
”Una `historia causalitatis` : Struttura della pittura narrativa del XV secolo”
(Il Rinascimento in Italia)
Rinascimento: Capolavori dei musei italiani. Tokyo-Roma 2001, Roma,
Scuderia Papali al Quirinale(15 settembre 2001-6 gennaio 2002)、カタログ
編集協力
”Una `historia causalitatis` : Struttura della pittura narrativa del XV secolo”
(Rinascimento: Capolavori dei musei italiani. Tokyo-Roma 2001)

イ．研究員氏名：田中 正之
企画・構成：「肖像が語るアメリカ史」展
「アメリカン・ヒロイズム」展
(国立西洋美術館、会期：2001年8月7日～10月14日)
講演：「統一の象徴としての英雄：南北戦争と歴史画」
(国立西洋美術館、2001年8月25日)
執筆書誌：『アメリカン・ヒロイズム』展図録
(国立西洋美術館、2001年8月)

ウ．研究員氏名：田中 正之、佐藤 直樹
翻訳・監修：『肖像が語るアメリカ史』展図録
(国立西洋美術館、2001年8月)

エ．研究員氏名：田辺 幹之助
企画・構成：「プラド美術館 - スペイン王室コレクションの美と栄光」展
(国立西洋美術館、会期：2002年3月5日～6月16日)
執筆書誌：『プラド美術館 - スペイン王室コレクションの美と栄光』展図録
(国立西洋美術館、2002年3月)
「カール5世の遺産」
(論文、『プラド美術館展』図録、2002年3月)

オ．研究員氏名：渡邊 晋輔
執筆書誌：『プラド美術館』展図録作品解説
(国立西洋美術館、2002年3月)

「レアンドロ・バッサーノ、『最後の審判』」
(作品解説、『中日新聞』、2001年11月11日日曜版)
「ヤコポ・ティントレット、『胸をはだける女性』」
(作品解説、『ヨミウリ・ウィークリー』、2002年3月3日号)
「ティツィアーノ、『宗教を救済するスペイン』」
(作品解説、『ヨミウリ・ウィークリー』、2002年3月10日号)

カ．研究員氏名：波多野 宏之

企画・構成：「デジタル技術とミュージアム - 情報・機器展示、セミナーによる公開プログラム」

(国立西洋美術館、会期：2001年11月13日～12月2日)

講演：「イコノテークの未来像 - デジタル技術でミュージアムはどこまで変わるか - 」

(国立西洋美術館、2001年11月15日)

「国立西洋美術館における画像利用 - マイクロ資料と超高精細画像 - 」

(国立西洋美術館、2001年11月21日)

執筆書誌：『デジタル技術とミュージアム - 情報・機器展示、セミナーによる公開プログラム - 展示解説』

(国立西洋美術館、2001年11月)

(2) 客員研究員の招聘等

客員研究員11名との調査研究・研究交流を実施。

ア．美術館教育に関する調査研究

研究員氏名：佐藤 厚子

イ．超高精細画像データベースシステムの構築と活用に関する調査研究

研究員氏名：山田 奨治(国際日本文化研究センター助教授)

ウ．マイクロフィッシュ等写真資料の保存と利用に関する調査研究及び助言

研究員氏名：吉田 成(東京大学専門職員)

エ．西洋美術関係図書資料の修復及び保存に関する調査研究

研究員氏名：渡部 和子

オ．大英博物館所蔵フランス素描展企画協力

研究員氏名：越川 倫明(東京大学大学院助教授)

カ．フォッグ美術館ウインスロップコレクション展企画協力

研究員氏名：喜多崎 親(一橋大学大学院助教授)

キ．情報・広報事業における英語表記の助言、指導

研究員氏名：マーサ・マクリントク

ク．「子供から楽しめる美術展～水の誘い」企画協力

研究員氏名： 瀧井 敬子（東京芸術大学助手）

ケ．所蔵作品の材料分析に関する調査研究

研究員氏名： 真貝 哲夫（東京農工大学助手）

コ．ドーミエ作品（旧東武美術館コレクション）及び資料の調査研究

研究員氏名： 高橋 美彌子（尾道美術館副館長）

サ．美術館における防災 - 美術館への免震システム研究

研究員氏名： 篠 泉（足利工業大学助教授）

外国人研究員5名を招聘し、積極的な研究交流を推進。

ア．スミソニアン・ナショナル・ポートレート・ギャラリー
館長 マーク・パクター

イ．スミソニアン・ナショナル・ポートレート・ギャラリー
副館長 エレン・マイルズ

ウ．フランス文化省フランス美術館修復研究センター
情報部長 クリスチアン・ラアニエ

エ．イタリア学術研究会議電磁波研究所
主任研究員 アンドレア・カジーニ

オ．イタリア学術研究会議電磁波研究所
研究員 マルチェッロ・ピッコロ

国内外の美術館等研究機関との連携

ア．オランダ・フランドル絵画国際キュレーター会議（メモリンク美術館）
学芸課長 幸福 輝

イ．ネーデルランド美術史家会議（アントウェルペン王立美術館）
学芸課長 幸福 輝

ウ．保存修復に関する講演会及びワークショップ（東北芸術工科大学）
研究員 塚田 全彦

4．教育普及

（年度計画）

- （1）国内外の美術館等との交換図書等による資料の積極的収集を図ると共に情報コーナーの設置等ファレンス機能の充実を図る。
- （2）館が収蔵している作品のデータ・画像入力を行い、広く公衆のニーズに応えるため、データベース化を推進する。
- （3）国内外の美術館等との連携を強化し、情報コーナー、アトライブラリー、資料閲覧室等、情報資料関係の施設の整備・充実を図る。
- （4）児童生徒を対象とした教育普及事業を実施する。
- （5）講演会等を実施する。
- （6）美術館関係者を対象とした、研修事業を実施する。

- (7) 他の機関が実施する研修への協力を実施する。
- (8) 各館それぞれに研究成果を踏まえて出版事業等を行う。
- (9) それぞれの館のホームページを積極的に活用して広く公衆への普及及び広報を行う。また、4館共同の広報体制を整備するため法人のホームページを作成し、中期目標、中期計画、年度計画等を公表する。
- (10) ボランティア等の在り方や企業との連携等について検討を行う。
- (11) 新たな美術館施設の円滑な運営について

(1) 資料収集及びレファレンス機能の充実

国内外の美術館等との交換図書等による資料の積極的収集を図った。また、美術情報エリア及び、研究資料センターにおいてレファレンス機能の充実を図る。

交換件数 468 件 (国内 219 件、海外 249 件)

(2) 作品データ等のデータベース化の推進

館が収蔵している作品のデータ・画像入力を行い、データベース化を推進している。平成13年6月12日より、デジタルギャラリーで204点の公開が可能になった。(追加22点)

(3) 資料閲覧室等の整備

美術研究者を対象とした研究資料センターを14年3月15日より開設した。
(西洋美術史研究図書等約24,000冊、雑誌約1,400タイトル、マイクロフィッシュ約37,000枚を所蔵)

(4) 児童生徒に対する教育普及事業の実施

「子供から楽しめる美術展～水の誘い」展
(会期：平成13年9月14日～11月4日)

ア．創作・体験プログラムを4回実施

第1回 9月9日(日) 午前10時～午後3時

講師：八柳 尚樹(彫刻家)

テーマ：「体で感じる水の重さとかたち」

たくさんの水の重さやかたちを体全体で感じて遊び、その後、展覧会場で絵画や工芸品に表された様々な水の表現を観賞した。

参加人数：13名

第2回 9月16日(日) 午前10時～午後3時

講師：城戸 孝充(美術家)

テーマ：「水と遊ぶ」

いつもは、なにげなく飲んでいる水を、体に取り込まれることを意識しながら飲んだり、水を含んだ素材に触れて、奇妙な水の感触を体験。また、油や磁石を使って水のうず巻きとともに現れる不思議な現象を観察し、その後、展覧会場で絵画や工芸品に表された様々な水の表現を観賞した。

参加人数：19名

第3回 9月22日(土) 午前10時～午後4時 (館外活動日)

9月23日(日) 午後1時～午後3時30分(館内活動日)

館外活動(国立西洋美術館 後楽園 多摩霊園御霊堂)

講師：関根 伸夫(御霊堂モニュメント制作者)

テーマ：「街の中の水の造形(多摩編)」

初日は街に出て変わった形の水や不思議な雰囲気のある場所を見に行き、心に響いた水の表情を自分の好きな表現方法(スケッチや写真など)で記録。そして、2日目は美術館で展覧会を見たあと、前日に記録したスケッチや写真などをパネルにして展示会場に展示した。

参加人数：10名

第4回 9月29日(土) 午前10時～午後4時 (館外活動日)

9月30日(日) 午後1時～午後3時30分(館内活動日)

館外活動(国立西洋美術館 後楽園 葛西臨海水族園)

テーマ：「街の中の水の造形(葛西編)」

参加人数：9名

人数計 51名

イ. コンサート(1回実施)

日時：10月20日(土) 午後2時～午後4時

企画：瀧井 敬子(東京芸術大学演奏芸術センター)

朗読：原 千佐子(女優)

体験演奏指導：長唄三味線 大塚 睦子(東音) 邦楽囃子 望月 太喜雄

演奏：東京芸術大学音楽学部学生有志

テーマ：「水の調べ」

音や曲の調べによって水はいろいろな表現される。西洋の楽器だけでなく、和楽器を使った水にちなんだ曲目も演奏し、洋楽器と和楽器による共演や、その場で楽器に触ったり、水の音色のデモンストレーションを行った。

参加人数：150名

先生(小・中学校教員)のための鑑賞プログラム(2回実施)

小・中・高等学校の先生方を対象とした特別展の観賞プログラム。展覧会の趣旨や作品について説明した後、自由に展覧会を鑑賞。

第1回 6月22日(金) 午後6時～午後8時

講師：学芸課研究員 高梨 光正

テーマ：「イタリア・ルネサンス展」

参加人数：145名

第2回 8月31日(金) 午後5時～午後8時

講師：学芸課主任研究官 田中 正之

テーマ：「アメリカが創った英雄たち

- 肖像が語るアメリカ史 / アメリカン・ヒロイズム展」

参加人数：3名

人数計 148名

(5) 講演会等の実施

企画展における講演会(17回実施)

企画展覧会の展示作品を中心に、その展覧会を理解する上で欠かすことのできない重要な歴史・文化・知識についての講演会を開催。

ア.「イタリア・ルネサンス宮廷と都市文化」展

(会期：平成13年3月20日～7月8日)

4月14日(土) 午後2時～午後3時30分

講師：学芸課研究員 高梨 光正

テーマ：「15世紀フィレンツェ絵画」

参加人数：177名

5月19日(土) 午後2時～午後3時30分

講師：茨城大学助教授 甲斐 教行

テーマ：「マニエリスムとマニエーラ - 16世紀フィレンツェ・ローマ絵画を中心に」

参加人数：110名

6月9日(土) 午後2時～午後3時30分

講師：東京大学助教授 越川 倫明

テーマ：「ヴェネツィア絵画のルネサンス」

参加人数：110名

6月12日(火) 午前10時30分～午前11時30分

講師：静岡文化芸術大学教授、ファッション評論家 深井 晃子

テーマ：「ファッションから見るイタリア・ルネサンス」

参加人数：98名

イ.「アメリカが創った英雄たち - 肖像が語るアメリカ史 / アメリカン・ヒロイズム」展

(会期：平成13年8月7日～10月14日)

8月7日(火) 午後2時～午後3時30分

講師：スミソニアン・ナショナル・ポートレート・ギャラリー

福館長エレン・マイルズ

テーマ：「肖像が語るアメリカ史」

参加人数：80名

8月25日(土) 午後2時～午後3時30分

講師：学芸課主任研究官 田中 正之

テーマ：「統一の象徴としての英雄：南北戦争と歴史画」

参加人数：57名

9月8日(土) 午後2時～午後3時30分

講師：成城学園長 本間 長世

テーマ：「アメリカ史を動かした人たち」

参加人数：74名

ウ.「子供から楽しめる美術展～水の誘い」展

(会期：平成13年9月14日～11月4日)

9月15日(土) 午後2時～午後3時30分

講師：学習院大学教授 吉田 敦彦

テーマ：「水の神話 - 東と西」

参加人数：32名

10月6日(土) 午後2時～午後3時30分

講師：成城大学教授 千足 伸行

テーマ：「水の百面相」

参加人数：36名

エ.「デジタル技術とミュージアム」展

(会期：平成13年11月13日～12月2日)

11月13日(火) 午後1時30分～午後5時

セミナー

講師：慶応義塾大学HUMIプロジェクト研究員 櫻村 雅章

テーマ：「42行聖書のデジタル撮影」

講 師：印刷博物館学芸員 中西 保仁

テーマ：「印刷とデジタル文化 - 印刷博物館でのデジタル化への取り組み - 」
印刷博物館の見学

参加人数：56人

11月15日(木) 午前10時～午後4時40分

シンポジウム

テーマ：「イコノテークの未来像 - デジタル技術でミュージアムはどこまで変わるか - 」

講演者：国立西洋美術館主任研究官 波多野 宏之

フランス文化省フランス美術館修復研究センター

情報部長 クリスチアン・ラアニエ

慶応義塾大学文学部教授 高宮 利行

大阪大学大学院工学研究科教授

サイバーメディアセンター長 西尾 章治郎

広島市現代美術館学芸課長 小松崎 拓男

国際日本文化研究センター助教授 山田 奨治

参加人数：129人

11月21日(水) 午後1時30分～午後4時20分

セミナー

講 師：東京大学史料編纂所文部科学技官 吉田 成

テーマ：「写真の保存と復元 - デジタル技術の応用 - 」

講 師：凸版印刷メディア表現センター部長 加茂 竜一

テーマ：「デジタルアーカイブとメディア表現」

講 師：国際日本文化研究センター助教授 山田 奨治

テーマ：「国際日本文化研究センターにおけるデジタル画像の利用」

講 師：国立西洋美術館主任研究官 波多野 宏之

テーマ：「国立西洋美術館における画像利用 - マイカ資料と超高精細画像 - 」

参加人数：108人

11月28日(水) 午後1時30分～午後4時20分

セミナー

講 師：長野大学産業社会学部助教授 下野 隆生

テーマ：「コンピューター画家アロン」

講 師：凸版印刷法務本部部長 萩原 恒昭

テーマ：「デジタル技術と知的財産権」

講 師：国立西洋美術館共同研究員 / 東京都立中央図書館司書 吉田 昭子

テーマ：「日加仮想展覧会の試み」

講 師：山口県豊北町歴史民俗資料館学芸員 吉留 徹

テーマ：「イコノテク・プロジェクト 地方からのデジタル情報発信 - 3D映像を使った民俗資料データベースの構築とその応用 - 」

参加人数：71人

オ.「プラド美術館 - スペイン王室コレクションの美と栄光」展

(会期：平成14年3月5日～6月16日)

2月23日(土) 午後2時～午後3時30分(会場：有楽町・よみうりホール)

講師：東京大学名誉教授 高階 秀爾

テーマ：「絵画は何を語るのか」

参加人数：699名

3月5日(火) 午後2時～午後3時30分

講師：プラド美術館絵画部学芸員 マリア・ピラール・シルバ

テーマ：「フェリペ4世とベラスケス」

参加人数：94名

3月29日(金) 午後2時～午後3時30分

講師：マドリード大学教授 フェルナンド・チェカ・クレマデス

テーマ：「フェリペ2世から4世に至る王室コレクションの形成」

参加人数：106名

3月30日(土) 午後2時～午後3時30分(会場：有楽町・よみうりホール)

講師：東京大学名誉教授 高階 秀爾

テーマ：「絵画は何を語るのか」

参加人数：823名

人数計2,860名

スライド・トーク(6回実施)

展覧会の見所、主な作品について、講堂でスライド・トークを開催。

ア.「イタリア・ルネサンス宮廷と都市文化」展

(会期：平成13年3月20日～7月8日)

4月6日(金) 午後6時から(約40分)

参加人数：117名

4月20日(金) 午後6時から(約40分)

参加人数：153名

5月25日(金) 午後6時から(約40分)

参加人数：134名

6月29日(金) 午後6時から(約40分)

参加人数：163名

イ.「プラド美術館 - スペイン王室コレクションの美と栄光」展

(会期：平成14年3月5日～6月16日)

3月15日(金) 午後6時から(約40分)

参加人数：111名

3月29日(金) 午後6時から(約40分)

参加人数：90名

人数計 768名

ギャラリー・トーク(11回実施)

展覧会の見所、主な作品について、ギャラリーで解説を行った。

ア.「アメリカが創った英雄たち - 肖像が語るアメリカ史 / アメリカン・ヒロイズム」展

(会期：平成13年8月7日～10月14日)

8月10日(金) 午後6時から(約40分)

参加人数：5名

8月24日(金) 午後6時から(約40分)

参加人数：4名

9月7日(金) 午後6時から(約40分)

参加人数：6名

9月21日(金) 午後6時から(約40分)

参加人数：10名

10月5日(金) 午後6時から(約40分)

参加人数：15名

イ.「子供から楽しめる美術展～水の誘い」展

(会期：平成13年9月14日～11月4日)

*要請があった教育関係の団体に対して、個別に対応・実施した。

9月4日(火) 午後3時から(約120分)

参加人数：15名(小学校教員)

10月13日(土) 午後3時から(約30分)

参加人数：40名(三鷹こどもアートクラブ)

10月18日(木) 午前9時30分から(約150分)

参加人数：48名(豊島区立大成小学校)

10月19日(金) 午前9時30分から(約150分)

参加人数：45名(中央区立月島小学校)

10月23日(火) 午後11時30分から(約60分)

参加人数：55名(都立忍岡高校)

10月26日(金) 午後9時30分から(約150分)

参加人数：54名（中央区立泰明小学校）

人数計 297名

イヤホンガイドの実施（3展覧会で実施）

「イタリア・ルネサンス宮廷と都市文化」展、「アメリカが創った英雄たち - 肖像が語るアメリカ史 / アメリカン・ヒロイズム」展（自主企画展）「プラド美術館 - スペイン王室コレクションの美と栄光」展において、イヤホンガイドを実施した。なお、自主企画展でのイヤホンガイド制作は初の試みである。

（6）他機関の研修事業の実施

美術館関係者を対象とした研修事業の実施

ア．長崎県立佐世保北高等学校の美術教諭1名に対して研修事業を実施。

研修期間：平成13年7月26日～13年8月5日

研修内容：美術作品の保存修復・鑑賞による美術研修及び、文化財保護の研修

イ．平成13年度美術館等運営研究協議会（文化庁・国立西洋美術館主催）を実施。

他の機関が実施する研修・教育への協力

ア．平成13年度博物館職員講習（文部科学省主催）への協力。

イ．指導力向上のための教員研修（長崎県教育委員会）への協力。

ウ．「光ファイバーを用いた反射スペクトルと Imaging Spectroscopy による非破壊調査法」講演会（イタリア学術会議電磁波研究所）への協力。

エ．全国美術館会議教育普及ワーキンググループ（EWG）レクチャー＆ディスカッションへの協力。

オ．美術史学会平成13年度東支部例会への協力。

カ．上野ロータリークラブ例会において6回シリーズの講演を実施。地域のコミュニティーを対象に、国立西洋美術館のコレクションと活動を紹介。

ア．東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻の教育・研究における連携・協力に関して協定を締結した。

イ．西洋美術史及び美術館活動に関して、大学等において非常勤講師等として教育を行った。

（7）「年報」等の発行事業等

『国立西洋美術館年報 no.35 (April 2000-March 2001)』

『国立西洋美術館研究紀要 no.6』

展覧会に伴う図録の発行
企画展等

ア.『アメリカが創った英雄たち - 肖像が語るアメリカ史』展図録

30.6×23cm / 217P

本文：「開催によせて」(マーク・パクター)

「はじめに」

「ナショナル・ポートレート・ギャラリー」(マーガレット・C・S・クリ
ストマン)

「アメリカの肖像画：名声と公的自我 1725年-1865年」(エレン・G・マ
イルズ)

「画家、パトロン、そして移り変わるアメリカの肖像画」(キャロリン・キ
ンダー・カー)

「カタログ」

「五十音順画家名インデックス」

監修：田中正之、佐藤直樹

翻訳：星野睦子、小野寺玲子、平芳裕子、田中久美子、西田紀子

日本語版レイアウト：笠毛和人

発行：財団法人西洋美術振興財団

イ.『アメリカが創った英雄たち - アメリカン・ヒロイズム』展図録

30.6×23cm / 117P

本文：「ごあいさつ」

「英雄、神話、アメリカ美術」(田中正之)

「アメリカの英雄的風景」(田中正之)

「帝国の進路を西にとれ」(田中正之)

「自由を求める闘い」(田中正之)

「近代生活の英雄性」(田中正之)

「作家解説」(田中正之)

「出品作品リスト」

「主要参考文献」

執筆・編集：田中正之

編集協力：斎藤晴子、読売新聞文化事業部

デザイン：笠毛和人

発行：国立西洋美術館

ウ.『デジタル技術とミュージアム - 情報・機器展示、セミナーによる公開プログラム』

展示解説

24×12.5cm / 36P

本文：「聖書のデジタル化とその研究」

「保存修復とデジタル画像」

「データの蓄積と検索・表示」

「デジタル印刷はどこまで可能か」
「画像表現技術の諸相：CG、3D、VR」
「デジタル・アートセンターの現状」
「複製：デジタル技術の光と影」
「VRシアター「システィーナ礼拝堂」」
「DVDシアター」
「インターネットコーナー」

編著：波多野宏之

展示解説：「デジタル技術とミュージアム」実行委員会

発行：国立西洋美術館

この展示解説は、凸版印刷株式会社の協力を得て作成した。

エ．『デジタル技術とミュージアム』シンポジウム報告書

(『SCIENCE OF HUMANITY 人文学と情報処理 Vol.39』)

26.5×18.7cm / 152P

本文：「はじめに」

第 部

イントロダクション

「ミュージアムとイコノテーク」(波多野宏之)
「保存修復に利用される情報技術」(クリスチアン・ラアニエ)
「テキストと画像」(高宮利行)
「デジタル技術の可能性」(西尾章治郎、森澤和明、森田敬子)
「ミュージアムの近未来」(小松崎拓男)
「デジタル技術の光と影」(山田奨治)

パネルディスカッション

「イコノテークの未来像」(クリスチアン・ラアニエ、高宮利行、西尾章治郎、小松崎拓男、山田奨治、波多野宏之)

第 部

「42行聖書のデジタル撮影」(櫻村雅章)
「印刷とデジタル文化」(中西保仁)
「写真の保存と復元」(吉田 成)
「デジタルアーカイブとメディア表現」(加茂竜一)
「国際日本文化研究センターにおけるデジタル画像の利用」(山田奨治)
「国立西洋美術館における画像利用」(波多野宏之)
「コンピュータ画家アロン」(下野隆生)
「デジタル環境における知的財産権」(萩原恒昭)
「日加仮想展覧会の試み」(吉田昭子)
「イコノテク・プロジェクト 地方からのデジタル情報発信」(吉留 徹)

第 部

資料

「関連サイト一覧」

「関連文献一覧」

編著：波多野宏之（国立西洋美術館）

オ．『プラド美術館 - スペイン王室コレクションの美と栄光』展図録

29 × 22.5cm / 284P

本文：「プラド美術館：歴史と展望」（フェルナンド・チェカ・クレマデス）

「スペイン・ハプスブルク王家の絵画コレクション - カール5世からカルロス2世まで」（ピラール・シルバ・マロト）

「カール5世の遺産」（田辺幹之助）

「ベラスケスと宮廷肖像 - 伝統と革新」（大高保二郎）

「17世紀前半のスペイン絵画に見られる静物表現」（雪山行二）

「ゴヤと王室絵画コレクションのなかのベラスケス」（木下亮）

「カタログ」

「 - スペイン・ハプスブルク家の宮廷肖像」

“ El retrato de corte en la Espana de los Austrias ”

「 - スペイン王室のイタリア・フランドル絵画」

“ Colecciones de los Sitios Reales ”

「 - 黄金時代の信仰と絵画」

“ Pintura y devoción en la España del Siglo de Oro ”

「 - 黄金時代の肖像画と静物画」

“ Retrato y naturaleza muerta en la España del Siglo de Oro ”

「 - ブルボン家の宮廷絵画とゴヤ」

“ La época de los Borbones. Goya ”

「 - 19世紀のスペイン絵画」

“ La pintura del siglo XIX en España ”

「作家解説」

「スペイン王家系図」

「スペイン王家の宮殿と関連作品作」

「年表」

“ EL MUSEO DEL PRADO ” (Fernando Checa Cremades)

“ LAS COLECCIONES DE PINTURA DE LOS REYES DE LA CASA DE AUSTRIA: DE CARLOS V A CARLOS II ” (Pilar Silva Maroto)

“ THE LEGACY OF CHARLES V ” (Mikinosuke Tanabe)

“ VELÁZQUEZ AND THE COURT PORTRAIT: TRADITION AND INNOVATION ” (Yasujiro Otaka)

“ STILL LIFE PRESENTATION IN SPANISH PAINTING OF THE FIRST HALF OF THE SEVENTEENTH CENTURY ” (Koji YukiYama)

“ GOYA AND THE PAINTINGS OF VELÁZQUEZ IN THE ROYAL
COLLECTION ” (Akira Kinoshita)

“ SECTION COMMENTARIES ”

“ BIBLIOGRAFÍA ”

「 出品目録 」

編集：木下 亮、田辺幹之助、渡邊晋輔

編集協力：川瀬佑介（東京芸術大学）

論文執筆：フェルナンド・チェカ・クレマデス（マドリード大学／前プラド美術館
長）、ピラール・シルバ・マロト、大高保二郎（早稲田大学）、雪山行二
（愛知県美術館）、木下 亮、田辺幹之助

解説執筆：ホセ・ルイス・ディエス・ガルシア（プラド美術館）、木下 亮、松井
美智子（東北学院大学）、岡田裕成（福井大学）、大高保二郎、ハビエル・
ポルトゥス・ペレス（プラド美術館）、ピラール・シルバ・マロト、田
辺幹之助、渡邊晋輔、雪山行二

スペイン語翻訳：川瀬佑介、木下 亮、松原典子（上智大学）、松田健児（マドリ
ード大学）、松井美智子、岡田裕成

日本語翻訳：山崎由美子

発行：読売新聞社

カ．『死の舞踏』展図録（ドイツ語版）

29×22.5cm / 289P

本文：“ Einleitung ”

“Zur Entstehung des Totentanzes am Beispiel der "Dance macabre" Auf dem
Friedhof des Franziskanerklosters Aux SS. Innocents in Paris” (Hisako Koike)

“Tote-Nichts-Freund Hein Der Totentanz Vom Spätmittelalter bis zur Moderne”
(Mikinosuke Tanabe)

“Der Totentanz im 20. Jahrhundert” (Eva Schuster)

“Gesundheit, Krankheit und Tod in der europäischen Kultur der
Neuzeit-anthropologische und historische Dimensionen” (Alfons Labisch)

“Frauen sind stärker als der Tod” (Gert Kaiser)

“Tod und Krieg” (Eva Schuster)

“Abbildungen”

“Kommentare”

“Kurzbiographien”

“Literaturverzeichnis”

構成・編集：エヴァ・シュースター、田辺幹之助

カタログ解説：エヴァ・シュースター、田辺幹之助、薩摩雅登

エッセイ：ゲルト・カイザー、アルフォンス・ラービッシュ、エヴァ・シュースタ
ー、小池寿子、田辺幹之助

編集：田辺幹之助、佐藤直樹

編集補助：川口雅子、ゲオルク・ホーマン

翻訳：荻田麻子、川口雅子、薩摩雅登、佐藤直樹、田辺幹之助

表紙デザイン：輿語秀樹

発行：国立西洋美術館

キ．『皮膚の想像力 / The Faces of Skin』(国際シンポジウム報告書)

26 × 18cm / 145P

本文：「はじめに」

「カラー図版」

「プロローグ」

「シンポジウムの開催によせて」(イルメラ・日地谷 = キルシュネライト)

「The Faces of Skin / 皮膚の想像力」(クリストフ・ガイスマール = ブランディ)

「芸術の皮膚論の地平 (谷川渥)」

セクション1 身体の境界

「表面の深さ - 身体の境界の文化史」(クラウディア・ベンティーン)

「皮膚と被服 ファッション化する皮膚」(深井晃子)

セクション2 イメージの中の皮膚、皮膚としてのイメージ

「自らと「他者」とを分かつしるし - 日本絵画に表された肌の表現」(池田忍)

「皮膚の色 - その絵画技術およびヨーロッパの近代絵画における生きた肉体の幻想」(アン＝ゾフィー・レーマン)

「分割されざる「個人」幻想への挑戦：岩明均『寄生獣』の皮膚感覚」(稲賀繁美)

セクション3 顔と仮面

「殻と脱ぎ捨てられた衣との間の皮膚」(ウルズラ・パンハンス = ビューラー)

「仮面という装置 - 人はなぜ、もうひとつの界面をつくるのか」(吉田憲治)

セクション4 浸潤 - 美術史のために

「離れてみる十字架 - ブリュエゲルの《十字架を担うキリスト》における感情と風景」(カタリーナ・カハーネ)

「皮膚病変と聖性発現 - グリュネヴァルトのカッセルの磔刑図を見るユイスマンス」(喜多崎親)

「もうひとつの皮膚 - 近代初期ヨーロッパ文化における図像とメディアの歴史人類学的パースペクティヴ」(ゲルハルト・ヴォルフ)

「エピローグ」

「回顧と展望：シンポジウムへのコメント」(加藤哲弘)

「シンポジウムへのコメント」(ロタール・レッダーローゼ)

「日本美術の皮膚論のために - 「わび」が現われる場所」(佐藤直樹)
編集：佐藤直樹、クリストフ・ガイスマール＝ブランディ、イルメラ・日地谷＝キ
ルシュネライト
翻訳：相澤啓一、蔵原順子、桑折千恵子
装幀：輿語秀樹
発行：国立西洋美術館

『国立西洋美術館ニュース』 1回発行
第10号 平成13年10月19日発行
編集：国立西洋美術館
発行者：財団法人西洋美術振興財団

『平成13年国立西洋美術館要覧』

『展示予定表』 1回発行

(8) ホームページの活用

利用者にとって魅力的で、便利かつ見やすい内容とデザインとするため、ホームページデザイン及び、コンテンツの全面的な改訂を行った。

ホームページでは、コレクション、展覧会情報、講演会・スライドトーク等のイベント、交通・利用案内、館内施設案内などを常時掲載し、適時更新を行っている。

海外からのアクセス向けには英語版のホームページを整備し、ホームページの活用と普及及び広報体制の充実を積極的に推進している。

13年度アクセス件数：3,101,357件(トップページアクセス件数447,607件)

(9) ボランティア・企業との連携等の検討

ボランティア

地域の美術館から資料を取り寄せるなど、今後の導入に向けて検討を行っている。

平成13年度「子供から楽しめる美術展～水の誘い」を実施するにあたり、大学生等ボランティア7名の参加を得て、利用者サービスの充実を図った。

企業との連携

ア 展覧会を開催するにあたり、新聞社、企業、メセナ財団より、協力及び支援を得て、企画運営、渉外、利用者サービス等の充実を図った。

「アメリカが創った英雄たち - 肖像が語るアメリカ史 / アメリカン・ヒロイズム」展
読売新聞社：企画、運営、広報について支援協力を得た。

日本航空：作品及びクーリエの航空賃について割引支援を得た。
（財）東芝国際交流財団：作品リストを作成し、入館者へ無料配布した。
（財）西洋美術振興財団：講演会等教育普及に関する助成を得た。

「デジタル技術とミュージアム」

凸版印刷株式会社：企画、運営、広報について支援協力を得た。
展示解説小冊子作成にあたり協力を得た。これにより、制作費用が軽減され、入館者へ安価に展示解説小冊子を提供することができた。

（財）西洋美術振興財団：講演会等教育普及に関する助成を得た。

イ 展覧会への協力・支援に関する特典として、特別鑑賞会を開催した。

「イタリア・ルネサンス宮廷と都市文化」展

日時：平成13年4月16日（月）午後1時30分～午後5時

平成13年5月14日（月）午後1時30分～午後5時

来場者：共催者、特別協賛・協力社（8社）の関係者

（日本経済新聞、EPSON、麒麟ビール、資生堂、大日本印刷、東レ、野村証券、山之内製薬、安田火災海上保険）

来場者数：平成13年4月16日（月） 206名

平成13年5月14日（月） 629名

5. その他の入館者サービス

（年度計画）

- （1）高齢者・身体障害者等に配慮した設備等の充実を図る。建物のバリアフリー化を進め、高齢者・身体障害者等にやさしい美術館を目指す。
- （2）案内情報の充実、車椅子の提供等、入館者サービスの充実を図る。
- （3）展示説明の見直しなど、鑑賞環境の充実に努める。又、音声ガイドの検討及び作品リストの無料配布等を行う。
- （4）小中学生の常設展入場料の無料化や観覧時間拡充の検討を行う。
- （5）フリーゾーンの活用、レストラン及びミュージアムショップの充実など附属施設の充実を図る。

（1）高齢者・身体障害者等に配慮した設備等の充実等

高齢者・身体障害者等が利用しやすい環境整備を図り、本館地下（トイレ・休憩室）階段に勾配をなだらかにし、手すりを増設する改修工事を実施した。今後も、高齢者・身体障害者等に配慮した環境整備に努める。

（2）案内情報の充実、車椅子の提供等、入館者サービスの充実

広報誌等の見直しを実施、広報の充実を図っている。
エントランスロビーに英語対応も可能な案内カウンターを設置し、来館者への案内、質問への対応、情報の提供等を行っている。また、サイン、休憩室の整備、車椅子や杖の無料貸出、

会場内各所への休憩用椅子の配置、美術館情報・広報印刷物等の無料配布を実施し、入館者サービスの充実を図っている。

(3) 鑑賞環境の充実

展示説明・構成・動線等の見直しを常に検討し、鑑賞環境の充実に努めている。また、入館者へのサービスとして音声ガイドの実施(3展覧会においてイヤホンガイド実施)及び、国立西洋美術館ガイド、展覧会案内チラシ、展示予定パンフレット並びに、展示作品リストの無料配布を実施している。

平成13年8月7日から開催の「肖像が語るアメリカ史展」では、自主企画展で初めての試みとして、JR東日本のみどりの窓口、びゅうプラザでも観覧券を販売した。

平成14年3月5日から開催の「プラド美術館展」では、初めての試みとして、小中学生向けに展覧会への理解を深めるための解説パンフレット(ジュニアパスポート)を作成し、無料で配布することとした。

(4) 小中学生の常設展入場料の無料化や観覧時間拡充の検討

小中学生の常設展入場料の無料化を、国立西洋美術館では平成14年3月5日(「プラド美術館展」開催日)から先行して実施することとした。

入館者へのサービス向上を考慮し、展示会場の混雑対策の再検討を行い、混雑時は開館時間の延長や、開館時間を早めて対応できることとした。また、4月29日から5月5日にかかる一連の連休期間中は、休館をしないこととした。

金曜日に夜間開館(20時まで)を実施しており、観覧時間の弾力化については今後も検討を続ける。また、従来より常設展については毎月第2・第4土曜日及び、文化の日に無料観覧日を実施している。

(5) フリーゾーンの活用、レストラン及びミュージアムショップの充実など附属施設の充実

フリーゾーンの活用を推進し、フリーゾーンにレストラン、ミュージアムショップ、デジタルギャラリー、資料コーナーを設置。多くの人が美術館を気軽に利用でき、親しまれる美術館となるよう努めている。

レストランのメニューや店内の雰囲気、ミュージアムショップのグッズ、美術関係書籍等の品揃え、店員の接客態度などについて助言・要請・指導を行い利用者にとって快適な空間となるよう館内環境の充実を図っている。

「イタリア・ルネサンス」展においては、入館者へのサービスを図るため前庭(フリーゾーン)に郵便局の臨時出張所を招請し、「日本におけるイタリア2001年記念郵便切手」等の販売・記念押印サービスを実施した。

6. 職員の研修の実施(その他主務省令で定める業務運営に関する事項)

(年度計画)

職員の意識向上を図るため、次の職員研修を実施する。

1) 新規採用者・転任者職員研修、2) 接遇研修

外部の研修に職員を積極的に派遣し、その資質の向上を図る。

外部の研修に職員を積極的に派遣し、その資質の向上を図っている。

職員2名を英会話研修に派遣し、意識の向上を図っている。

研究員1名がX線作業主任者免許を取得した。

国立国際美術館

概要

(1) 設置年月日

昭和52年5月20日

(2) 施設の規模等

10,902㎡

展示面積 1,309㎡

(地上4階、塔屋1階)

(3) 目的

当館は、昭和52年(1977年)文化庁の施設等機関として設置された四つの国立美術館のうちの一つで、日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするために必要な美術作品、その他の資料を収集し、保管して公衆の観覧に供し、あわせてこれらに関連する調査研究及び事業を行うことを目的としている。

展覧事業については、常設展示と企画展示(特別展、企画展、共催展、近作展)の二本立てで運営している。内容は、現代美術を中心に、日本美術の成立と発展が世界の美術のそれと密接な関係を有することを美術作品の展覧を通じ、系統的具体的に明らかにするものである。また、日本と世界の現代美術の新しい動向をわかりやすく展示している。

資料の収集については、日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするために必要な美術に関する作品、その他の資料のうち、現代美術(主に1945年以降)を重点的に収集している。

調査研究については、現代美術に関する基礎的調査研究、企画展示及び常設展示に関する調査研究のほか、世界の現代美術界の動向等の調査研究も行っている。

このほか、展覧事業の広報・普及、調査研究成果の公表、美術に関する講演会等の開催などの事業も行っている。

(4) 現員

館長	事務系	研究系	合計
1	8	7	16名

(5) 予算額

運営費交付金	566,752千円
自己収入	10,072千円
計	576,824千円

1 収集・保管等

(年度計画)

- (1) 中期計画に基づき、美術作品等を購入する。
- (2) 寄贈・寄託品の積極的な活用を図る。
- (3) 24時間空調等による作品の保存管理及び館内各所の環境モニターを実施する。
- (4) 緊急に修復を必要とする収蔵品のうち、緊急性の高いものから各分野ごとに計画的に修復を行う。
- (5) 国内外の美術館等に対し、修復保存に関する協力と普及の推進を図る。

(1) 美術作品等の購入及び(2) 寄贈・寄託品の積極的な活用

日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするために、主に1945年以降の日本及び欧米の現代美術並びに国際的に注目される国内外の同時代の美術を系統的に収集している。

この基本的な方針に基づき、収蔵品の欠落部分を補い、陳列を体系的に充実させるべく、平成13年10月10日と平成14年1月30日の2回にわたり美術作品等選考委員会及び評価委員会を開催し、洋画の菅井汲《侍》他166点を計238,168,000円で購入した。また、寄贈作品10点についても同様の手続きにより、当館の収蔵品にふさわしい作品として認められた作品について、寄贈受入の手続きを行った。内訳は下表及び別表に示すとおり、洋画19点(購入18点、寄贈1点)、水彩・素描11点(購入11点)、版画74点(購入65点、寄贈9点)、彫刻23点(購入23点)、工芸4点(購入4点)、写真43点(購入43点)、教育資料3点(購入3点)ある。

新収蔵作品の概要

種別	平成13年度収蔵点数			収蔵作品総点数
	購入	寄贈	管理換	
洋画	18	1	0	410
日本画	0	0	0	26
水彩・素描	11	0	0	634
版画	65	9	0	1,856
彫刻	23	0	0	202
工芸	4	0	0	72
写真	43	0	0	363
デザイン	0	0	0	94
教育資料	3	0	0	539
計	167	10	0	4,195

(3) 作品の保存管理

会場内では、作品を安全に展示するために館内数十箇所の温度・湿度、空気汚染、照明、防災対策、保安対策などの調査を継続的に実施し、必要に応じた改善の実施を行っている。

また、収蔵庫の温度・湿度のデータの管理により、作品への影響を最低限とするよう空調設備の運転を行っている。

(4) 収蔵品修復

緊急に修復を必要とする収蔵品のうち、緊急性の高いものから計画的に修復を行った。
今年度は下記の作品の修復を実施。

ジャン＝ピエール・レイノー 《木の葉》(1975年) 21点
剥落した葉の接着、額装

2 公衆への観覧

(年度計画)

- (1) 中期計画に基づき、展覧会や企画上映等を実施する。
(2) 全国の公私立美術館等と連携して地方巡回展を実施する。
(3) 展覧会については、その開催目的、想定する対象層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境、広報活動、過去の入場者数の状況等を踏まえて入場者数について目標を設定し、その達成に努める。
(4) それぞれの館の収蔵品について、その保存状況を勘案しつつ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に実施する。
(5) 入館者に対するアンケート調査を実施し、そのニーズや満足度を分析し、展覧会等に反映させる。

(1) 展覧会の実施

「世界四大文明 エジプト文明展」

期 間：平成13年1月13日(土)～4月8日(日)(74日間)

会 場：国立国際美術館

出品点数 75点

入場者：総数404,825人 (1日平均5,471人)

内13年度(平成13年4月1日(日)～4月8日(日))(8日間)

入場者：総数80,962人 (1日平均10,120人)(目標入場者数：34,000人)

共催者：NHK大阪放送局、NHKきんきメディアプラン

<新聞・雑誌等関係記事>

大阪日日新聞	1月14日	
日本経済新聞	1月18日(夕)	中野 稔
毎日新聞	1月26日(夕)	田原由紀雄
京都新聞	1月27日	太田 垣実
産経新聞	2月4日	H
神戸新聞	2月10日(夕)	山本 忠勝
産経新聞	2月18日	早瀬 廣美
高知新聞	3月5日	Y
文化庁月報	1月号	平芳 幸浩

「ドイツにおけるフルクサス 1962-1994」

期 間：平成13年4月26日(木)～6月10日(日)(40日間)

関西ドイツ文化センターと共催

会 場：国立国際美術館

出品点数 350点

入場者：総数 8,825人 (1日平均 221人)(目標入場者数：4,000人)

<新聞・雑誌等関係記事>

産経新聞	4月15日	
The Asahi Shimbun	20 April	
毎日新聞	5月10日(夕)	岸 桂子
朝日新聞	5月16日	若
日本経済新聞	5月24日(夕)	加藤義夫(美術評論家)
産経新聞	5月25日	
京都新聞	6月2日	清水穰(同志社大学助教授)
ぴあ関西版	4月23日号(No.463)	
Kansai Time Out	May 2001(No.291)	Christopher Stephens, Shiomi Mieko
Kansai Scene	May 2001	

「宮崎豊治 - 眼下の庭 - 」

期間：平成13年6月21日(木)～7月22日(日)(28日間)

会場：国立国際美術館

出品点数 49点

入場者：総数 2,137人 (1日平均 76人)(目標入場者数：2,800人)

<新聞・雑誌等関係記事>

日本経済新聞	6月28日(夕)	
毎日新聞	6月29日(夕)	岸 桂子
神戸新聞	7月3日	田中 真治
産経新聞	7月8日	(H)
日本経済新聞	7月9日(夕)	加藤 義夫(美術評論家)
読売新聞	7月12日(夕)	渡辺 達治
京都新聞	7月14日	(太)
朝日新聞	7月14日(夕)	大西 若人
文化庁月報	6月号	
オール関西	7月号	
書道界	7月号	
Kansai Scene	July 2001 (Issue 15)	Brad Goldstein

「ローリー・トビー・エディソン - からだへの瞑想 - 」

期間：平成13年8月2日(木)～9月2日(日)(28日間)

会場：国立国際美術館

出品点数 100点

入場者：総数 3,716人 (1日平均 133人)(目標入場者数：2,800人)

<新聞・雑誌等関係記事>

神戸新聞	7月20日(夕)	
朝日新聞	8月11日(夕)	大西 若人
産経新聞	8月12日	H
日本経済新聞	8月13日(夕)	加藤 義夫(美術評論家)
朝日新聞	8月17日	
日本経済新聞	8月23日	
毎日新聞	8月23日(夕)	岸 桂子
文化庁月報	7月号	加須屋明子
Meets Regional	9月号(No.149)	山下里加(美術ライター)

「田中信太郎 - 饒舌と沈黙のカノン - 」

期 間：平成13年9月13日(木)～10月14日(日)(28日間)

会 場：国立国際美術館

出品点数 34点

入場者：総数2,982人 (1日平均107人)(目標入場者数：2,800人)

<新聞・雑誌等関係記事>

日本経済新聞	9月27日(夕)	加藤 義夫(美術評論家)
京都新聞	9月29日	太田垣實
産経新聞	9月30日	早
毎日新聞	10月4日(夕)	岸 桂子
読売新聞	10月4日(夕)	木村 未来
朝日新聞	10月6日(夕)	山盛 英司
神戸新聞	10月10日(夕)	
日本経済新聞	10月11日(夕)	
毎日新聞	12月13日(夕)	
artscape	10月14日	村田 真
文化庁月報	8月号	中井 康之

「主題としての美術館 - 美術館をめぐる現代美術 - 」

期 間：平成13年10月25日(木)～12月11日(火)(42日間)

会 場：国立国際美術館

出品点数 66点

入場者：総数6,241人 (1日平均149人)(目標入場者数：6,000人)

共催者：(財)ダイキン工業現代美術振興財団

<新聞・雑誌等関係記事>

朝日新聞	11月8日	田中 三蔵
産経新聞	11月18日	早
読売新聞	11月8日(夕)	木村 未来

日本経済新聞	11月24日	中野 稔
朝日新聞	11月26日	
毎日新聞	12月6日(夕)	岸 桂子
Artforum	September 2001	Rachel Withers
ぴあ関西版	11月5日号	小吹 隆文
文部科学時報	9月号(No.1504)	中西 博之
文化庁月報	10月号	中西 博之
大阪人	12月号	植木啓子(サントリ - ミュ - ジアム [天保山]学芸員)
エルマガジン	12月号(No.297)	岡山 拓
Diatxt.06		加藤 哲弘
artscape		木ノ下智恵子
展評 011		北村 英之

「《現代美術へのいざない》アフター・イメージ - 残像 - 」

期 間：平成13年12月20日(木)～平成14年2月3日(日)(33日間)

会 場：国立国際美術館

出品点数 66点

入場者：総数 2,737人 (1日平均 83人)(目標入場者数：2,000人)

<新聞・雑誌等関係記事>

日本経済新聞	12月20日(夕)	
大阪日日新聞	1月10日	
読売新聞	1月25日(夕)	木村 未来
神戸新聞	1月26日	三上喜美男
版画芸術	No.114	平芳 幸浩
文化庁月報	12月号	平芳 幸浩
アート・トップ	Vol.183 (2001年12月 - 2002年1月)	
藝術公論	1月号	
Esquire	Vol.16 No.2 (2月号)	

「O JUN」

期 間：平成14年2月14日(木)～3月26日(火)(36日間)

会 場：国立国際美術館

出品点数 123点

入場者：総数 7,277人 (1日平均 202人)(目標入場者数：3,600人)

<新聞・雑誌等関係記事>

読売新聞	2002年1月11日東京版(夕)清
神戸新聞	2002年1月17日
日本経済新聞	2002年2月28日(夕)

日本経済新聞	2002年3月11日(夕)	加藤 義夫(美術評論家)
神戸新聞	2002年3月8日	三上喜美男
読売新聞	2002年3月11日(夕)	木村 未来
産経新聞	2002年3月17日首都圏版	渋谷 和彦
産経新聞	2002年3月22日(夕)	早瀬 廣美
版画芸術 114	2001年12月号	
展評	2002年冬号	
文化庁月報	2002年1月号	島 敦彦
Kansai Time Out	2002年2月	Christopher Stephens
ギャラリー	2002年2月号	
ぴあ関西版	2002年2月25日号	山下 里加
美術手帳	2002年3月号	
ヴォーグニッポン	2002年3月	青野 尚子
メモ 男の部屋	2002年3月号	ジョー・スズキ
アエラ	2002年3月4日号	原 久子
ぴあ関東版	2002年3月11日号	斎藤 博美
BRUTUS	2002年4月1日号	住吉 智恵
etc.	2002年4月号	白坂ゆり
流行通信	2002年5月号	住吉 智恵

国際交流展「安斎重男展」

会場：ポーランド ブンケル・シュトゥーキ現代美術ギャラリー
クラクフ

共催者の都合で平成14年に開催

(平成14年9月6日(金)～10月6日(日)開催予定)

地方巡回展の実施

国立博物館・美術館巡回展

「信仰と美術」

期間：平成14年1月12日(土)～2月10日(日)

会場：和歌山県立博物館

独立行政法人国立博物館(奈良国立博物館)と共催

入場者：総数 2,737人 (1日平均83人)

期間：平成14年2月19日(火)～3月21日(木)

会場：徳島県立博物館

独立行政法人国立博物館(奈良国立博物館)と共催

入場者：総数 4,304人 (1日平均159人)

(2) 収蔵品の貸与

国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に実施した。

13年度貸出件数27件 貸出作品総数117件

(3) アンケート調査の実施

下記の展覧会においてアンケート調査を実施した。

[展覧会]

「ドイツにおけるフルクサス 1962-1994」

実施期間：平成13年5月24日(木)～平成13年5月27日(日)(4日間)

アンケート項目：別紙のとおり

結果：展覧会について8割の肯定的意見があった。

「宮崎豊治 - 眼下の庭 - 」

実施期間：平成13年7月12日(木)～平成13年7月15日(日)(4日間)

アンケート項目：別紙のとおり

結果：展覧会について9割の肯定的意見があった。

「ローリー・トビー・エディソン - からだへの瞑想 - 」

実施期間：平成13年8月23日(木)～平成13年8月26日(日)(4日間)

アンケート項目：別紙のとおり

結果：展覧会について9割の肯定的意見があった。

「田中信太郎 - 饒舌と沈黙のカノン - 」

実施期間：平成13年9月20日(木)～平成13年9月23日(日)(4日間)

アンケート項目：別紙のとおり

結果：展覧会について9割の肯定的意見があった。

「主題としての美術館 - 美術館をめぐる現代美術 - 」

実施期間：平成13年11月22日(木)～平成13年11月25日(日)(4日間)

アンケート項目：別紙のとおり

結果：展覧会について8割の肯定的意見があった。

「《現代美術へのいざない》アフター・イメージ - 残像 - 」

実施期間：平成14年1月10日(木)～平成14年1月13日(日)(4日間)

アンケート項目：別紙のとおり

結果：展覧会について9割の肯定的意見があった。

「O JUN」

実施期間：平成14年2月21日(木)～平成14年2月24日(日)(4日間)

アンケート項目：別紙のとおり

結果：展覧会について8割の肯定的意見があった。

3 調査研究

<p>(年度計画)</p> <p>(1) 中期計画に基づき、調査研究を計画的に実施する。</p> <p>(2) 客員研究員を招聘し、調査研究活動を推進する。</p> <p>(3) 各館の調査研究の成果については、研究紀要、図録への論文発表等によって公表する。</p>

(1) 調査研究の実施

欧米の現代美術に関する調査研究(5名、12件)

ア. 研究者氏名: 中井康之

執筆書誌: 「アルテ・ポーヴェラ 現代イタリア美術の一動向」
『美術の窓』No.212(2001年5月号)

イ. 研究者氏名: 安来正博

講演: 「マーク・ロスコとアメリカ美術」
和歌山県立近代美術館 2002年2月

執筆書誌: 「作品解説 パブロ・ピカソ《道化役者と子供》」『ダイキン・タイムス』
2001年12月号

ウ. 研究者氏名: 中西博之

執筆書誌: 「あらゆるコミュニケーションはコラージュである
(ヨハネス・クラッタース、ガブリエレ・クナップシュタイン)」
(独文和訳)『ドイツにおけるフルクサス1962-1994』展カタログ
[日本語翻訳冊子] 2001年4月 国立国際美術館

「展覧会出品作品紹介 クリスチャン・フィリップ・ミュラー
《椅子としての国立国際美術館の肖像》」
『国立国際美術館月報』No.110(2001年11月号) 国立国際美術館

「美術館についての美術展」
『主題としての美術館 美術館をめぐる現代美術』展カタログ
(リーフレット) 2001年11月 国立国際美術館

「展覧会出品作品紹介 メル・ジューグラー《無題(エア・フィルター)》」
『国立国際美術館月報』No.112(2002年1月号) 国立国際美術館

エ. 研究者氏名: 加須屋明子

執筆書誌: 「館蔵品紹介 ローリー・トビー・エディソン
《トレーシー・ブラックストーン&デビー・ノトキン》」
『国立国際美術館月報』No.107(2001年8月号) 国立国際美術館

「ローリー・トビー・エディソン 覆す力」
『近作展-26 ローリー・トビー・エディソン - からだへの瞑想 - 』
リーフレット 2001年8月 国立国際美術館

オ. 研究者氏名: 平芳幸浩

執筆書誌：「ポップ・アートとレディ・メイド - vulgarity の表象を巡って - 」
『美学』No.204（2001年春号）
「WDR（西部ドイツ放送）の音響芸術スタジオで上演されたフルクサス・ラジオ・アート（クラウス・シェーニク）」
（英文和訳）『ドイツにおけるフルクサス 1962 - 1994』展カタログ
[日本語翻訳冊子] 2001年4月 国立国際美術館
「展覧会出品作品紹介 ジョージ・マチューナス《フルックスキット》」
『国立国際美術館月報』No.104（2001年5月号） 国立国際美術館

日本の現代美術に関する調査研究（3名、8件）

ア．研究者氏名：島敦彦

執筆書誌：「展覧会出品作品紹介 0 JUN《拳兵図》」
『国立国際美術館月報』No.113（2002年2月号） 国立国際美術館
「0 JUNの纏うもの」
『近作展-27 0 JUN』リーフレット 2002年 国立国際美術館

イ．研究者氏名：中井康之

執筆書誌：「館蔵品紹介 田中信太郎《マイナー・アート A.B.C.》」
『国立国際美術館月報』No.103（2001年4月号） 国立国際美術館
「二人の田中信太郎」
『田中信太郎 饒舌と沈黙のカノン』展カタログ 2001年9月
国立国際美術館
「展覧会出品作品紹介 田中信太郎《点・線・面》」
『国立国際美術館月報』No.108（2001年9月号） 国立国際美術館

ウ．研究者氏名：安來正博

執筆書誌：「展覧会出品作品紹介 宮崎豊治《身辺モデル - 類似化》」
『国立国際美術館月報』No.105（2001年6月号） 国立国際美術館
「“身辺モデル”から“眼下の庭”へ 身体と風景をめぐる宮崎豊治の試み」
「年譜・文献目録」
『宮崎豊治 眼下の庭』展カタログ 2001年6月 国立国際美術館
「宮崎豊治“眼下の庭” 鉄の彫刻に刻まれた身体と風景」
『オール関西』7月号

日本及び周辺領域の現代美術に関する調査研究（2名、3件）

ア．研究者氏名：安來正博

執筆書誌：「コレクション 国立国際美術館」『博物館研究』第37巻第3号
(2002年3月)

イ．研究者氏名：加須屋明子

研究内容：「ポストメディア論 - 電子時代における芸術作品 - 」

2001 年度科学研究費補助金（萌芽的研究、継続）

「四大（地・水・火・風）の感性論：思想・アート・自然科学の関わり
についての基盤研究」

2001 年度科学研究費補助金（基盤研究）研究分担（代表 岩城見一）

絵画・版画等に関する調査研究（2 名、5 件）

ア．研究者氏名：安來正博

執筆書誌：「館蔵品紹介 野田裕示《WORK-641》」

『国立国際美術館月報』No.109（2001 年 10 月号） 国立国際美術館

「石垣栄太郎の存在」

『美術運動史研究会ニュース』 2001 年 9 月

口頭発表：「フォト・デッサン 瑛九による絵画的写真表現の試み」

日本映像学会関西支部第 36 回研究会 2001 年 12 月 関西学院大学

イ．研究者氏名：平芳幸浩

執筆書誌：「展覧会出品作品紹介 秋岡美帆《光の間》」

『国立国際美術館月報』No.111（2001 年 12 月号） 国立国際美術館

「イメージをめぐる」

『《現代美術へのいざない》アフター・イメージ - 残像 - 』展

リーフレット 2001 年 12 月 国立国際美術館

彫刻・インスタレーション等に関する調査研究（3 名、4 件）

ア．研究者氏名：島敦彦

執筆書誌：「館蔵品紹介 岡崎和郎、瀧口修造《検眼図》」

『国立国際美術館月報』No.106（2001 年 7 月号） 国立国際美術館

イ．研究者氏名：中井康之

執筆書誌："MONO-HA"

Le Tribu dell'Arte Galleria Comunale d'Arte Moderna e Contemporanea,
Roma, 2001

ウ．研究者氏名：安來正博

執筆書誌：「展覧会出品作品紹介 宮崎豊治《身辺モデル-類似化》」

『国立国際美術館月報』No.105（2001 年 6 月号） 国立国際美術館

「企画展 宮崎豊治-眼下の庭」『文化庁月報』2001 年 6 月号

他の美術館等における調査研究に対する協力（1名、1件）

ア．研究者氏名：三木哲夫

執筆書誌：「1920年代の創作版画運動 展覧会を中心に」

『日本の版画 III 1921-1930』展カタログ 2001年9月

千葉市美術館・中津市教育委員会芸術文化センター建設準備室・

宇都宮美術館

調査協力：南桂子作品及び文献の調査協力

「南桂子・宮脇愛子展」 高岡市美術館

2001年7月3日（火）～9月2日（日）

4 教育普及

（年度計画）

- （1）国内外の美術館等との交換図書等による資料の積極的収集を図ると共に情報コーナーの設置等ファレンス機能を充実を図る。
- （2）館が収蔵している作品のデータ・画像入力を行い、広く公衆のニーズに応えるため、データベース化を推進する。
- （3）国内外の美術館等との連携を強化し、情報コーナー、アトライブラリー、資料閲覧室等、情報資料関係の施設の整備・充実を図る。
- （4）児童生徒を対象とした教育普及事業を実施する。
- （5）講演会等を実施する。
- （6）美術館関係者を対象とした、研修事業を実施する。
- （7）他の機関が実施する研修への協力を実施する。
- （8）各館それぞれに研究成果を踏まえて出版事業等を行う。
- （9）それぞれの館のホームページを積極的に活用して広く公衆への普及及び広報を行う。また、4館共同の広報体制を整備するため法人のホームページを作成し、中期目標、中期計画、年度計画等を公表する。
- （10）ボランティア等の在り方や企業との連携等について検討を行う。
- （11）新たな美術館施設の円滑な運営について

（1）作品データ等のデータベース化の推進

収蔵作品(4,195点)のデータ・画像入力を行い、データベース化を推進した。

13年度は文字データ179件、画像データ100件（2月末現在）の入力を行い、この結果、文字データについては、全収蔵作品、画像データについては、1,305点が入力済みとなった。

（2）児童生徒に対する教育普及事業の実施

児童生徒を対象とした次の教育普及事業を実施した。

子どものためのワークショップ 4回 総参加者数97名

夏休みこどもワークショップ

実施日 平成13年8月4日（土）

内容 「からだをみよう、じぶんをみよう」

作家 「ロリ・トビ・エディソン」

参加者 「18名」

実施日 平成13年8月18日(土) 平成13年8月19日(日)

内 容 「じぶんだけのえをかこう! きみもみらいのピカソになれる...、
かもよ。」

画 家 「野 田 裕 示」

参加者 8月18日 24名、 8月19日 29名

春休みこどもワークショップ

実施日 平成14年3月23日(土)

内 容 「ペタペタ石鹸王国」

画 家 「徳 田 憲 樹」

参加者 「26名」

子どものためのビデオ上映 4回 総参加者数 53名

実施日 平成13年4月14日(土) 平成13年12月22日(土)

平成14年2月 9日(土) 平成14年 3月23日(土)(予定)

内 容 「なぜ、これがアートなの?」

参加者 4月14日5名、 12月22日19名 14年2月9日12名

14年3月23日17名

(3) 講演会等の実施

講演会

5回 総参加者数570名

実施日	内 容	講 演 者	参加人数
H13. 4.28	「ドイツにおける フルク サス展をめぐる」	ガブリエーレ・クッパ・シュタイン	110名
H13. 7. 4	「21世紀の美術館 - 体験型遊園地か教育施設 か?」 於：関西ドイツ文化センター	ハンブルグ美術館長 ウヴェ・シュネーデ 国立国際美術館長 宮島 久雄	50名
H13. 7.14	「作者と語る」(対談)	宮崎 豊 治×田中恒子	110名
H13. 9.22	「作者と語る」(対談)	田中信太郎×種村季弘	150名
H14. 2.23	「作者と語る」	O JUN	150名

ギャラリー・トーク 7回 総参加者数392名

実施日	内 容	講 演 者	参加人数
H13. 6.23	「展示解説 - 宮崎豊治展」	国立国際美術館主任研究官 安来 正博	25名

H13. 8.25	「展示解説 - ロリー・ヒュー・テイツ展」	国立国際美術館主任研究官 加須屋 明子	27名
H13.10.13	「展示解説 - 田中信太郎展」	国立国際美術館主任研究官 中井 康之	90名
H13.11.24	「展示解説 - 主題としての美術館展」	国立国際美術館主任研究官 中西 博之	60名
H14. 1.12	「展示解説 - 《現代美術へのいざない》展」	国立国際美術館研究員 平 芳 幸 浩	55名
H14. 1.26	「展示解説 - 《現代美術へのいざない》展」	国立国際美術館研究員 平 芳 幸 浩	80名
H14. 3. 9	「展示解説 - O JUN展」	国立国際美術館主任研究官 島 敦 彦	55名

シンポジウム 1回 総参加者数80名

実施日	内 容	講 演 者	参加人数
H13.10.27	「主題としての美術館」	竹岡雄二、ジェイソン・シモン、 メル・・ジ・グラ、クリスチャ ン・ミュラ、ウテ・リンドナ、 イネス・ロンバルディ(以上出品 作家)ロランド・メニク(クレ ヴェ美術館学芸員)	80名

パフォーマンス 2回 総参加者数600名

実施日	内 容	公 演 者	参加人数
H13.4.28	《コミュニケイティヴ・ モード・ショー》	作 家 齋藤 陽子	250名
H13.5.12	《フルクサス裁判 破壊的ピアノ・パフォーマン スとコンピュータによる》	フルクサス・アーティスト 塩見 允枝子	350名

映画上映 2回 総参加者数420名

実施日	内 容	参加人数	
		13時～	15時～
H13.5.26	『ディーター・ロート：短編集 1957 - 62』 『ジョン・ケージ：機械の時代の音楽』 『アーサー・クプケ：アーサー・クプケの肖像』 『ジョー・ジョーンズ：コンピュータがビデオを生み出した』	80名	100名
H13.6.9	『ディーター・ロート：短編集 1957 - 62』 『ジョン・ケージ：機械の時代の音楽』 『アーサー・クプケ：アーサー・クプケの肖像』 『ジョー・ジョーンズ：コンピュータがビデオを生み出した』	110名	130名

ビデオ上映 5回 総参加者数111名

実施日	内 容	参加人数	
		13時～	15時～
H13.7.28	「セザンヌ - 12通の手紙 - 」	2名	7名
H13.8.11	「クレール - 色彩の管弦楽 - 」	20名	20名
H13.9.8	「デヴィット・ホックニー」	3名	5名
H13.11.10	「KAWAMATA PROJECTS BY GILLES COUDERT」	5名	7名
H13.12.8	「デュシャン」	20名	22名

(4) 他機関の研修への協力

美術館関係者を対象とした、次の研修事業を実施した。

ア．中級学芸員実務研修として愛媛県美術館学芸員1名を受入れた。

他の機関が実施する研修への協力を実施した。

ア．文化庁が実施する中級学芸員研修

45機関45名受入

イ．大学生の学芸員資格取得のための博物館実習への協力

15大学21名受入

(5) 「年報」等の発行事業等

研究成果を踏まえて次の出版事業等を行った。

「平成12年度年報」

「国立国際美術館概要」

「国立国際美術館概要」(英文)

展覧会に伴うリーフレットの発行

図 録 :

企画展「ドイツにおけるフルクサス 1962-1994」

企画展「宮崎豊治 - 眼下の庭 - 」

企画展「田中信太郎 - 饒舌と沈黙のカノン - 」

特別展「主題としての美術館 - 美術館をめぐる現代美術 - 」

国立博物館・美術館巡回展「信仰と美術」

リーフレット:

企画展「ドイツにおけるフルクサス 1962-1994」

近作展 26「ローリー・トビー・エディソン - からだへの瞑想 - 」

特別展「主題としての美術館 - 美術館をめぐる現代美術 - 」

企画展「《現代美術へのいざない》アフター・イメージ - 残像 - 」

近作展 27「O JUN」

「ジュニアガイドブック」

「月報」 12回発行

展覧会案内

展覧会案内英文

(6) ホームページの活用

ホームページを積極的に活用して広く公衆への普及及び広報を行った。

アクセス件数 日本語 135,377件 英語 17,555件 (1月現在)

5 その他の入館者サービス

(年度計画)

(1) 高齢者・身体障害者等に配慮した設備等の充実を図る。建物のバリアフリー化を進め、高齢者・身体障害者等にやさしい美術館を目指す。

(2) 案内情報の充実、車椅子の提供等、入館者サービスの充実を図る。

(3) 展示説明の見直しなど、鑑賞環境の充実に努める。又、音声ガイドの検討及び作品リストの無料配布等を行う。

(4) 小中学生の常設展入場料の無料化や観覧時間拡充の検討を行う。

(5) フリーゾーンの活用、レストラン及びミュージアムショップの充実など附属施設の充実を図る。

(1) 高齢者・身体障害者等に配慮した設備等の充実等

高齢者等に配慮した設備等の充実を図った。

拡大鏡(ルーペ)の設置(20個)

(2) 案内情報の充実、車椅子の提供等、入館者サービスの充実

案内情報の充実、入館者サービスの充実を図った。

美術館リーフレット英文 1回発行

(3) 鑑賞環境の充実

展示説明の見直しなど、鑑賞環境の充実に努め以下の作品リストの無料配布等を行った。

リーフレット：

企画展「ドイツにおけるフルクサス 1962-1994」

近作展 26「ロ・リー・トビー・エディソン - からだへの瞑想 - 」

特別展「主題としての美術館 - 美術館をめぐる現代美術 - 」

企画展「《現代美術へのいざない》アフター・イメージ - 残像 - 」

近作展 27「O JUN」

(4) 小中学生の常設展入場料の無料化や観覧時間拡充の検討

小中学生の常設展入場料の無料化や観覧時間拡充の検討を行い、教育普及のため平成14年4月1日から小中学生の常設展、企画展の入場料の無料化を行うこととなった。

また、当館では、それに併せ新館移転までは、建物の構造上の点及び現代美術の教育普及のため特別展も無料とすることとした。

観覧者サ - ビスのため夜間開館を4回実施した。総入館者数385名

平成13年11月10日(入館者109名)

平成13年11月17日(入館者 13名)

平成13年11月23日(入館者 27名)

平成13年11月24日(入館者236名)

6 職員の研修の実施(その他の主務省令で定める業務運営に関する事項)

(年度計画)

(1) 職員の意識向上を図るため、次の職員研修を実施する。

新規採用者・転任者職員研修、 接遇研修

(2) 外部の研修に職員を積極的に派遣し、その資質の向上を図る。

(1) 館内において接遇研修を実施した。

(2) 人事院研修へ派遣、参加させた。

(1名) 近畿地区係長研修 平成13年7月3日(火)～7月6日(金)